

国立大学法人お茶の水女子大学
ジェンダー研究所

IGS

2016年度
事業報告書

Institute
for
Gender Studies
Ochanomizu
University

ジェンダー研究所

2016年度事業報告書によせて

グローバル女性リーダー育成研究機構長／副学長 猪崎 弥生

グローバル女性リーダー育成研究機構が発足して2年目の年度が終了しました。ジェンダー研究所は、研究プロジェクトの推進や、国内外から多くの第一線の研究者を招聘しての国際シンポジウムやセミナー開催、大学院生を対象とした教育プログラムの実施などの事業に、精力的に取り組みました。同じく機構下に設置されたグローバルリーダーシップ研究所と共に、グローバル女性リーダー育成のための国際的教育研究拠点形成という目標に向けて着実に前進した1年だったと思っております。

2016（平成28）年9月には、第1回の機構の評価委員会が開催されました。学外から委員会にご参加くださった、目黒依子先生（上智大学名誉教授）、中林美恵子先生（早稲田大学教授）からは、お茶の水女子大学および両研究所前身機関の、過去の実績を資源とする形の事業計画について、その意欲と社会的意義を評価していただき、成果を期待する旨のコメントを頂戴いたしました。また、設立以来約1年半の事業活動については、大学および関係者のコミットメントの高さを肯定する評価をいただいています。今後の活動への提言としては、両研究所の連携や、研究面での深化の重要性、数値的な目標達成だけでなく、質を意識した成果指標設定が望ましいなど、様々な価値あるご指摘をいただきました。両研究所の連携については、年度後期に、2018（平成30）年度開催予定の機構が主催する、国際シンポジウムの準備委員会が発足するなどの進捗があり、その他の点についても、改善のための検討が進められています。

この2年間は、ジェンダー研究所にとって、大学のミッション達成戦略と新設された機構の枠組みのもとで、どのような発展的な取り組みが可能かを探りながら、拡大を図る段階にあったと思います。次年度以降は、これまでの経験を糧に、また新たな事業展開が進められることでしょう。

本学が、「グローバル女性リーダーの育成」というミッションの達成に向けて、研究教育活動に真摯に取り組んで、実効性の高い事業を推進し、その成果をグローバルに発信していくことは、本学の、ひいては日本の高等教育機関、研究機関の、グローバルな研究教育現場での価値を高めることにも寄与すると心得て、引き続き事業に取り組む所存です。上記評価委員会にご参加くださった学内外の先生方を始め、本研究所事業へご支援、ご協力くださいました皆様に、心から御礼申し上げますとともに、今後とも、ご指導ご鞭撻の程、よろしく願い申し上げます。

ジェンダー研究所2016年度の活動を振り返って

ジェンダー研究所長 石井クンツ 昌子

ジェンダー研究センターからジェンダー研究所に改組された2年目である2016（平成28）年度は、前年度に立ち上げた組織体制を基盤として、活動の幅を広げる年となりました。所長以下、専任教員、研究員、研究系スタッフ、事務系スタッフが協力して研究プロジェクト推進や国際シンポジウム等開催に取り組みました。その結果、年間を通して活発な事業活動が展開され、前年を上回る数の事業数をこなし、研究所の質を向上させる成果を残すことができたと自負しています。

研究所事業の核となっている研究プロジェクトについては、前年度から引き続いての実施プロジェクトはその内容を深化させており、さらに、外部資金を獲得した2件を含む4件の研究プロジェクトが新たに開始されるなどの広がりも見られました。また、研究プロジェクトが主体になっての国際シンポジウムやセミナーも数多く開催され、研究がけん引する事業形態の方向性が、高い成果を上げていると理解しています。

国際シンポジウム等開催の際、参加者に感想票を書いてもらうことを促していますが、回収した感想文面には、当該イベントの開催価値を認める声も多く、研究所が企画・運営するひとつひとつのイベントが日本のジェンダー研究発展に果たしている役割は、決して小さいものではないと判断できるかと思えます。特別招聘教授やシンポジウム等の登壇者たちから、意義深い事業に参加できたとの謝辞を受け取ることも少なくありません。また、2016年度には、グローバル女性リーダー育成研究機構評価委員会が開催され、評価委員からは、現在の「研究」を中心に据えた事業推進形態やそこからの成果、また、女性文化資料館開設以来40年の歴史の中で蓄積されてきた実績を生かしての事業展開を評価するコメントをいただきました。こうした評価を受ける事業実績を上げられていることを、とても嬉しく思っていますが、同時に課題も指摘されており、今後は更にジェンダー研究所の活動を強化していく所存です。

研究所では、事業成果の社会還元を意識を注いでいますが、大学ミッションの一翼を担う存在として、大学諸事業への貢献や学内への成果の還元も重要です。シンポジウムやセミナー開催のほかに意識して実施しているのは、国際的な学びの環境の提供です。特別招聘教授プロジェクトでは、英語の使用を常としているほか、グローバルな研究・教育活動を日常としている研究者たちと接することで、ボーダーレスな知性と感性を学び取ってもらうことも意図しています。グローバルに活躍する女性リーダーの育成に、この学びの機会が役立つことを期待し、かつこの場への参加の呼びかけに、さらに力を入れる必要を感じているところです。

また、研究所事業の充実は、学内の他機関との共催セミナーの開催や、学内研究者の研究所開催イベントへの登壇、参加など、様々な形の学内各方面からの協力で成り立っているところも大きいです。そしてこの点は、学外の協力者、協力機関についても同様であり、ここに、心からの感謝を表します。

【目次】

1. ジェンダー研究所 2016（平成 28）年度事業概要.....	7
ジェンダー研究所概要	
2016 年度事業概要	
2. 研究プロジェクト.....	13
2016 年度研究プロジェクト成果報告	
（Ⅰ）経済とジェンダー	
（Ⅱ）政治とジェンダー	
（Ⅲ）生殖とジェンダー	
（Ⅳ）歴史・思想とジェンダー	
2016 年度外部資金獲得状況	
学会等活動一覧	
3. 国際シンポジウム・セミナー.....	45
2016 年度 国際シンポジウム・セミナー・研究会概要	
主催国際シンポジウム詳細	
金融化、雇用、ジェンダー不平等	
家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較	
女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考	
明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎	
なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙	
共催海外・国内シンポジウム詳細	
モダン再考：戦間期日本の都市・身体・ジェンダー	
『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう？』出版記念トークセッション	
主催 IGS セミナー・研究会詳細	
AID 出生者のドナー情報を得る権利／現代日本における家庭と学校教育：外国人研究者の視点と研究／ポスト新自由主義の未来を想像する：エクアドル市民革命のクィアな（不）可能性／同性カップルの家族づくりと AID／訳者と語る『京城のモダンガール』／「冷戦とジェンダー」研究会キックオフミーティング／江戸時代の武家の女性たち／出生前検査をめぐる倫理／ジェンダー・食・帝国：「他者を食べる」物語と記憶／台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開／立ち位置を理解する：日本の新宗教フィールドワークからの考察／日本における女性と経済学／『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス：アメリカ合衆国の動向に注目して／生と医療のジェンダー政治学／ジェンダーと政治的代表性	
共催セミナー・研究会詳細	
周産期精神疾患、母子間愛着、および情緒的コミュニケーション／シルヴィア・ウォルビー教授とハイディ・ゴットフリート教授との研究交流会—「知識経済」と『Crisis』後のフェミニズム	
協力機関企画シンポジウム	
イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて／ポスト「戦後 70 年」とジェンダー史：地域のジェンダー実践を思考の手がかりに	

4. 特別招聘教授プロジェクト.....	105
2016年度特別招聘教授プロジェクト概要	
スーザン・D・ハロウェイ特別招聘教授	
エリカ・バッフェッリ特別招聘教授	
ラウラ・ネンツィ特別招聘教授	
5. 国際研究ネットワーク.....	117
2016年度国際研究ネットワーク構築概要	
1) 国際的な共同研究・研究交流	
2) 海外研究者フェローシップ受入	
6. 教育プロジェクト.....	127
1) 国際教育交流プログラム「AITワークショップ」	
2) 専任・特任教員担当講義	
7. 学術成果の発信.....	135
1) 学術雑誌『ジェンダー研究』	
2) プロジェクト報告書 IGS Project Series による成果刊行	
8. 文献収集・資料整理・公開.....	143
9. ウェブサイトでの情報発信.....	147
10. 社会貢献.....	151
【資料】	
①構成メンバー.....	156
②研究プロジェクト一覧.....	166
③協力研究者一覧.....	176
④国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧.....	180
⑤国内外共同研究・研究交流一覧.....	188
⑥国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則.....	189
⑦国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則.....	191
⑧『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程.....	192
⑨ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー.....	194

1.

ジェンダー研究所 2016(平成28)年度 事業概要

ジェンダー研究所概要

2016 年度事業概要

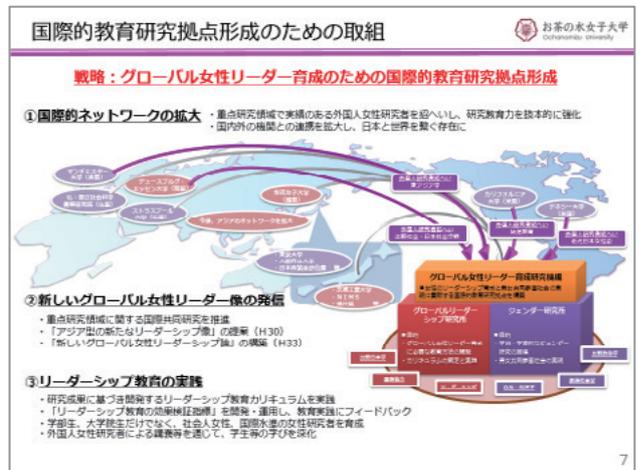
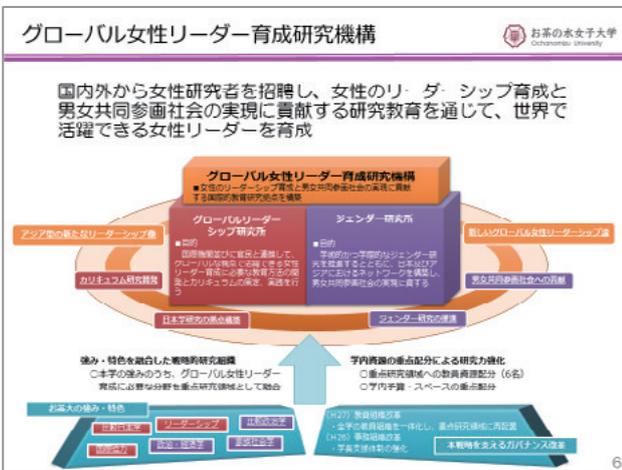
▶ジェンダー研究所概要

40年の歴史を誇る日本のジェンダー研究の拠点

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、国際的な学術ネットワークの構築を主要目的とし、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、国際的教育プログラムの実施、学術雑誌の刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

ジェンダー研究所の歴史は1975（昭和50）年設立の女性文化資料館に遡る。1986（昭和61）年に女性文化研究センターに改組され、1996（平成8）年には、国際的なジェンダー研究実施を目指すジェンダー研究センターとなった。2003年には21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」が採択され、その成果の一環として、お茶の水女子大学大学院に博士前期課程ジェンダー社会科学専攻、博士後期課程ジェンダー学際研究専攻が設置されるなど、これまでも本学におけるジェンダー研究、ジェンダー研究教育の推進への貢献を重ねている。そして、お茶の水女子大学が創立140周年を迎えた2015（平成27）年、ジェンダー研究センターは「ジェンダー研究所」に改組され、「グローバルリーダーシップ研究所」と共に、「グローバル女性リーダー育成研究機構」構成研究所となった。

お茶の水女子大学は、2013（平成25）年の国立大学のミッションの再定義にあたり、「グローバル女性リーダーの育成」を大学ミッションと設定した。グローバル女性リーダー育成研究機構は、そのミッション達成のための戦略的研究組織のひとつであり、国際的に活躍する女性リーダー育成のための国際的教育研究拠点形成を目標としている。ジェンダー研究所は、これまでに培ってきたジェンダー研究・教育および国際的学術ネットワーク構築の実績を資源に、グローバルリーダーシップ研究所と協働し、本学における女性のリーダーシップ育成と男女共同参画社会の実現に貢献する国際的研究拠点構築に務める。



[参照:本報告書 189～190 頁 資料⑥「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」]

ジェンダー研究所（Institute for Gender Studies (IGS)）の沿革と国内外の動き

1875	東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）開校
1949	お茶の水女子大学設立
1975	女性文化資料館設立 国際女性年第1回世界女性会議、メキシコ・シティで開催
1979	国連総会「女性差別撤廃条約」採択
1980	第2回世界女性会議、コペンハーゲンで開催
1985	第3回世界女性会議、ナイロビで開催 日本政府「女性差別撤廃条約」批准、「男女雇用機会均等法」成立
1986	女性文化研究センター設立
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
1995	第4回世界女性会議、北京で開催
1996	ジェンダー研究センター（IGS）設立（日本の大学で初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設）
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
1999	「男女共同参画社会基本法」成立
2000	国連特別総会「女性2000年会議」、ニューヨークで開催
2003	21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」採択
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
2010	UN WOMEN 設立
2015	グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立



▶ジェンダー研究所 2016 年度事業概要

先端的ジェンダー研究の充実と国際的な発信へ

ジェンダー研究所は今年で組織改組の2年目を迎え、研究プロジェクトの推進、大学院教育への貢献、国際シンポジウムや公開セミナーの開催、研究成果等の情報発信や社会還元など多岐にわたる成果を上げた。2016年度の研究活動は、昨年度の改組初年度に、新組織として固めた組織基盤を足場に、先端的ジェンダー研究のさらなる充実を図る一方で、研究成果の国際的な発信につとめた。

研究所の構成員が関わる研究プロジェクトやシンポジウム等開催事業には、テーマ的な拡大も見られ、ジェンダー研究の学際性、多様性が、本年度実施事業の一覧に顕在する成果が得られた。日本を代表するジェンダー研究機関、そして男女共同参画社会の実現に貢献する国際的ジェンダー研究拠点構築という、研究所事業の方向性を明らかに示す事業拡大の形であった。

また、2016年9月には、グローバル女性リーダー育成研究機構評価委員会が開催され、機構設立以来の活動に関する評価と共に、今後の事業展開に関する提言を受けており、提言に基づいた計画立案が進められている。

構成メンバー

2016年度は、海外から3名の特別招聘教授を招き、それぞれ歴史、人類学、社会学におけるジェンダー研究の新しい動向を紹介してもらい、国内研究者らと交流を深めた。日本学術振興会外国人特別研究員のユン氏は、期間を一年延長しており、受入研究者との共同研究に、さらなる進展が見られた。拡大した研究所の活動を支えるために、事務局機能の強化を図り、4月から2名のアカデミックアシスタントを新規採用した。研究所の構成メンバーひとりひとりが責任感を持って行うチームワークが研究所の日頃の活動や拡大の大きな支えとなっている。

[参照:本報告書 189～190 頁 資料⑥「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」
156～165 頁 資料①「構成メンバー」]

研究プロジェクト

研究所の柱となる研究プロジェクトは、4研究分野において行っている。(Ⅰ)経済とジェンダー(Ⅱ)政治とジェンダー(Ⅲ)生殖とジェンダー(Ⅳ)歴史・思想とジェンダーの各分野は、独自性を維持しながら有機的につながり、総合的な研究成果を達成することを目的としている。このプロジェクトの中で、2016年度は、特任リサーチフェロー2名がそれぞれ外部資金獲得しており、研究資金別にみると、IGS研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が7件、研究代表者または分担者として外部資金を獲得しての研究プロジェクトが9件、これに、3名の特別招聘教授それぞれのプロジェクトが加わり、合わせて19件となった。それぞれのプロジェクト活動をコアとした、研究会やシンポジウム開催への活動展開が活発に行われた。学会発表や投稿論文、書籍刊行による成果発信も積極的に進められている。

[参照:本報告書 13～44 頁「研究プロジェクト」]

国際シンポジウム等の開催

2016年度は、シンポジウムやセミナーの内容がさらに多様性に富むものとなった。シンポジウムやセミナータイトルの一覧を見ると、前年度までに多く見られた社会科学系研究テーマに、近現代史や文学

といった、人文科学研究系のテーマが加わっていることがわかる。さらに、LGBT の社会的包摂や、2016 年アメリカ大統領選挙結果のジェンダー分析など、最新の時事問題についての議論の場も提供している。各イベントには国内外の第一線の研究者を招聘しているほか、学内外の他機関と協力しての開催事業も数多くあり、研究所を中心としたジェンダー研究ネットワークのつながりを強める機会にもなっている。主催国際シンポジウム 5 件、国内シンポジウム 1 件、海外連携機関共催国際シンポジウム 1 件、主催 IGS セミナー 12 件、主催 IGS 研究会 2 件、学内他機関との共催セミナー・研究交流会 2 件、協力機関企画シンポジウム 2 件を開催している。うち、研究所が主体となって開催運営したものは 21 件あり、実施数は昨年を大きく上回ったことに加え、中には、130 名を超える参加者を得たものもある。また、イベント事業の位置づけはされていないが、研究所内では板井広明特任講師企画によるランチョンセミナーが実施されている。

[参照:本報告書 45～104 頁「国際シンポジウム・セミナー」]

特別招聘教授プロジェクト

特別招聘教授には、特に、本研究所事業の研究、教育、ネットワーク構築の面での、先進性および国際性の向上への寄与が期待されている。2016 年度は、スーザン・ハロウェイ氏（米・カリフォルニア大学バークレー校教授）、エリカ・バッフェツリ氏（英・マンチェスター大学准教授）、ラウラ・ネンツイ氏（米・テネシー大学教授）の 3 名を招聘した。3 名とも、国際シンポジウムやセミナーの企画運営を含む職務に熱意をもって取り組み、それぞれの企画は、登壇する研究者の最新の研究成果が発表されるなど、刺激的なものであった。また、特別招聘教授の貢献は研究所事業に限られたものではなく、例えば、ハロウェイ氏は本学附属の幼児教育機関を視察し、提言をまとめている。また、ネンツイ氏は、大学院において日本史研究をテーマとする英語による授業を担当している。

[参照:本報告書 191 頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則」
および 105～116 頁「特別招聘教授プロジェクト」]

国際研究ネットワーク

2016 年度は、前年度までに培ってきた研究連携関係が、国際シンポジウムなどの形で成果発信を成している。足立眞理子教授が進めてきたアルザス・欧州日本学研究所およびストラスブール大学との研究交流は、2017 年 3 月、ストラスブールにおける国際シンポジウム開催を実現させており、シンポジウム成果は、フランスにおいて書籍刊行予定である。申琪榮准教授が参加している、日米女性政治学者シンポジウム（JAWS）は、同じく 2017 年 3 月に、本学において、前年に実施されたアメリカ大統領選挙を主題とした国際シンポジウムや研究会を開催した。この機会には日米の研究グループのメンバーが本学に集まり、ネットワーク関係の強化が図られた。このほか、前年度にセミナー講師を務めたオーストラリア・モナシュ大学のミルズ氏の再来日の機会に再度セミナーを開催しており、さらなる連携関係の構築が期待される。2016 年度に、国際シンポジウムや IGS セミナーのために招聘した研究者は、海外 13 名、国内 23 名であったが、このほかにも多くの研究者との協力関係が構築されている。

[参照:本報告書 117～126 頁「国際研究ネットワーク」]

教育プロジェクト

前年度に引き続き、アジア工科大学院大学環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻との交換研修プログラム「AIT ワークショップ」の実施と、所属教員による学部・大学院等での講義、特別招聘教授等による大学院生対象英語セミナーが実施された。

AIT ワークショッププログラムにおける AIT からの受入研修生は修士課程院生 2 名であり、本学からの派遣は博士前期課程ジェンダー社会科学専攻院生 4 名である。今年度は、板井広明特任講師が、大学

院の非常勤講師としての委嘱を受け、正式に AIT ワークショップ参加を単位取得要素とする大学院科目「国際社会ジェンダー論演習」を担当している。このほかにも、仙波由加里特任リサーチフェローが、本学の英語によるサマープログラムの講師を務めた。

ネットィ特別招聘教授は、博士前期課程比較社会文化学専攻歴史文化学コース「歴史資料論特論」を担当し、英語による講義を実施した。そして、特別招聘教授をはじめとする、海外からの講師による大学院生対象のセミナーは、英語を使用するという面だけでなく、国際的にトップクラスの研究活動をしている研究者から直接教えを受ける場として、グローバルな学術現場を活動視野とする研究者育成に貢献している。また、国際的な研究者育成という面では、各教員は、指導学生の海外学会参加奨励・支援にも積極的に取り組んでいる。

[参照:本報告書 127~134 頁「教育プロジェクト」]

情報発信・社会還元

2016 年度刊行の学術雑誌・年報『ジェンダー研究』の特集は、2015 年 12 月に開催した国際シンポジウム「ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働」成果であり、ジェンダー、フェミニズム視点からの新自由主義批判・考察という、今後の同テーマでの議論を牽引する内容の論文が、20 号という節目の号を飾った。国際シンポジウム等、各種事業の成果を取めた IGS Project Series は 9 冊刊行された。ウェブサイトと合わせて、事業成果を日英言語で広く国内外に発信することに努めている。

文献収集・資料整理分野では、引き続き、寄贈資料の受入を進めているほか、所属研究者らの著書や研究所刊行物を収め、印刷媒体の研究所成果が広く活用されるよう図っている。2016 年度終盤から、大学附属図書館の改修工事が開始したため、図書館資料の利用について図書館スタッフとの協力を心掛けている。

また、社会貢献の面では、一般公開のシンポジウム等開催による事業成果の社会還元を努めているほか、所属研究者は、行政機関や非営利団体からの講演依頼や、高等学校の校外学習への協力依頼等を積極的に引き受け、各々の研究成果の社会還元を努めている。

[参照:本報告書 135~141 頁「学術成果の発信」、143~146 頁「文献収集・資料整理・公開」、147~149 頁「ウェブサイトでの情報発信」、151~153 頁「社会貢献」]

グローバル女性リーダー育成研究機構評価委員会

2016 年 9 月に、グローバル女性リーダー育成研究機構評価委員会が開催された。学外評価委員 2 名、学内評価委員 5 名により、機構設立以来約 1 年半の実施事業についての評価と、今後の活動に向けての提言を受けた。ジェンダー研究所事業としては、研究プロジェクト推進に主眼を置き、かつ、国際シンポジウム開催や教育プロジェクトを含めた事業への強いコミットメントに対して高評価を得た。今後の課題としては、さらなる研究深化への期待とともに、研究成果の教育への活用の必要性が指摘された。また、機構全体でリーダーシップ研究の成果を上げていくためには、ジェンダー研究所、グローバルリーダーシップ研究所のより密接な連携が望まれる旨の提言があった。機構および両研究所では、評価委員会の提言を受けて、以降の事業計画の策定が進められた。

2.

研究プロジェクト

2016 年度研究プロジェクト成果報告

(I) 経済とジェンダー

(II) 政治とジェンダー

(III) 生殖とジェンダー

(IV) 歴史・思想とジェンダー

2016 年度外部資金獲得状況

学会等活動一覧

▶ 2016 年度研究プロジェクト成果報告

学際的、先駆的ジェンダー研究を目指して

2016 年度は、ジェンダー研究センターが、「グローバル女性リーダー育成研究機構」の中核的な研究所として、「ジェンダー研究所」に改組された 2 年目になる。本研究所には、前身のジェンダー研究センターの成果を引き継ぎ、さらにグローバル女性リーダーの育成という、お茶の水女子大学の教育研究の社会的な役割に資する先端的ジェンダー研究の推進が求められている。

ジェンダー研究所は、21 世紀 COE プログラム『ジェンダー研究のフロンティア』（2003～2007 年度）成果を含む、過去の優れた業績とその後の研究成果を発展させ、伝統的な学問分野に縛られない学際的で先駆的なジェンダー研究を志しており、これからも広く日本のジェンダー研究の発展へ貢献することを目指している。また、アジアにおけるジェンダー研究のハブを目指し、国際的な共同研究と、その成果発信を積極的に進めており、蓄積された研究成果の活用による「アジアにおける女性リーダーシップ」の理論構築への貢献も、新たな目標としている。

4 分野の先端研究領域の発展と国内・国際共同研究をリード

昨年度に引き続き、4 研究分野が有機的に連携しながら独自の研究活動を行ってきた。4 研究分野とは（Ⅰ）経済とジェンダー（Ⅱ）政治とジェンダー（Ⅲ）生殖とジェンダー（Ⅳ）歴史・思想とジェンダーである。各分野は、独自性を維持しながら有機的につながり、総合的な研究成果を達成することを目的としている。これらの研究分野にふさわしい海外研究員受け入れも行われている。今後も、学内研究員、客員研究員、研究協力員制度を活用し、研究力をさらに向上させていく予定である。各研究分野における今年の成果として、研究会の実施、IGS セミナー実施、成果出版物の刊行、国際共同研究の実施、国際ネットワークの構築、国際学生交流を実施したほか、研究所メンバーらの論文執筆、学会発表、講演なども活発に行われた。個々のプロジェクトの研究成果については、本書 17～39 頁を参照していただきたい。

国際シンポジウム、IGS セミナー、研究会を開催

研究活動がさらに活発化した 2016 年度は、各研究分野におけるシンポジウムやセミナーを定期的開催し、研究者及び一般市民を対象とするジェンダー研究の発信に努めた。とくに、時宜にかなうテーマとして国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？：ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙」を開催し、多くの聴衆との議論の場も設けた。加えて、海外特別招聘教授の企画によるセミナーや国際シンポジウムも開催され、ジェンダー研究の国際的な成果を共有することができた。

2016 年度は、本研究所の学術雑誌『ジェンダー研究』が、創刊 20 周年を迎え、20 号を刊行した記念すべき年でもある。この 20 年の成果を持って、来年度から新しい雑誌体制に移行し、学術雑誌『ジェンダー研究』を刷新することが決定した。新雑誌体制を整え、ジェンダー研究のさらなる発展を図りたい。

2016 年度研究プロジェクト 4 分野別一覧

(I) 経済とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 「アジアにおける『新中間層』とジェンダー」研究
IGS 研究プロジェクト 「社会的企業とジェンダー」研究
科学研究費基盤研究 C 食の倫理と功利主義：食をめぐる規範・実践・ジェンダー
科学研究費基盤研究 B 利己心の系譜学
(II) 政治とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究
科学研究費基盤研究 C 女性大統領と女性の政治的代表性:韓国の朴槿恵を中心に
科学研究費基盤研究 C 女性の政治参画：制度的・社会的要因のサーベイ分析
学術振興会特別研究員奨励費 日本の地方政治における女性の政治的代表性の研究
(III) 生殖とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における多様な家族のあり方の受容との関係性
科学研究費基盤研究 C AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究
日本医療研究開発機構育成疾患克服等総合研究事業「生殖補助医療の技術の標準化と出生児の安全性に関する研究」 配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査
IGS 研究プロジェクト 人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究
(IV) 歴史・思想とジェンダー
IGS 研究プロジェクト リベラル・フェミニズムの再検討
IGS 研究プロジェクト 朝鮮戦争期の日系アメリカ人兵士と市民権を巡る諸問題：ジェンダーとエスニシティの視点から
竹村和子フェミニズム基金 日系アメリカ人女性による朝鮮戦争期の従軍経験：ジェンダーとエスニシティの視点から
科学研究費若手研究 B 日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入：ジェンダーとエスニシティの視点から

(I) 経済とジェンダー

「経済とジェンダー」研究では、経済諸分野(経済理論、財政・金融、経済(学説)史、経済・社会政策、労働、生活、地域、グローバル化)とジェンダーの関連と現状分析を行なう。

2016 年度は、アジアの新興／成熟経済社会の動向をジェンダー視点から分析する研究プロジェクトを中心とし、成果報告書をまとめ、『ジェンダー研究』に一部を掲載した。また、同時に、金融化とジェンダーの理論分析、社会的企業論などの研究やシンポジウム、セミナーを行った。

経済における消費の倫理としての食の倫理に関する研究では、食と農に焦点を合わせ、両者のあり得べき関係を、ジェンダー視点から実態調査を行なった。

また経済世界を記述する学としての経済学の根底的な見直しを意図する「利己心の系譜学」研究では、古典的功利主義における人間像と経済世界における叙述とを対照させて研究しつつ、関連する研究会を開催した。

IGS 研究プロジェクト

「アジアにおける『新中間層』とジェンダー」研究

【研究担当】 足立眞理子（IGS 教授）

【メンバー】 斎藤悦子（IGS 研究員／本学准教授）、堀芳枝（恵泉女学園大学准教授）、
グレンダ・ロバーツ（早稲田大学教授）、
スーザン・ヒメルヴァイト（英・オープン大学名誉教授）

【概要】 平成 26 年度に終了した科学研究費基盤研究 A「グローバル金融危機以降におけるアジアの新興/成熟経済社会とジェンダー」(研究代表者：足立眞理子) の継続プロジェクト。アジアにおける『新中間層』研究のための理論的作業と、継続している実証研究のまとめを行った。

2008 年グローバル金融危機以降のアジア経済社会において、金融化とジェンダーの問題が喫緊の課題として浮かび上がっている。しかしながら、従来、金融化とジェンダーの関連は、理論的構成を含めほとんど研究されていない。そこで、フェミニスト経済学の「金融化とジェンダー」の最新知見を整理・統合することを試みた。

【研究内容・成果】

国際シンポジウム開催	「Financialization Employment Gender Inequality（金融化、雇用、ジェンダー不平等）」を主宰（2016 年 4 月 11 日）。（本報告書 50 頁参照）
理論考察	金融化の定義は、今日、ポストケインジアン派のミンスキー理論により、金融不安定性の問題に焦点が当てられている。これらの理論と従来のフェミニスト経済学が理論化してきた、メゾレベル分析の関連性が指摘されている。これらについて、詳細に検討。
資料収集・インタビュー調査実施	国内銀行（都市銀、地銀、信用金庫）における住宅ローン担当および関連業務担当へのインタビュー。

経済とジェンダー 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

「社会的企業とジェンダー」研究

【研究担当】 足立眞理子 (IGS 教授)

【メンバー】 斎藤悦子 (IGS 研究員／本学准教授)、
スーザン・ヒメルヴァイト (英・オープン大学名誉教授)

【概要】 社会的企業の定義に関して、イギリスの文献や事例研究を行った。社会的企業と近年注目されてきているシェアリング・エコノミーの関連について研究会を開催し、議論を行った。貨幣経済、市場交換、債権・債務関係等の従来の概念が市場経済を中心として定義されていることを確認し、非市場的諸要素が市場交換に代替する可能性や、企業活動が必ずしも利潤確保を目的としない場合の組織維持について分析した。

【研究内容・成果】

国際シンポジウム開催	「Financialization Employment Gender Inequality (金融化、雇用、ジェンダー不平等)」を主宰 (2016 年 4 月 11 日)。(本報告書 50 頁参照)
研究会開催	6 月 27 日アイルランド、ギャルウェイにて、ミーティング実施。
文献・事例研究	Feminist Economics 誌における「社会的企業」関連論文の収集と翻訳、および、金融化に関するデータ収集。

科学研究費基盤研究 C (課題番号: 24530214)

食の倫理と功利主義：食をめぐる規範・実践・ジェンダー

【研究代表者】板井広明 (IGS 特任講師)

【期間】2014 (平成 26) ~2016 (平成 28) 年度

【概要】功利主義的な食の倫理の研究の視点から昨今の食の倫理論を整理し、あるべき食の倫理の提示を行なう。研究は 2 本立てで、第 1 は 18 世紀英国における人間と動物の区別・位置づけという思想史的考察を行なう。とりわけベンサムは人間と動物に差異はないとして、動物への道徳的配慮を主張していたことを軸にして、当時の議論の整理を行なう。第 2 は英米日の新たな食のネットワーク作りや運動の実態と特徴を比較しつつ、食と農、食と環境、ジェンダーの問題から規範的な食の倫理を検討する。一国内にとどまらず、グローバルな世界において、いかなる食の倫理が望ましいのかが問われ、一方、日本では食の倫理は声高に叫ばれてきたものの、その内実は法令順守の域を出ておらず、食を倫理的に問う構え自体が稀少であった。本プロジェクトでは欧米の食の倫理に関する議論の動向を検討しつつ、規範的な食の倫理を探る。

【研究内容・成果】

文献調査

ロンドン大学 (University College London) 所蔵のベンサム草稿を調査。

日・英での参与観察

受刑者の社会復帰プログラムとして食を位置付けるロンドン近郊の Brixton 刑務所での実践や、愛知県の福津農場など自然農法を実践している現場を参与観察した。

科学研究費基盤研究 B (課題番号: 15H03331)

利己心の系譜学

【研究代表者】 太子堂正称 (東洋大学准教授)

【研究分担者】 板井広明 (IGS 特任講師)

【期間】 2015 (平成 27) ~ 2017 (平成 29) 年度

【概要】

経済学が前提とする利己心という人間行動の基本動機を、歴史的・現代的文脈の中で根本的かつ総合的に分析し、その可能性と限界を見定め、現在の経済理論にそれをどのように反映させるか、あるいは競争の是非といった議論をいかに深めるかが、本研究の課題である。

近年では、感情・本能といった、利己心以外の人間動機が行動経済学などによって明らかにされつつある。しかし、個別研究の範囲を超えて、その研究成果からどのように経済理論の組み替えをすべきかは明らかではない。また利己心が競争を促し倫理や道徳に反するという一般的理解に対して、改めて、論者や時代に応じて捉え方が異なっている利己心を省察し直す必要が出てきている。経済理論における利己心の多様な捉え方を歴史的・規範的に分析・解明し、現在の経済理論にそれをどのように反映させるか、あるいは競争の是非といった議論をいかに深めるかが、本研究の課題である。

【研究内容・成果】

企画セッション

経済学史学会 (東北大学、2016 年 5 月 21 日) で本研究プロジェクトの企画セッションを行ない、編者のひとり W.Hands 氏と英文論集出版に関する打合せを行った。

研究集会

東洋大学 (2016 年 11 月 12 日) と関西大学 (2016 年 11 月 19 日) で研究集会をもち、編者のひとり Uskali Mäki 氏と出版打ち合わせなどを行なった。また、お茶の水女子大学 (2017 年 3 月 6 日) で第 3 回目の研究集会を行なった。

英文論集執筆

英文論集 (2017 年 2 月出版契約済) 完成に向けて執筆。

(Ⅱ) 政治とジェンダー

「政治とジェンダー」研究では、主に東アジア地域の民主主義国家、とりわけ、日本、韓国、台湾における女性の政治的代表的性の問題を、ジェンダー・フェミニスト理論の成果に基づき比較分析することを目的としている。

2016年度は、新生民主主義の台湾や韓国と、オールドデモクラシーの日本において、女性議員の割合の差や、女性の代表性を推進する制度の違いを理解するための理論の検討、日本の国会議員に対するアンケート調査の分析及びインタビュー調査、地方議員の研究を行った。また、韓国の研究者らと共同研究チームを立ち上げ、韓国の国会議員を対象としたアンケート調査も実施した。

さらに、国際研究ネットワークの「日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)」を開催し、女性(ヒラリー・クリントン民主党候補)の政治的代表的性の問題をめぐって世界的に注目を集めたアメリカ大統領選挙に関する国際シンポジウムを開催し、女性大統領研究の比較分析を進めた。

主な研究活動は、1)研究会開催(GDRep 共催)、2)国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?ジェンダーと多様性から考える 2016年大統領選挙」開催、3)日本の国会議員を対象とするアンケート調査の分析、4)韓国国会議員へのアンケート調査、4)海外学会での研究報告。

IGS 研究プロジェクト

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】 申琪榮 (IGS 准教授)

【メンバー】 政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (GDRep)、
Yoon Jiso (日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学準教授)、
大木直子 (本学グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

【概要】 本研究プロジェクトは、主に東アジアにおける「ジェンダーと政治」について考察し、東アジア国家の比較分析を行うことで、日本のみならず国際的にも「ジェンダーと政治」領域における東アジアの分析が著しく乏しい点を是正し、学術的、政策的貢献を果たすことを目的とする。

東アジアにおいて、女性の政治参画は、民主主義の歴史が長い日本が最も低い。他方で台湾は民主化以前から女性議員の割合が高く、民主化以降は3割をはるかに超えるようになった。韓国も、2000年代に入って十数年間女性議員が国会・地方議会において著しく増加した。これら東アジア国家において女性の政治的代表的性を高める・妨げる要因は何か、また、ジェンダー・多様性を生かした政治制度はどのように形成されうるのか。本研究は、まずこれらの課題に取り組み、日本、韓国、台湾における男女議員への調査を実施、比較分析し、相違点を明らかにする。

この研究は日本、韓国、台湾の3カ国の研究チームによって遂行される国際共同研究であるため、2016年11月からは韓国研究チームが形成された。韓国国会でのアンケートの実施のために、申琪榮 (IGS 准教授) が研究分担者として参加し韓国研究財団の研究費助成に申請し、採択された。

【研究内容・成果】

国際シンポジウム協力	「女性参政権 70 周年記念シンポジウム 女性を議会へ 本気で増やす!」(上智大学、2016年4月10日)にて第2部企画、司会担当。
GDRep 研究会開催	第9回「政党行動と政治制度」研究会(上智大学、2016年6月22日)を GDRep (政治代表におけるジェンダーと多様性研究会) と共催。「持続可能な女性代表性は得られるのか? : 2016年の韓国総選挙とクオータ制度の15年」をテーマに報告。
IGS セミナー開催	2016年度第1回「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会「台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開」をアジア女性資料センターと共催(2016年12月12日)。(本報告書88頁参照)
国会議員を対象にサーベイ調査実施	日本の国会議員(男女)を対象にしたサーベイ質問表を集計。さらに、衆参議員16名にインタビュー実施。
韓国の議員を対象にサーベイ調査実施	韓国の研究者らと打ち合わせ、質問表の韓国版を作成。2017年2月に、韓国の議員(男女)に訪問アンケート実施。このため、韓国研究財団の「一般共同研究」(2016.11~2019.10)に応募し、採択された。(本報告書42~43頁参照)

政治とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C (課題番号: 26360042)

女性大統領と女性の政治的的代表性: 韓国の朴槿恵を中心に

【研究代表者】 申琪榮 (IGS 准教授)

【期間】 2014 (平成 26) ~ 2017 (平成 29) 年度

【概要】 韓国では 2012 年の選挙で保守政党の女性大統領 (朴槿恵) が誕生した。保守政権は伝統的なジェンダー規範を支持し、政治における女性の実質的な代表性 (women's substantial representation) を損ないかねないと指摘されてきたが、朴槿恵は「女性」を選挙のキーワードにして戦い、当選した。本研究は、朴槿恵大統領の在任期間を研究期間とし、朴政権の女性関連政策、政治制度、及び国政選挙 (2016 年) における政党の選挙戦略の変化を考察することで、保守政権の女性大統領が女性の実質的な政治的的代表性にどのような影響を及ぼしうるのかを考察する。

【研究内容・成果】

国際シンポジウム開催	「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか? ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙」を主宰 (2017 年 3 月 18 日)。(本報告書 62 頁参照)
IGS 研究会開催	JAWS 研究交流会第二部「ジェンダーと政治的的代表性」を主宰 (2017 年 3 月 16 日)。(本報告書 96 頁参照)
学会発表	IPSA (International Political Science Association) (2016.7. Poznan Poland) にて研究発表。
一般公開講演	「パク・クネ: 初の女性大統領の誕生と迷走」(上智大学、2016.11.)
在外研究	2015 年 10 月から 2016 年 9 月までソウルにて在外研究。韓国にてフィールドワーク実施。専門家及び女性団体関係者と面談。
論文投稿	朴槿恵政権のジェンダー政策 (特に慰安婦問題関連) について『日本批評』15 号へ論文投稿。

科学研究費基盤研究 C (課題番号: 15K03287)

女性の政治参画: 制度的・社会的要因のサーベイ分析

【研究代表者】三浦まり (上智大学教授)

【研究分担者】申琪榮 (IGS 准教授)、Jackie Steele (東京大学准教授)

【期間】2015 (平成 27) ~ 2017 (平成 29) 年度

【概要】政治代表における男女不均衡 (女性の過少代表 / 男性の過大代表) はなぜ引き起こされ、どのように再生産されてきたのかを明らかにすることを目的とする。女性の政治参画を規定する制度的社会的要因を解明し、どのような制度改革と規範形成が過少代表の解消につながるかを明らかにするため、日本・韓国・台湾・ニュージーランドを比較分析する。本研究は、ジェンダー研究所の「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクトの一部として研究連携を持ち、主に日本の国会議員や女性運動に焦点を当てて分析を行っている。

【研究内容・成果】

国際シンポジウム協力

「女性参政権 70 周年記念シンポジウム 女性を議会へ 本気で増やす!」(上智大学、2016 年 4 月 10 日) 開催に協力。第 2 部司会担当。

GDRep 研究会開催

第 9 回「政党行動と政治制度」研究会 (上智大学、2016 年 6 月 22 日) を GDRep (政治代表におけるジェンダーと多様性研究会) と共催。「持続可能な女性代表性は得られるのか? : 2016 年の韓国総選挙とクォータ制度の 15 年」をテーマに報告。

国会議員を対象にサーベイ調査実施

日本の国会議員 (男女) を対象にしたサーベイ質問表を集計。さらに、衆参議員 16 名にインタビュー実施。

書籍の刊行

国際シンポジウム「女性参政権 70 周年記念シンポジウム 女性を議会へ 本気で増やす!」の内容を出版に向けて整理。

政治とジェンダー 研究プロジェクト

学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：15F15741）

日本の地方政治における女性の政治的代表性の研究

【研究代表者】 申琪榮（IGS 准教授）

【研究分担者】 Yoon Jiso(日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学准教授)

【期間】 2015（平成 27）年 8 月～2016（平成 28）年 8 月

【概要】 This study takes Korea and Japan as cases representing quota and non-quota strategies to improve women's involvement in politics. Focusing on the Tokyo Metropolitan Assembly and the Seoul Metropolitan Council, we investigate the following questions. First, how have quota and non-quota strategies of political parties and women's organizations helped to advance women's presence (e.g., increase in number) in local councils? Additionally, has women's physical presence led to greater representation of women's interests (i.e., do women represent women more than men)? Finally, what kind of women (e.g., party affiliation, individual background) matter for women's substantive representation?

【研究内容・成果】

東京都議会の会議録調査	2000 年代以来、東京都議会の会議録（本会議・委員会）を検討し、女性の利益に関する政策トピックは何であり、誰（議員性別・政党）がこのような政策トピックに言及するののかに関してデータを集めた。
学会発表	日韓女性の政治代表性に関する比較研究論文を、Association for Asian Studies in Asia（京都、2016 年 6 月 24～27 日）ならびに、International Political Science Association Meeting（ポーランド・ポズナン、2016 年 7 月 23～28 日）にて、発表。
論文投稿	学会発表をもとにした論文を国際ジャーナルに投稿。

(Ⅲ) 生殖とジェンダー

生殖医療の進歩はめざましく、最近では日本でも、第三者の精子や卵子を使って、婚姻している異性カップルだけでなく、シングル女性や同性カップルも子どもを持つようになってきている。「生殖とジェンダー」の分野では、第三者が介入する生殖技術で形成された家族や、この技術で生まれてきた子どもの問題に加え、人口政策としての不妊治療支援や出生前検査にも目を向けて、不妊全般に関連する問題に焦点をあてて研究をすすめた。

2016年度は、「第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における多様な家族のあり方の受容との関係性」、「AIDで生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」、「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」、「人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究」の4つのプロジェクトを推進した。

次々とあらたな生殖医療技術が登場する中で、家族や親子関係に関する既存の概念が当てはまらない状況も出て来ている。生殖医療で形成された家族やこの技術で生まれた子どものウェルビーイングに配慮し、不妊治療を受ける不妊当事者の利益や権利を確保するために、ジェンダーの視点から生殖技術の望ましい方向性をさぐることを目的に研究活動を行った。

生殖とジェンダー 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における
多様な家族のあり方の受容との関係性

【研究担当】 仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【概要】「第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における多様な家族のあり方の受容との関係性」プロジェクトは、東京医科大学の久慈直昭教授と、城西国際大学の清水清美教授と3人で2015年度よりすすめてきた。2016年度は本プロジェクトの一環として5回の公開セミナーを開催し、このうちの2回をジェンダー研究所主催のIGSセミナー（生殖領域）としてお茶の水女子大学で開催し、残り3回を東京医科大学で開催した。本プロジェクトの中では、久慈、清水とともに、国内の精子ドナーやAIDで子どもを持ったヘテロカップルの親およびLGBTの親たちを対象にインタビュー調査も実施した。そのほか、IGSセミナー（生殖領域）として、オーストラリアのモナシュ大学からキャサリン・ミルズ氏を招き、「The Ethics of Prenatal Testing」というテーマで英語セミナーも開催した。

【研究内容・成果】

IGS セミナー開催	IGS セミナー生殖領域シリーズ1回目：「AID 出生者のドナー情報を得る権利」（2016年6月8日）、2回目：「同性カップルの家族づくりとAID」（2016年7月27日）、3回目：「The Ethics of Prenatal Testing（出生前検査をめぐる倫理）」（2016年11月10日）開催（本報告書69頁、75頁、83頁参照）。このほか、東京医科大学で「AIDで生まれた人の出自を知る権利を保障する」というテーマで、8月30日、10月12日、12月14日の3回にわたって、精子ドナーやAIDで子どもを持った親、AIDにかかわっている看護師、カウンセラー、医師、社会学者、法学者を招聘して、セミナーを開催。
AID 関係者を対象にインタビュー調査	精子ドナーや提供精子で子を持った親、提供精子の利用を考えているレズビアン女性等にインタビュー調査を実施。
報告書刊行	IGS Project Series No. 9『IGS Seminar (Reproductive Area) The Ethics of Prenatal Testing』（本報告書141頁参照）
報告書刊行	16年度に開催した第1回IGSセミナーと第2回IGSセミナーおよび、東京医科大学で開催されたセミナーは5回分をまとめて、報告書として刊行予定

生殖とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C (課題番号:16K12111)

AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究

【研究代表者】 清水清美 (城西国際大学教授)

【研究分担者】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】 2016 (平成 28) ~2018 (平成 30) 年度

【概要】 城西国際大学の清水清美教授が研究代表者である平成 28 年度 (2016 年) から 30 年度 (2018 年) の文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C) (一般)「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」(課題番号:16K12111)の研究分担者として、教材作成のための情報収集として、文献調査や AID 関係者へのインタビューを中心に研究をすすめた。

【研究内容・成果】

インタビュー調査実施 (国内)	AID で子どもを持った親や、レズビアンで AID を利用して子どもを持った親、精子提供をした医師やゲイの男性にインタビュー調査を実施。
インタビュー調査実施 (ニュージーランド)	2017 年 2 月末から 10 日間、カンタベリー大学のケン・ダニエルズ氏の協力を得て、ニュージーランドのクライストチャーチ、ネルソン、オークランドで、AID 当事者や関係者たちにインタビュー調査を実施。さらに現地にて AID 当事者への告知のための資料等を収集。
アンケート調査実施 (国内)	AID で子どもを持った親を対象に無記名式のアンケート調査を実施、郵送法にて回答を得た。
学会発表	第 14 回日本生殖心理学会 (2017 年 2 月 19 日) においてアンケート調査結果を「AID 児への telling を前向きに検討・実施している親の課題およびニーズ」(清水発表) というタイトルで報告。
論文投稿	『日本生殖看護学会誌』に「日本の精子ドナーの視点による匿名性の問題」という論文を投稿し、原著論文として採用された。

生殖とジェンダー 研究プロジェクト

日本医療研究開発機構成育疾患克服等総合研究事業「生殖補助医療の技術の標準化と出生児の安全性に関する研究」

配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査

【研究代表者】 苛原稔（徳島大学教授）

【課題研究分担者】 久慈直昭（東京医科大学教授）

【研究協力者】 仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【期間】 2016（平成 28）～2018（平成 30）年度

【概要】日本医療研究開発機構成育疾患克服等総合研究事業「生殖補助医療の技術の標準化と出生児の安全性に関する研究」（研究代表者：苛原稔）の研究分担として、東京医科大学の久慈直昭教授が行っている「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」に研究協力。

【研究内容・成果】

研究会協力	「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」開催に協力。
インタビュー調査実施	AID で子どもを持った親や、レズビアンで AID を利用して子どもを持った親、精子提供をした医師やゲイの男性にインタビュー調査を実施。
文献調査	主に仙波は国外の文献を収集。
学会発表	第 28 回日本生命倫理学会（2016 年 12 月 4 日）において、「精子ドナーの匿名性をめぐる問題 諸外国の状況を踏まえて」（仙波発表）というタイトルで報告。
論文投稿	学会誌『生命倫理』に「ドナーの匿名性をめぐる問題：遺伝子検査時代に」（仙波 first author）が、研究ノートとして掲載される予定。

生殖とジェンダー 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究

【研究担当者】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

ジソ・ユン (日本学術振興会外国人特別研究員、米・カンザス大学准教授)

【概要】日本も韓国も共に出生率の減少が大きな社会問題となっているが、本プロジェクトは、日韓の人口政策としての不妊治療支援を比較研究し、さらに不妊治療支援が人口政策の中に組み込まれることについて、ジェンダーの視点、とくにリプロダクティブ・ライツの視点から分析することを目的としている。日本においては、1990年代から不妊専門相談などの支援がはじまり、2004年には不妊治療助成事業が開始された。一方韓国でも2006年から不妊治療支援が始まり、近年、その対象条件を広げつつある。人口政策の中に不妊治療支援が組み込まれることで、政策としての効果はどのくらいあるのか、また女性にとっては利益となるのか不利益となるのかを本研究プロジェクトを通してさぐる。

【研究内容・成果】

文献調査

仙波は主に日本の不妊治療支援に関する資料を収集、ユンは韓国の資料を収集し、歴史や不妊治療の実施数の推移、不妊治療助成の利用件数の推移等を比較しながら、データを分析、論文執筆中である。

インタビュー調査実施

日本の不妊相談の実態を知るために、不妊のピアカウンセラーおよび、不妊当事者団体のスタッフにインタビュー調査を実施。

学会発表

第26回国際フェミニスト経済学会 (IAFFE) 年次大会 (2017年6月29日~7月1日、誠信女子大学校・韓国) で、「Population Policy at the Expense of Women's Reproductive Rights: Rethinking Government Support for Infertility Treatments in Japan and Korea」報告予定。

投稿論文

完成した英語論文の投稿準備中。

(IV) 歴史・思想とジェンダー

「歴史・思想」研究では、アメリカ合衆国史およびイギリス思想史とジェンダーに関連する研究を実施した。1) 朝鮮戦争(1950-1953)に参戦した日系アメリカ人二世に関するプロジェクトでは、二世兵士の経験や日系人退役軍人による顕彰活動などの調査を通して二世兵士の全体像の把握、解明を目指した。2) ウルストンクラフトや J.S.ミルなど第1波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズムの思想・運動を再検討する研究プロジェクトでは、John Stuart Mill, *The Subjection of Women*, 1869 第1章のテキスト精読および翻訳作業を行ない、また関連研究会を開催した。

歴史・思想とジェンダー 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

リベラル・フェミニズムの再検討

【研究担当】板井広明（IGS 特任講師）

【概要】本研究プロジェクトの目的は、ウルストンクラフトやJ.S.ミルなど第1波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズムの思想・運動を再検討することにある。リベラリズムの公私二元論を前提にしたリベラル・フェミニズムは乗り越えの対象でしかないという捉え方が一般的だが、リベラリズムにおいて、「公」に対する「私」の領域は単に個人的自由の空間であると放任されるのではなく、不正義が存在すれば介入が正当化される空間でもあった。本研究では、特にジョン・スチュアート・ミル「The Subjection of Women」（1869年）のテキスト読解を通じて、そのことを明らかにするとともに、『女性の隷従』新訳を完成させ、リベラル・フェミニズム再検討の機運を盛り上げることを狙う。

【研究内容・成果】

IGS セミナー等開催

「日本における女性と経済学」（2017年2月22日）を主宰（本報告書93頁参照）。また、共催の形で、経済理論史研究会2016年度第1回研究会を行なった（2016年10月22日（土）14:30～17:30、お茶の水女子大学 大学本館 生活科学部会議室103室）。報告者：山尾忠弘（慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程）「初期ミルにおける女性論と文明社会論：「結婚論」を中心に」、討論者：板井広明（IGS 特任講師）、小沢佳史（神奈川大学非常勤講師）

翻訳検討会による翻訳

小沢佳史（神奈川大学非常勤講師）氏の協力により、オンライン翻訳検討会をほぼ毎週開催。また秋からはJ.S.ミルの女性論・結婚論を専門にしている山尾忠弘（慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程）氏にも参加してもらい、テキストの知性史的背景などについても考慮しつつ、翻訳を進めた。

歴史・思想とジェンダー 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

朝鮮戦争期の日系アメリカ人兵士と市民権を巡る諸問題：ジェンダーとエスニシティの視点から

【研究担当】 臺丸谷美幸（IGS 特任リサーチフェロー）

【概要】 本研究は朝鮮戦争（1950～1953）に参戦した日系アメリカ人（二世兵士）についてジェンダーとエスニシティの視点から考察するものである。主な従軍者は二世男性であったが、僅かながら二世女性も志願している。今年、米国カリフォルニア州でのフィールド調査を2回実施し、朝鮮戦争へ従軍した人々の志願動機や帰還後の生活の変化について考察した。

【研究内容・成果】

二世兵士の再定住と従軍経験についての検討

朝鮮戦争期の参戦は日系人の第二次世界大戦後の再定住期（日系人強制収容以後の社会参入期）と重なる。そこで、従軍経験が二世兵士の彼ら／彼女らの再定住へ及ぼした影響について検討した。当該課題は2016年9月23日に大阪大学でのアメリカンセミナー（招聘）、12月18日に第13回ジェンダー史学会第13回年次大会（武蔵大学）にて報告した。

二世兵士の東アジア経験についての検討

朝鮮戦争期、二世兵士達は戦場であった朝鮮半島だけでなく、基地や休息地であった日本にも滞在しているケースが多い。そこで、二世兵士の従軍期における様々な東アジア経験が、彼ら／彼女らのエスニック・アイデンティティに及ぼした影響について検討した。当該課題は2016年11月21日に第4回ポストコロニアル法理論研究会（明治大学）にて報告した。

米カリフォルニア州でのフィールドワークの実施

2016年5月（竹村フェミニズム基金）8月（科研費）と2回、米国（ロサンゼルス、サンフランシスコ、サクラメント）にてフィールドワークを行った。日系人朝鮮戦争退役軍人会の構成員にインタビューをし、またUCLA 付属図書館や日系人関連団体にて資料調査を実施した。

歴史・思想とジェンダー 研究プロジェクト

竹村和子フェミニズム基金

日系アメリカ人女性による朝鮮戦争期の従軍経験：ジェンダーとエスニシティの視点から

【研究代表者】 臺丸谷美幸（IGS 特任リサーチフェロー）

【期間】 2015（平成 27）7 月～2016（平成 28）年 6 月

【概要】 本研究の目的は、日系アメリカ人二世の中でも、特に朝鮮戦争へ志願した二世女性に着目し、彼女たちの従軍経験を、1950 年代における二世女性の社会進出の文脈に位置付けながら考察するものである。朝鮮戦争期は、冷戦下、米軍においてジェンダーとエスニシティを軸とした大幅な軍備再編・人員編成が行われた時代にあたる。当時の女性の志願者は、少数であることから、分析対象は二世男性まで広げ、男性と女性の事例を比較検討した。

【研究内容・成果】

先行研究の翻訳

本研究の重要な先行研究にあたる Cynthia Enloe 著 *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*, (Berkeley[CA]: University of California Press, 2000) , “Chapter 6 Nursing the Military: The Imperfect Management of Respectability” の邦訳を進めた。H29 年度内の発表を目指している。

エスニックメディア（新聞・機関誌）の分析

1950 年代の日系人コミュニティにおける二世の女性従軍者に対する社会的イメージや当時の社会的評価を明らかにするため、JACL 発行の新聞型機関紙『パシフィック・シティズン』等の記事を基に分析した。

フィールドワークの実施

2016 年 5 月に米国（ロサンゼルス、フラトン、サクラメント）にてフィールドワークを実施した。ジェンダーの差異による従軍経験の違いや祖国帰還後の社会生活に与えた影響について明らかにするため、日系二世の退役軍人を対象としたインタビュー調査を実施した他、UCLA 付属図書館などで資料収集を行った。

歴史・思想とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費若手研究 B (課題番号: 16K16670)

日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入：ジェンダーとエスニシティの視点から

【研究代表者】 臺丸谷美幸 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】 2016 (平成 28) ~ 2018 (平成 30) 年度

【概要】 本研究は、アメリカ合衆国市民として朝鮮戦争 (1950-1953 年) へ従軍した、日系アメリカ人に関するものである。朝鮮戦争期の特徴は、日系二世たちが人種隔離部隊から通常の人種混成部隊へと編制された点にある。これは同時代、米軍においてジェンダーとエスニシティを基軸とする大規模な人員統合、軍備再編が行われたためである。当該プロジェクトの初年度にあたる今年度は、朝鮮戦争期と同時代二世兵士の社会的評価とイメージの解明を目指した。

【研究内容・成果】

1950年代当時のメディア分析	『Pacific Citizen』や『羅府新報』など、日系人コミュニティを中心に購読されていた新聞記事や、当時の一般大衆に広く親しまれていたと推測されるハリウッド映画や小説を分析し、作品に登場する二世兵士像の分析から当時の彼らに対する社会的評価を考察した。
フィールドワークの実施	2016年8月12日から9月3日の日程で、米国カリフォルニア州で実施した。退役軍人に対するインタビュー調査、UCLA 附属図書館や日系人関連団体で資料収集を行った。また、ロサンゼルスの日系人街で開催された Nisei Week (2016年8月13~14日) にて、日系人朝鮮戦争退役軍人会に同行し、参与観察した。
IGS 関連研究会の設立と研究会の実施	IGS 関連研究会「冷戦とジェンダー」研究会を2度企画・運営した。研究会では本課題の成果報告を行う他に、学内外のジェンダー研究、冷戦研究、アメリカ研究の専門家者と意見交換を行うことを通して、より本課題について多角的な視点からの考察を試みた。

2016 年度外部資金獲得状況

学会等活動一覧

▶ 2016 年度 外部資金獲得状況

国内外における競争的研究資金の高い獲得実績

ジェンダー研究所の国際的教育研究拠点形成のための共同研究、連携プロジェクトの活動は、お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構の核心的な部分である。それら研究所の共通課題に加え、研究所所属の教員及び研究者は、独自に個別研究課題を設定し、多くの外部資金を獲得して研究活動を行っている。日本学術振興会科学研究費基盤研究 A「IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」（研究代表者：石井クンツ昌子 IGS 所長）ほか多数の外部資金を得ており、2016 年は新規採択も 3 件あった。その内 1 件は、海外研究財団からの助成金であり、韓国研究財団から「一般共同研究：議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」（研究分担者：申琪榮 IGS 准教授）が採択され国際共同研究の基盤が築かれた。

2016 年度の実績を概観すると、国内最大の科学研究支援機構、日本学術振興会（JSPS）の研究助成によるものが挙げられる。まず、研究所の特任リサーチフェローによる新規採択が 2 件あった。科学研究費基盤研究 C「AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究」（研究分担者：仙波由加里）、科学研究費若手研究 B「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入：ジェンダーとエスニシティの視点から」（研究代表者：臺丸谷美幸）である。

継続採択として、研究所教員等研究者が研究代表を務める課題として、基盤研究 A「IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」（研究代表者：石井クンツ昌子所長、2014～2018 年度）、基盤研究 C「女性大統領と女性の政治的代表性：韓国の朴槿恵を中心に」（研究代表者：申琪榮 IGS 准教授、2014～2017 年度）、基盤研究 C「食の倫理と功利主義：食をめぐる規範・実践・ジェンダー」（研究代表者：板井広明 IGS 特任講師、2012～2016 年度）がある。そのほか、基盤研究 C「女性の政治参画：制度的・社会的要因のサーベイ分析」、基盤研究 B「利己心の系譜学」には、研究所メンバーが 2016 年度も研究分担者として参加し、分担金を獲得した。

さらに、日本学術振興会が日本で研究を行う海外の優秀な研究者を支援する特別研究員奨励費（Yoon, Jiso、受入研究者：申琪榮）、および若手研究者の研究支援を行う竹村和子フェミニズム基金助成（臺丸谷美幸 IGS 特任リサーチフェロー）も受けた。

ジェンダー研究所の所属メンバーの外部資金獲得実績は国内にとどまらない。研究所メンバーと海外の研究者らとの共同研究によって海外の競争的研究資金を獲得しており、継続採択として韓国の Social Science Korea から海外研究者向けの研究助成金を受けたほか、上記の、韓国研究財団からの助成を新たに獲得した。

外部資金の獲得は、研究所が質の高い研究を行うために欠かせないが、単なる研究資金を調達すること以上の意味を持つ。競争的資金への挑戦は、研究所のメンバーらが各自専門領域で優れた成果を目指す動機を付与するとともに、分担者として研究所共通のプロジェクトや国内外の研究ネットワークに参加し、先端研究者らとの交流を進める機会を提供する。

総じて、今年度研究所構成メンバーによる優れた外部資金獲得状況は、そのような好循環に基づき、研究所の研究活動が高く評価された結果と捉え、来年度につなげたい。

競争的外部資金による研究プロジェクト一覧

プロジェクト名称	期間（年度）	担当
科学研究費基盤研究 A IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの 国際比較から 課題番号：26242004	2014～2018	石井
科学研究費基盤研究 C 女性大統領と女性の政治的的代表性:韓国の朴槿恵を中心に 課題番号：26360042	2014～2017	申
科学研究費基盤研究 C 食の倫理と功利主義：食をめぐる規範・実践・ジェンダー 課題番号：24530214	2012～2016	板井
学術振興会特別研究員奨励費 日本の地方政治における女性の政治的的代表性の研究 課題番号：15F15741	2015～2017	申 Yoon
竹村和子フェミニズム基金助成 日系アメリカ人女性による朝鮮戦争期の従軍経験：ジェンダーとエスニ シティの視点から	2015～2016	臺丸谷
科学研究費若手研究 B 日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入：ジェンダーとエスニシティ の視点から 課題番号：16K16670	2016～2018	臺丸谷
科学研究費基盤研究 C 女性の政治参画：制度的・社会的要因のサーベイ分析 課題番号：15K03287	2015～2017	申 (分担者)
科学研究費基盤研究 B 利己心の系譜学 課題番号：15H03331	2015～2017	板井 (分担者)
Social Science Korea East Asian International Relations Theory	2015～2018	申 (分担者)
科学研究費基盤研究 C AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関す る研究 課題番号：16K12111	2016～2018	仙波 (分担者)
韓国研究財団 一般共同研究 議会内政治的的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・ 日本・台湾比較分析 課題番号：NRF-2016926559	2016～2018	申 (分担者)

学会等活動一覧

石井クンツ昌子（所長）

- ・日本学術会議 連携会員／統計データアーカイブ分科会（副会長）
- ・National Council on Family Relations
- ・日本社会学会（理事）／社会学教育委員会（副委員長）／国際発信強化特別委員会
- ・日本家族社会学会（会長）
- ・日本家政学会家族関係部会（役員）／家族関係部会（編集委員）
- ・福井県男女共同参画審議会 会長

足立真理子（教授）

- ・日本学術会議 連携会員（経済学部会）
- ・経済理論学会（幹事・奨励賞選考委員会委員長）
- ・ラウトレッジ国際奨励賞選考委員会委員
- ・日本フェミニスト経済学会（JAFPE:幹事）
- ・経済学史学会
- ・International Association for Feminist Economics(IAFFE:国際フェミニスト経済学会)登録会員
- ・大阪府立大学人間科学研究科女性学研究センター学外研究員

申琪榮（准教授）

- ・International Political Science Association
- ・American Political Science Association
- ・European Consortium for Political Research
- ・International Feminist Economics Association
- ・日本政治学会（分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」）
- ・日本比較政治学会
- ・日本フェミニスト経済学会
- ・日本社会政策学会
- ・ソウル大学日本研究所『日本批評』海外編集委員
- ・韓国ジェンダー政治研究所研究委員
- ・ソウル大学 SSK（Social Science Korea）東アジア地域秩序研究会共同研究員

板井広明（特任講師）

- ・経済学史学会（編集委員）
- ・日本イギリス哲学会（幹事）
- ・社会思想史学会
- ・政治思想学会
- ・日本フェミニスト経済学会
- ・日本有機農業学会
- ・経済理論学会
- ・中央大学経済研究所（客員研究員）
- ・現代経済思想研究会（世話人）

仙波由加里（特任リサーチフェロー）

- ・日本医学哲学・倫理学会（国際誌編集委員）
- ・日本生命倫理学会
- ・日本臨床倫理学会
- ・日本生殖看護学会
- ・European Society of Human Reproduction and Embryology（ESHRE）

臺丸谷美幸（特任リサーチフェロー）

- ・日本アメリカ学会（JAAS）
- ・日本移民学会
- ・ジェンダー史学会
- ・アジア系アメリカ人研究会（AALA）
- ・情報文化研究会（AIC）（運営委員・学術誌編集担当）
- ・Association for Asian American Studies（AAAS）

3.

国際シンポジウム・ セミナー

2016 年度 国際シンポジウム・
セミナー・研究会概要

主催国際シンポジウム詳細

共催海外・国内シンポジウム詳細

主催 IGS セミナー・研究会詳細

共催セミナー・研究会詳細

協力機関企画シンポジウム

▶ 2016 年度 国際シンポジウム・セミナー・研究会概要

社会課題と直結するテーマを含む学際的な研究対話

2016 年度、IGS では精力的にシンポジウム、セミナー、研究会開催に取り組んだ。年間開催数の増加のみならず、テーマについてもより一層の広がりを見せている。現代日本の課題関連では、女性活躍促進や働き方改革、生殖医療に関するもの、世界的に注目が集まっている課題としては、女性たちの暴力的な政治的・宗教的運動参加やアメリカ大統領選挙などが取り上げられた。他にも、理論的な考察を深めることを目指した研究会や、文学、歴史などの人文学系のセミナー、社会運動団体と協力しての LGBT 社会包摂を目指したシンポジウムもあった。総じて、ジェンダー研究の特徴である、学際性やテーマの多様性、社会課題との直結性が顕示される事業成果となった。

IGS 主催 国際シンポジウム

	イベント名	参照
	国際シンポジウム 金融化、雇用、ジェンダー不平等 Financialization, Employment, Gender Inequality	50 頁
	国際シンポジウム (特別招聘教授プロジェクト) 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較 Family, Work, and Well-Being in International Perspective	53 頁
	国際シンポジウム (特別招聘教授プロジェクト) 女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考 Women, Religion and Violence in International Perspective	56 頁
	国際シンポジウム (特別招聘教授プロジェクト) 明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎 Gender, Religion, and Social Reform in the Meiji Period: The Case of Sumiya Koume and Nakagawa Yokotarō	59 頁
	国際シンポジウム なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙 How far have we come in equal political representation? Lessons from the 2016 presidential election in the US	62 頁

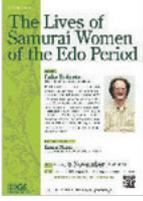
IGS 共催 海外・国内シンポジウム

	イベント名	参照
	国際シンポジウム モダン再考：戦間期日本の都市・身体・ジェンダー Reconsiderer le 'modan': La ville, le corps et le genre dans le Japon de l'entre-deux-guerres 主催：ストラスブール大学日本学科、アルザス欧州日本学研究所	65 頁
	シンポジウム 『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう？』出版記念トークセッション 主催：性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会（LGBT 法連合会）	66 頁

IGS 主催 IGS セミナー

	イベント名	参照
	IGS セミナー（生殖領域シリーズ 1） AID 出生者のドナー情報を得る権利 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕	69 頁
	IGS セミナー（特別招聘教授プロジェクト） Family and Schooling in Contemporary Japan Foreign Perspectives and Research （現代日本における家庭と学校教育：外国人研究者の視点と研究）	71 頁
	IGS セミナー Imagining a Postneoliberal Future The Queer (Im)possibilities of Ecuador's Citizen Revolution （ポスト新自由主義の未来を想像する：エクアドル市民革命のクィアな（不）可能性）	73 頁
	IGS セミナー（生殖領域シリーズ 2） 同性カップルの家族づくりと AID 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕	75 頁
	IGS セミナー 記者と語る『京城のモダンガール』 消費・労働・女性から見た植民地近代——コロニアリズム／ポストコロニアリズム／ネオコロニアリズムの射程と『女』の位置	77 頁

IGS 主催 IGS セミナー

	イベント名	参照
	IGS セミナー（第1回「冷戦とジェンダー」研究会） 「冷戦とジェンダー」研究会 第1回研究会/キックオフミーティング	79 頁
	IGS セミナー（特別招聘教授プロジェクト） The Lives of Samurai Women of the Edo Period （江戸時代の武家の女性たち）	80 頁
	IGS セミナー（生殖領域シリーズ3） The Ethics of Prenatal Testing （出生前検査をめぐる倫理） 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕	83 頁
	IGS セミナー（特別招聘教授プロジェクト） Gender, Food, and Empire Eating the Other in Hayashi Fumiko's Novels and Naruse Mikio's Adaptation Films （ジェンダー・食・帝国：「他者を食べる」物語と記憶（林芙美子の小説と成瀬巳喜男の翻案映画を中心に））	85 頁
	IGS セミナー（「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会） 台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開 〔2016年度 第1回「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会〕	88 頁
	IGS セミナー（特別招聘教授プロジェクト） Finding your Place Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions （立ち位置を理解する：日本の新宗教フィールドワークからの考察）	90 頁
	IGS セミナー 日本における女性と経済学	93 頁

IGS 主催 IGS 研究会

イベント名	参照
 <p>IGS 研究会 (第 2 回「冷戦とジェンダー」研究会) 『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス：アメリカ合衆国の動向に注目して</p>	95 頁
<p>IGS 研究会 JAWS 研究交流会</p>	96 頁

学内他機関との共催 セミナー・研究会

イベント名	参照
 <p>IGS セミナー Perinatal Mental Illness, Attachment, and Affect Communication (周産期精神疾患、母子間愛着、および情緒的コミュニケーション) [グローバル人材育成推進センター共催]</p>	98 頁
 <p>研究交流会 The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis A Discussion with Gender Scholars Sylvia Walby and Heidi Gottfried (シルヴィア・ウォルビー教授とハイディ・ゴットフリート教授との研究交流会 —「知識経済」と『Crisis』後のフェミニズム) [グローバルリーダーシップ研究所共催]</p>	101 頁

協力機関企画シンポジウム

イベント名	参照
 <p>シンポジウム (共催) イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて 主催：科研費「基盤研究 A イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」代表：長沢栄治 共催：東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」</p>	103 頁
 <p>ジェンダー史学会シンポジウム (共催) ポスト「戦後 70 年」とジェンダー史：地域のジェンダー実践を思考の手がかりに 主催：ジェンダー史学会</p>	104 頁

▶ 2016年度 主催国際シンポジウム詳細

IGS 国際シンポジウム 金融化、雇用、ジェンダー不平等

【日時】2016年4月11日(月) 18:10~20:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604 大会議室

【司会】板井広明 (IGS 特任講師)

【報告】

ジョヨッティ・ゴーシュ

(ジャワハルラル・ネルー大学教授・インド)

「金融危機と女性の経済的状況」

C.P.チャンドラシェーカー

(ジャワハルラル・ネルー大学教授・インド)

「アジアにおける金融と不安定性」

【ディスカッサント】伊藤誠 (東京大学名誉教授)

【閉会の辞】足立真理子 (IGS 教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英 (同時通訳)

【参加者数】41名

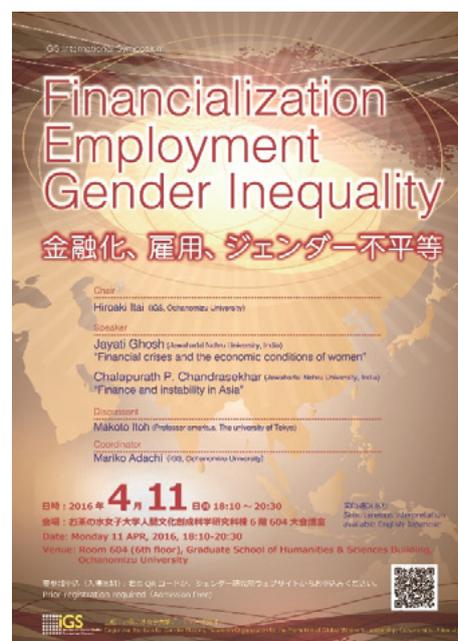
【成果刊行】IGS Project Series 10『金融化、雇用、ジェンダー不平等』

【趣旨】

グローバルで不安定な金融経済の様相と、その下での雇用やジェンダー不平等の問題を主題としたシンポジウム。登壇者は、インドのジャワハル・ネルー大学で教鞭を取られるジョヨッティ・ゴーシュ教授と C.P.チャンドラシェーカー教授。お2人は『*ICSSR Research Surveys and Explorations: Economics*』(Oxford University Press、2015)の編者であり、また最近では、横川信治教授(武蔵大学)も編者となっている『*Industrialization of China and India: Their Impacts on the World Economy*』(Routledge、2013)に寄稿されている。ゴーシュ教授は、UNDP(国連開発計画)などで要職を務められるなど、世界的に著名なケインズ学派のフェミニスト経済学者である。当日は、ジェンダーに関連するグローバルな金融経済や雇用の問題について議論する。

【開催報告】

2016年4月11日(月)、ジェンダー研究所主催による「金融化、雇用、ジェンダー不平等」というテーマで国際シンポジウムが開催された。新年度が始まったばかりの日程での開催であったが、多くの参



加者を得て、活発な議論が交わされた。司会は、板井広明 IGS 特任講師がつとめ、開催趣旨と登壇者の紹介が行われた。

一人目の登壇者、ジョヨッティ・ゴーシュ氏（インド、ジャワハルラール・ネルー大学教授）は「金融危機と女性の経済的状況」という題目で、ジェンダー化された経済危機の影響とマクロ経済政策について論じた。女性労働者は景気の調整弁や家計補助的労働力として見なされてきたため、経済危機においては男性労働者とは異なった影響を蒙ったことを 2000 年代以降の統計データより示した。特に、無償労働が資本蓄積のために決定的に重要な役割を果たしていることには留意すべきで、マクロ経済政策によって有償労働と無償労働の配分は変化する。2008 年以降の経済危機への対応政策はジェンダー視点を考慮せず、公共事業の増大と緊縮財政政策による失業率上昇と社会保障費削減は、女性が無償労働を強化して家計の不足分を補填しなくてはならない状況をもたらした。一方で、福祉支出の拡大や雇用創出、最低賃金などの上昇といったジェンダー・センシティブな経済危機対策をとったスウェーデンやアルゼンチンでは、比較的早期に金融危機からの脱却と生産と雇用の回復を遂げた。危機からの回復には、雇用の強化と社会保護の拡大が要であり、マクロ経済政策はその中心に女性と労働者の状況改善を据えることによって乗数的に有益な影響が創出され、さらなる経済活動の拡大が生まれ、持続可能な経済成長、より公正な発展、社会的緊張の減少が可能になるだろうとまとめた。

次の登壇者であるチャンドラシェーカー氏（インド、ジャワハルラール・ネルー大学教授）は「アジアにおける金融と不安定性」と題して報告を行った。1970 年代半ばに始まる金融自由化の波は、アジア地域においては 1991 年の国際収支の危機と 1997 年の金融危機を誘発し、1990 年以降、資本の流入を伴うグローバルな金融統合化が進行して、アジアの金融制度はアングロ・サクソン型となった。しかし、1997 年のアジア通貨危機以降、多くの国では、大量の外貨準備高が危機への対応策と見なされるなどしたため、経済発展のためのリソースを十分に活用できなかった。また金融危機の影響とその対応は各国で異なり、1997 年危機では危機直後から世帯と政府の債務削減が開始されたのに対して、2008 年危機では、国内外の借入金の増大や累積債務の増加となった。2015 年までに香港、シンガポール、中国、韓国などのアジア諸国／地域の銀行信用の GDP 比は、米英よりも高いレベルになったが、外国資本による民間主導の成長や減税、企業合併が進み、金融政策の効果の実体経済への影響は限定的か確認できない状況である。このように、金融化を軸にした経済成長はマクロ経済的管理の問題を抱えつつ、アジア諸国に脆弱性をもたらすものだった。これらのことを踏まえ、持続可能で安定的な経済の実現には、金融資本の規制が重要であると主張した。

討論では、伊藤誠氏（東京大学名誉教授）が、ゴーシュ報告に対して、第 1 に経済危機において女性の雇用と家事労働の増大という二重負担の指摘は重要で、その論理をより丁寧に考察する必要性がある点、第 2 にアジア地域の経済が構造的に脆弱性を持ち、より内需依存型経済にして安定性を得ることが女性にとっても重要である点、第 3 に危機対応としてはインフラ整備（コンクリート）よりも社会保障（人間）が重要であり、現代的ケインズ政策もその内容が問われることを指摘した。チャンドラシェーカー報告については、第 1 に投資を社会的にコントロールしなければ資本主義としても機能しないのではな



いかという点、第2に日本の金融自由化は外圧のみでなく大企業を中心として自己金融化が進行した結果であるとも考えて金融自由化を捉える必要があること、第3にアジア諸国における消費者金融の拡大という現象は、旧来の資本主義における労働力の商品化から、労働力の金融化という事態への推移を象徴しているもので、そのことのジェンダー的意味を問うことが重要ではないかとコメントされた。最後に女性の力も含めた草の根の相互扶助的なもの（協同組合や地域通貨など）や社会的経済を、ケインズ的国家政策と相反しない形で模索できるのではないかと、それが21世紀型の社会民主主義であると指摘された。

報告者からの応答では、ゴーシュ氏は、伊藤氏の21世紀型社会民主主義のローカル・モデルには全面的に賛意を表すとした上で、そこでは女性の生産的労働の貢献が評価されておらず、無償労働の再分配も課題にあがっていないので、女性の参画を推し進め、男性支配的文化を変革する必要があるとコメントした。チャンドラシェーカー氏は、金融活動の収益率が生産活動の収益率を上回り、帝国主義的膨張が不可能になると国内的なバブルが発生することを資本主義の本質と指摘し、金融に代わる人間の生活=福祉を中心とした経済の在り方を考えていく必要があるとした。また、新しい社会主義や社会民主主義に関連して、草の根活動の重要性を認めつつも、国家が主導権をもって金融を管理し、新たな銀行制度を構築する重要性を喚起した。

クロージングでは、足立真理子 IGS 教授が本シンポジウムでの議論を総括した。金融化とジェンダーという課題は、2008年グローバル金融危機以降、フェミニスト経済学やジェンダー分析において、その重要性が認識されてきた。とくに雇用の規制緩和によるジェンダーへのインパクトが異なること、すなわちジェンダー非対称的な現われである。また2報告でも触れられたように、危機後の財政緊縮策が女性に対して負の影響が強いのは、女性の無償労働をより強化し、負担を増大させることによって社会的再生産を充当せざるをえなくさせるからである。現在の日本では金融危機後の経済立て直しがさらなる金融緩和を通じて進められるなか、女性は待機児童を抱えつつ高齢者のケアを行い、非正規雇用や派遣によって就労する。そして多くの人が金融資産と言えば預貯金で、株式投資には縁がないまま置き去りにされ、赤字財政の名のもとに消費税増税が是認される状況への批判は、主流派からもでてきている。財政支出が真に考慮されるべきは、旧来型の箱モノではなく、女性が無償労働によって下支えし、担ってきた領域であることは明白である。そこにこそ人間の生活の実存があるからであり、「金融化・雇用・ジェンダー不平等」を議論した本シンポジウムが、そこにこそ届くことを要望すると結んだ。

金融化が進行し経済が不安定化する世界において生じている新しい課題に対して、オルタナティブな社会の在り方とそのための施策を真摯に展望する姿勢が印象的なシンポジウムであった。



(記録担当：中村雪子 立教大学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託員)

IGS 国際シンポジウム（特別招聘教授プロジェクト） 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較

【日時】2016年6月9日（木）18:15～20:15

【会場】本館 306 号室

【司会】

スーザン・D・ハロウェイ

（カリフォルニア大学バークレー校教授・米／IGS 特別招聘教授）

石井クツ昌子（お茶の水女子大学教授／IGS 所長）

【報告】

小野坂優子（スタヴァンゲル大学准教授・ノルウェー）

「仕事と家庭と幸福感：日本とノルウェーの視点から」

根本宮美子（京都外国語大学教授）

「日本における未婚男性の幸福と家族の変化」

【ディスカッサント】スーザン・D・ハロウェイ、石井クツ昌子

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】78 名

【成果刊行】IGS Project Series 5『家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較』

【趣旨】

世界各国において、親たちは、新たな子育てと就労のありようを模索している。本シンポジウムでは、ノルウェーと日本という、大きく異なる慣習や経済、制度形態を持つ2つの国の家族生活の変化に着目し、それぞれの国での実証研究をもとに、親と子、双方のウェルビーイング支援のための方向性について議論する。

【開催報告】

2016年6月9日（木）お茶の水女子大学にて、ジェンダー研究所主催によるシンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較」が開催された。本シンポジウムは、本学ジェンダー研究所特別招聘教授スーザン・ハロウェイ氏の企画立案であり、ノルウェーのスタヴァンゲル大学の小野坂優子准教授と京都外国語大学の根本宮美子教授を報告者としてお招きし、ハロウェイ氏とジェンダー研究所長石井クツ昌子教授がディスカッサントとして登壇した。

小野坂氏は「仕事と家庭と幸福感：日本とノルウェーの視点から」と題する研究報告の中で、日本と比べて大きく進んでいるノルウェー社会の男女共同参画の状況を紹介し、過去30～40年間の変化の背景には政策主導による制度改革があり、それに伴う市民の意識変化が現状をもたらしたと解説した。日本とノルウェーの男女共同参画推進のあり様の差は、夫婦間の家庭内役割分業の意思決定に関する比較優位理論（収入を得る、家事を担当するなどの分担は、得意な分野で特化した方が経済効率が良い）に



よる分析が当てはまる。つまり、男女の収入差が大きい日本では夫が稼ぎ手となり妻が無償ケアワークを担当する「伝統的」分業形態が、収入格差が比較的小さいノルウェーではいずれの役割も男女で共有する「男女平等」分業形態が、経済効率を理由に主流となる。しかし、幸福感という点についてこの分業状況を調査すると、経済効率が良い＝幸福感が高いとなるわけではなく、むしろ夫の家事への貢献度が高いことが妻の幸福感を押し上げるといった、男女共同参画の形との相関関係があることが示唆された。日本の男女共同参画および幸福度推進の課題としては、長時間労働とそれを奨励する現在の構造を改革し、女性を労働市場に送り出すと同時に男性を家庭へ引き寄せる制度設計をしたり、育児支援等の制度の目的を、単に女性を働かせるということではなく、人的資源への投資という考え方にシフトすることなどが大事であるとの指摘がなされた。

根本氏の「日本における未婚男性の幸福と家族の変化」と題する報告では、日本の未婚男性の結婚観についてのインタビュー調査結果が示された。この調査は、従来女性の高学歴化・晩婚化ばかりに焦点が当てられていた少子化の分析を、男性の側にも注目するという試みで、特に、近年顕著である高学歴高収入男性の未婚率上昇の背景に迫っている。その結果、日本の独身男性が思い描く結婚のイメージは、いまだに男性稼ぎ手と家庭を守る女性の組み合わせという画一的なもので、そのため、結婚とは幸福をもたらすものではなく、むしろ義務と負担を増加するものにとらえられていることが明らかになった。結婚の動機の一つとなり得る性関係についても、様々な性商品やサービスを自分の都合に合わせて消費することが出来るようになり、人との関係性を築くことなしに効率的に手に入れられるようになってきている。こうした性的商品・サービスに限らず、個人の感情面に働きかけて幸福や興奮、連帯感などを提供する労働をアフェクティブ・レイバーというのが、日本はこうした産業が非常に発達した消費サービス依存型経済となっており、こうした経済・産業構造面の変化も、家族を形成しない単身生活者の増加を助長していると考えられる。結びとして、ジェンダー分業を前提とした日本的雇用慣行が変わらない限り、引き続き未婚率は増加し、家族を持つことが幸福を保証するものではないという考え方が定着するのではないかとこの将来像が示された。

これに続き、ハロウェイ氏からは、まず小野坂報告について、ノルウェーでチャイルドケアや産休育休制度の充実、労働時間の短縮といった男女共同参画政策が成功をおさめたのは、ノルウェーが他国と違って特別だったからではなく、政策の優先順位をそのように設定し、組織や政策を変えることで人々の考え方や価値観が徐々に変化していったからであり、日本や米国においても同様の変化を促すことは可能であるはずだと指摘した。また、根本報告については、終身雇用制の崩壊などの経済社会面での変化が、男性の家族形成行動に変化をもたらす未婚を増加させているにも関わらず、家長＝支配者という男性性を求める文化的価値は変わらずに残ったままである点を強調し、どのようにしたら、結婚＝義務・負担というイメージを払拭して、家族の親密性に価値を見出すことが出来るようになるだろうかと、会場へ疑問を投げかけた。

石井氏からは、小野坂氏・根本氏ともに幸福に注目している点が興味深いとの指摘があった。社会科学の研究では、社会における問題点、つまり負の部分に目が向けられることが多いが、幸福というポジティブな概念を用いることで新しい発見があるはずだと指摘し、石井氏自身も「ポジティブ社会学」



を提唱しているとのことである。また、小野坂報告に関しては、ノルウェーで育児に参加する男性へのインタビューを行った際に、日本は「イクメン」という言葉があると話したら笑われたというエピソードを紹介し、できるだけ早く、日本でも男性の育児参加が常態化して、「イクメン」という特別な呼称が不要になるようになってほしいという希望を述べるとともに、2010年に導入された「パパ・ママ育休プラス」のような制度が社会変革につながる可能性を指摘した。根本報告については、そのアプローチがこれまでの男性性研究とは違った切り口である点を評価し、両報告からは今後の自身の研究にも取り入れていきたいことがらを含めて多くのことを学んだと結んだ。



会場には、主催者の予想を上回る聴衆が参集し、登壇者の話に熱心に耳を傾けて、質疑応答では多くの質問が出された。本シンポジウムの議論の詳細は、後日、IGS Project Series の1冊として刊行されている。

(記録担当：吉原公美 IGS 特任リサーチフェロー)

IGS 国際シンポジウム（特別招聘教授プロジェクト） 女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考

【日時】2016年10月19日（水）18:30～20:30

【会場】共通講義棟2号館102号室

【コーディネーター/司会】

エリカ・バッフェツリ

（マンチェスター大学准教授・英/IGS 特別招聘教授）

【基調講演】

アトリー・セン（コペンハーゲン大学准教授・デンマーク）

「女性とラディカルな運動：ジェンダーと紛争についての新しい視点を得る」

【ディスカッサント】

松尾瑞穂（国立民族学博物館准教授）

「Prof. Atreyee Sen の議論を受けて」

小川真理子（日本学術振興会特別研究員(PD)/大妻女子大学）

「日本におけるDVの加害者と被害者」

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】47名

【成果刊行】IGS Project Series 7『女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考』

【趣旨】

暴力的な政治団体への女性の参加の増加は、一般市民のみならず、世界各地の研究者や活動家、政治家、宗教家らにとっても重要な関心事となっている。外国人戦闘員、自爆テロ、反政府武装集団の兵士や支援者、暴力的な政治プロパガンダの唱道者といった形での、女性たちの闘争への積極的な関与は、従来の、戦争や暴力の被害者としての女性像を覆すものでもある。本シンポジウムでは、女性、宗教、暴力、そして、紛争とジェンダーの研究のアプローチや方法論について、研究者、大学院生、一般参加者を交え、国際的視点から議論を深める。

【開催報告】

2016年10月19日（水）、お茶の水女子大学にて、ジェンダー研究所主催による国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考」が開催された。本シンポジウムは、ジェンダー研究所のエリカ・バッフェツリ特別招聘教授の企画立案であり、バッフェツリ氏の共同研究者であるコペンハーゲン大学のアトリー・セン准教授を基調講演に、国立民族学博物館の松尾瑞穂准教授と日本学術振興会特別研究員（PD）の小川真理子氏をディスカッサントとしてお招きした。本企画は、バッフェツリ、セン



両氏により進められている研究プロジェクトについて、学際的かつ国際的なフィードバックを得ることも目的のひとつであった。

石井クンツ昌子ジェンダー研究所長による開会挨拶に続く、バッフェッリ氏の趣旨説明では、バッフェッリ氏とセン氏による、過激な宗教・政治団体、運動への女性の関与についての共同研究を開始した経緯が紹介された。両氏とも、女性たちが武器を手にしたり、暴力的な行為に積極的に参加している事実があるにもかかわらず、いつまでも女性の被害者性が強調されたり、自爆攻撃などへの参加は「例外的」と特別視され続けていることに疑問を持ち、研究プロジェクトを立ち上げたとのことである。また、同プロジェクトは、女性たちの過激活動参加の動機・その表象・その後の記憶の3つの要素に注目している。そして、バッフェッリ氏からは、自身が研究を続けているオウム真理教内での、女性指導者の役割がどうであったかについての解説が加えられた。

女性の右翼活動の研究を進めてきたというセン氏の基調講演では、過激な運動に関わる女性たちの多様な動機や参加形態の例を挙げ、それらが、従来のジェンダー分析の枠組みやメディア表象では説明しきれないものであることを示した。例えば、過激な宗教団体に加入する女性たちは、加入前にその活動についての十分な情報を得ており、複数の選択肢も検討し、熟慮の上でその道を選んでいる。フェミニストであれば、女性にも男性と同様の「戦う権利」があるとの意見を持つこともある。対照的に、男女の身体的差異を重要視し、銃後の支援という「女性の役割」を請負う者もいる。こうした事実は、女性＝被害者、女性＝ピースメーカーという理解の枠には収まらない。また、重要なポイントとして、男性主導の運動に女性が加わることで必ずその活動に変化が起きること、また、戦時という状況が、既存の社会規範や家父長制度を揺さぶり、女性のエンパワメントをもたらすことも指摘された。さらに、過激な運動における女性同士の関係性のあり方の例として、まず、セン氏が調査を進めてきたヒンドゥー・ナショナリスト団体シヴ・セナの運動における協力関係が紹介された。団体の女性たちの連帯は、その思想のみでなく、公共交通機関を利用するときに持ち歩く小型のナイフやレイプ被害を防ぐための専用のスマートフォンアプリなど、自衛手段を供給することによって強化されているという。また、女性間の敵対、暴力のケースとしては、米国のキリスト教原理主義団体の女性たちが、自らの宗旨に基づく理想が唯一のアメリカの母親像であるとして、中絶を行うクリニックの焼き討ちや、移民女性を死傷せたりする例や、インド・カシミール地方のイスラム教女性団体が、社会をクリーンにすると称して、公の場で、西洋の習慣であるヴァレンタインデーを楽しむ女性たちの顔にインクを塗りつけたり、着衣を破くなどの辱めを与えるなどしている例が示された。結びでは、「女性の集団暴力は『ソフト・フェミニズム』か？」という設問が投げかけられた。フェミニズムという視点を持ってみると、過激な運動への女性の参加は、女性たちを家の外へ連れ出し、武器を持たせ、自尊心を高める結果をもたらしている。ただし、そうした中でも、女性たちは、面と向かって男性や家父長制度に挑むのではなく、むしろソフトに、「創造的服従」とも呼べる新しい順応の形態を創り出すことで、社会全体のジェンダー規範に変化をもたらそうとしているのではないかとの結論が述べられた。

ディスカッションの松尾氏からは、戦争加担や政治闘争を背景にした加害者としての女性の存在は、歴史的かつ継続的に見ることができるが、その暴力



に対する評価は、いつ、誰の視点で語るのかによって、大きく異なってくるだろうとの指摘があった。例えば、戦後の日本においては被害者史観が先行していたが、80年代以降、戦時中の女性たちの後方支援者としての戦争加担に目が向けられるようになり、加害者史観への転換が見られた。自身の研究フィールドであるインドからの例としては、独立運動の現場において、女性特有の道徳性や忍耐性が非暴力運動にふさわしいというジェンダー・レトリックによる女性動員が行われたが、こうしたレトリックはセン氏の報告に見られる現代の事象にはもはや当てはまらない。結婚時に嫁の持参財（ダウリ）が少ない場合に、サリーに火をつけて殺してしまうケースで女性が殺人者として逮捕されたり、レイプにあった娘を家庭内の年長の女性が殺してしまう名誉殺人が行なわれたりしている。閉じられた家庭内で発生する暴力の背景には、母と娘、義母と娘といった女性同士、そして男性も含めた家族内の、わかりやすい加害者と被害者像に当てはまらない、入れ子状になった複雑な暴力構造があるだろうとの指摘もなされた。

続いて、小川氏からは、専門分野であるドメスティック・バイオレンス（DV）の日本の現状に照らしてのコメントがあった。DVに関しては、傷害・暴行とも、男性加害者・女性被害者のケースが9割を占めるが、殺人については、女性加害が4割に上る。妻による夫殺害では、長年にわたる夫からの暴力に耐えかねての殺人というケースも多く、加害者・被害者の暴力構造は単純ではない。未だ女性が被害者になるケースが圧倒的多数ではあるが、男性被害者の存在にも目が向けられている。しかし、DV被害を誰にも相談しなかった割合は、女性が44.9%であるのに対し、男性は75.4%となっており、妻からの暴力について恥ずかしくて人に話せないといったジェンダーバイアスが、男性の被害実態を見えにくくしている面があるとの指摘がなされた。また、男性被害者も顕在化している状態ではあるが、圧倒的多数である女性被害者に対する支援制度の構築が急務であること、被害者支援と同時に加害者教育をする必要性や、当事者が被害者や加害者として自身を認識することに困難があるという現実が示された。

質疑応答と討論は、小川氏がコメントの最後に挙げた、セン氏への質問で開始された。「女性が武器を手にすることで力を得て家父長制度や家庭から解放されるということだが、ラディカルな運動や軍隊の中には、やはり家父長的な構造があると思われる。その中で女性たちは矛盾を感じていないのか」という質問に対し、セン氏は、過激な運動に参加する女性たちが実際に「家父長制度」などの概念を使ってものを考えているわけではなく、そこに既存の学問領域におけるジェンダー・フレームワークの限界があるのではないかとの指摘で応じ、既存の理論枠組による研究者視点の分析手法に疑問を投げかけ、市井の女性たちの考え方に着目するという、バッフェツリ、セン両氏による研究プロジェクトの姿勢が示された。その後も聴衆からの質問は続き、登壇者・聴衆間のとても充実した討論が持たれた。今回の企画は、研究プロジェクトの概要を示すにとどまる部分があったが、今後の研究展開を待ち、再度、本学において成果発表の機会を持つことが期待される。本シンポジウムの議論の詳細は、後日、IGS Project Seriesの1冊として刊行されている。



（記録担当：吉原公美 IGS 特任リサーチフェロー）

IGS 国際シンポジウム（特別招聘教授プロジェクト）

明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎

【日時】2017年1月17日（火）15:30～17:30

【会場】本館 306 号室

【コーディネーター／司会】

ラウラ・ネンツィ

（テネシー大学教授・米／IGS 特別招聘教授）

【基調講演】

マーニー・S・アンダーソン（スミス大学准教授・米）

『『ヤツがワシの色女を奪りゃあがった』：中川横太郎と炭谷小梅、19 世紀日本における生の変容』

【コメンテーター】

エリック・シッケタンツ

（日本学術振興会外国人特別研究員／東京大学）

石井紀子（上智大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】26 名

【趣旨】

明治維新後の改良は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、人々の考えやジェンダー役割に変化をもたらした。元士族の官僚中川横太郎と、その妾炭谷小梅のふたりは、当時の開明的な個人の代表例である。1868 年、中川は炭谷の芸妓としての契約を買い取り妾とした。1870 年代半ば、中川は基督教に興味を持ち、プロテスタントの西洋人宣教師が開校した神戸ホーム（現在の神戸女学院大学）に炭谷を入学させた。数年後、炭谷は妾が罪深いものであると結論付け、基督教に改宗、中川と離別した。その後、炭谷は社会改良家として重要な役割を担い、中川も衛生学や教育分野において唱道者として脚光をあげた。維新後の数十年間、教育や宗教、社会改良に力を注いだ二人の人生は、男女がいかにか自らの住む世界を変えようと努めたかを明らかにしてくれる。

【開催報告】

2017 年 1 月 17 日（火）お茶の水女子大学にて、ジェンダー研究所主催による国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎」が開催された。本シンポジウムは、ラウラ・ネンツィ特別招聘教授の企画によるものである。ネンツィ氏と同じく、日本の近世史を専門とする、米・スミス大学のマーニー・S・アンダーソン准教授を基調講演に、日本学術振興会外国人特別研究員として東京大学で宗教研究に取り組んでいるエリック・シッケタンツ氏と、米国女性史の専門家である、上智大学の石井紀子教授をコメンテーターとしてお招きした。テーマは、アンダーソン氏が現在取り組



んでいる研究プロジェクトに関するものであり、基調講演、コメント、質疑応答を通して、その知見を深く掘り下げる議論が展開された。

アンダーソン氏の基調講演タイトルは『『ヤソがワシの色女を奪りゃあがった』：中川横太郎と炭谷小梅、19世紀日本における生の変容』である。幕末の開国を境に、日本社会における人々の考え方やジェンダー関係がどのように変化したか、またその変化にキリスト教がどのように関与していたかという点を、岡山の地方史から探る内容であった。また、方法論の上では、男女を別々に、当時の男性は、女性は、という分析をするのではなく、カップルとして同じ枠組みの中で見るという新しいアプローチがとられている。カップルの関係性の変化に焦点を当てることで、社会のジェンダー関係やその変化のあり様が、より浮き彫りになるのではないかという試みである。

中川横太郎は、1836年、備前岡山藩主池田家に儒学者として仕える家に生まれ、維新後は、地元の名士として、近代化のための社会改良に積極的に取り組んだ人物である。炭谷小梅は、1850年、下級の武家に生まれ、幼いころに両親が病死。生計を立てるために、得意であった三味線の技能を生かして芸者になり、中川に出会って、身請けされ妾となった。中川の本妻とその二人の息子、そして自身も中川との間に娘をもうけての同居生活であったが、キリスト教との出会いが、これに大きな変化をもたらした。1875年、岡山に最初にキリスト教の宣教師を連れてきたのは中川である。中川と炭谷は、宣教師たちが全国で女学校を作っていることを知り、1878年、28歳の炭谷は、中川の支援を受けて、当時神戸ホームと呼ばれていた、神戸女学院に入学した。在学中に、妾は罪深いものであるというキリスト教の教えに触れた炭谷は、1881年に、中川との関係を解消して、その下を去った。これについての中川の発言が、報告タイトルのセリフである。キリスト教の宣教師を連れてきたことが、後の炭谷との別れという、中川にとって皮肉な結果をもたらした。

離別の後も、二人は、同じ岡山の地で社会改良に取り組んでおり、互いの社会活動のネットワークには重なる部分があったが、キリスト教への姿勢の違いが、二人の軌道を決定的に分けたと言える。中川にとって、キリスト教や宣教師は、西洋の文化や技術、知識をもたらしてくれる存在であり、自らの目的達成のためには大いに利用したようだが、信徒になることはなく、宣教師たちが熱心に説いた、妾制度反対や禁酒については、それらに対する怒りを隠さなかった。その一方で、炭谷は、キリスト教との出会いにより、妾の立場を捨て、新しい主体性を見出して、活躍の場を広げ、地域社会のリーダーという立場を切り拓いていった。アンダーソン氏は、これは、当時の女性に求められた良妻賢母という理想を超えていく道であったと指摘した。二人とも、自ら行動を起こして、新しい社会での新しい役割を開拓していったといえるが、生活のすべてを完全に新しく塗り替えたのではなく、過去から継続して維持されていた生活の側面もあった。中川と炭谷の生を、並行して詳しく分析していくことで、明治の近代化が個人個人の男女にどう影響したかについての理解を深めることができるのである。

続いて、シッケタンツ氏が、中国と日本における仏教と近代性の相互作用について研究している立場からコメントした。まず、ここでのキリスト教の宗派がプロテスタントであり、非西洋社会におけるプロテスタントへの改宗は、近代性に改宗すると同じであると認識されていたということが紹介された。いずれも変化を好むことから親和性がある。また、



改宗により「個人」という考え方がはぐくまれて、新しい主体性が生まれた。炭谷と中川の人生の変化、軌道の分離がおきたことの分析として、改宗をきっかけにした主体性獲得が大きかったのではないかという指摘である。その個人主義への理解の差が、中川が考える社会改良と、炭谷が考える社会改良のずれを生んだ可能性もあると示唆した。また、当時の仏教界については、女子教育への関与は、キリスト教の後追いをするように 1880 年代後半になってから始められたという事や、キリスト教が天賦の人権を説いたのに対し、仏教は、男女の社会的役割分業は、自然の掟として決められているとしていたなどの違いがあったことが解説された。しかし、プロテスタントにも、家庭内における女性の役割の重要性を強調している面があり、キリスト教への改宗が家父長主義からの解放であるということとはできないだろうと述べた。そして、明治時代の地方地域社会における社会変化を、国家イデオロギーのトップダウンではなく、ボトムアップの運動実体からとらえる、アンダーソン氏の視点を高く評価し、国家イデオロギーやナショナリズムという抽象的な問題について、炭谷や中川がどのような立場をとっていたかといった探求も加えると、さらに新しい側面を見出すことができるのではないかと提案した。

続いて、石井氏からは、米国人女性宣教師たちの布教活動についての解説を含め、炭谷の社会改良活動をよりよく理解するためのコメントが出された。改宗後の炭谷は、バイブル・ウーマンとしての活動を通じて、岡山の社会福祉や教育分野での影響力を確立していったと思われる。バイブル・ウーマンとは、居留地以外への移動に制限があり、日本文化への理解や日本語の会話力が十分でなかったりした外国人宣教師に代わって、家庭を訪問するなどして布教活動を行った女性たちである。まず女性を改宗させ、次にその家族をとという戦略があり、バイブル・ウーマンたちは布教活動において高い成果を上げた。また、多くのバイブル・ウーマンが、改宗して生活を変えた姿は、日本人女性の新しいロールモデルになったともいわれている。この活動を通じてネットワークも形成され、かつ、教会の内外を問わず、地域に献身的に関わったことで、炭谷は、岡山で最も影響力のあるバイブル・ウーマンとなった。当時の岡山には、プロテスタントキリスト教徒の割合が高く、信徒は広い社会階層に存在し、教会と地域の社会福祉のパイオニアたちの関りが深かったなどの地域的特色があり、これが幕末以降の特徴ある社会改良運動をもたらした。また、アンダーソン氏が言及した過去からの継続性に関連し、教会を中心にした新しいネットワークのほかに、江戸時代から続く女性同士の支援ネットワークが継続的に存在してはいなかったのだろうかという疑問も提示された。

質疑応答では、韓国の布教活動との比較、仏教との比較、中川の妻の実家である大西家の人々の教育への貢献、明治の社会改良、特に女子教育、女子高等教育設立における女性たちの役割の重要性など、様々な視点からのコメントがだされ、一組の男女に焦点を当てることから広がっていく歴史理解や、関心の広がりの可能性を感じる事が出来た。本シンポジウムの議論の詳細は、後日、IGS Project Series の 1 冊として刊行予定であり、刊行後にはそちらもご参照いただきたい。また、アンダーソン氏のプロジェクトは、書籍刊行を目指したものであるとのことで、新著の完成を待ち望む。

(記録担当：吉原公美 IGS 特任リサーチフェロー)

IGS 国際シンポジウム

なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？

ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙

【日時】2017年3月18日（土）13:30～17:00

【会場】共通講義棟1号館304号室

【総合司会／ファシリテーター】申琪榮（IGS 准教授）

【特別講演】

メリッサ・デックマン（ワシントンカレッジ教授・米）

「トランプ時代におけるジェンダー・ギャップ：2016年大統領選で女性有権者の投票行動から何を学ぶか」

ジュリー・ドーラン（マカレスターカレッジ教授・米）

「女性大統領候補：2016年大統領選におけるジェンダーの役割」

【ディスカッサント】

メリッサ・デックマン

ジュリー・ドーラン

武田宏子（名古屋大学教授）

申琪榮（IGS 准教授）

マリアン・パリー（デラウェア大学名誉教授・米）*悪天候により来日キャンセル

【ラウンドテーブル司会】田中洋美（明治大学教授）

【主催】ジェンダー研究所、JAWS（日米女性政治学者シンポジウム）

【後援】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】136名

【趣旨】

2016年11月に行われたアメリカ大統領選挙は、アメリカで初の女性大統領が誕生するのか、またはアメリカ歴史上政治経歴のないもっとも「アウトサイダー」が勝利するのかをめぐって世界の関心を集めた。そのため、選挙キャンペーン中、これまで以上にジェンダー・人種・移民の問題が争点になり、「アメリカ的価値観」をめぐる激しい対立が目立った。就任後のトランプ政権は、選挙公約の実現にむけて「米国第一主義」を隠れみのに、多様性を否定する危うい政策を次々に発表した。トランプは、なぜ、誰に支持されたのか？「歴史上初の女性大統領」の誕生はなぜ失敗したのか？トランプ政権の動きをどのように理解すべきか？

本シンポジウムは、ジェンダー・多様性の視点からアメリカ大統領選挙の結果及び、その後のトランプ政策が持つ社会的影響を理解することを目的に企画された。シンポジウムの第1セッションでは、ア



アメリカ政治学の専門家による基調講演、第2セッションでは、ジェンダーと政治を専門にする研究者を招いて、基調講演者とともにトランプ政策について議論するラウンドテーブルを設けた。

【開催報告】

アメリカ初の女性大統領誕生という大方の予想を裏切った、昨年 11 月のアメリカ大統領選。歴史的な番狂わせはなぜ起きたのだろうか。この選挙でジェンダーはいかなる役割を果たし、女性の政治リーダーがかつてないほど注目されている日本は、ここから何を学べるだろうか。3月18日に開催されたシンポジウムには130人以上が参加し、熱心に耳を傾けた。

メリッサ・デックマン氏（米ワシントン・カレッジ教授）は、女性有権者の投票行動を分析し、ジェンダーが与えた影響を検討した。

アメリカでは1980年代以来、女性は民主党、男性は共和党候補への支持に傾く「ジェンダー・ギャップ」の存在が知られていた。今回、クリントンが初の女性大統領候補として「ガラスの天井」を打ち破るかどうかとともに、トランプの女性蔑視発言や性的ハラスメントが注目され、ジェンダー・ギャップはさらに大きくなることが予想されていた。

しかし蓋を開けてみると、投票行動に大きな変化は見られなかったという。実際、有権者の3分の1は、トランプの女性差別発言を問題視せず、その多くはトランプに投票することになった。

むしろ大きな説明力を持ったのは、今回も党派性であった。もともと共和党支持の女性たちの85%はトランプに投票しており、中絶や経済政策、移民、国家安全保障などの主要な争点についても、ほぼトランプ候補の政策に近い考え方を持っていた。一方で、無党派層の男性が圧倒的にトランプに投票したという事実は興味深い。女性の中でも人種、階級、婚姻状態による多様性は大きく、白人、既婚、教育程度の低い女性はトランプ候補に投票する傾向にあった。ジェンダーがあたえた影響は限定的であったといえる。

一方、ジュリー・ドーラン氏（米マカレスター・カレッジ教授）は、メディア報道における「ダブルバインド」に焦点を当てた。これは、女性候補者は十分な男らしさを示す必要があるが、男らしくありすぎてもならず、適度に女らしさも示さなくてはならないという、矛盾した要求を表す概念である。

米国の主要メディアはことごとくクリントン支持を表明していたが、ドーラン氏は、実際にはクリントンに不利なジェンダー化されたステレオタイプが流布され、有権者もそのように反応したと主張した。

そうした偏見のひとつは、クリントン候補が「腐敗している」という見方である。実際にはトランプこそが嘘の主張を繰り返していたにも関わらず、女性は男性よりも正直であることが期待されるがゆえに、両候補は同じ程度にネガティブに報道されたという。男性の候補は品格がなく思いやりに欠けるふるまいをしても許される一方で、そもそも男性のものと見なされる公職に立候補する女性だけが、ジェンダー化された矛盾した要求に引き裂かれ続けることになるのである。

シンポジウム後半では、申琪榮 IGS 准教授のファシリテーションで、さらに広い観点からディスカッションが行われた。

武田宏子氏（名古屋大学教授）は、誰が「女性」を代表しうるのかという興味深いコメントを投



げかけた。矛盾するジェンダーの要求に直面したクリントンは、「男性のように」有能であることを示すあまり、より弱い立場にある女性の利害を必ずしも守ってきたわけではない。このことはフェミニストの間にも、クリントンを「私たちの代表」として支持すべきかどうかをめぐって対立をもたらすことになった。

また今回の大統領選では、「ポスト真実」という言葉に表されるように、既成メディアと既成政治家への不信、党派性による分裂とそれをさらに強化する新メディア、全体的な右傾化と中道左派のアイデンティティの揺らぎなど、多くの問題が浮上したことも議論された。議会制民主主義を脅かすこれらの問題の多くは日本にも共通している。異なる人々と対立・排除する政治ではなく、対話と包摂にもとづく政治へと再生をはかるには、従来のやり方と異なる政治の実践や制度が必要とされているようである。

今回のシンポジウムで明らかになったことのひとつは、ジェンダーが選挙戦をかたちづくる重要な要素のひとつであったこと、しかしジェンダー分析だけでは不十分ということだろう。今後、ジェンダーと他の要因とのクロス分析に基づく米大統領選のさらに詳細な分析が待たれるところである。フェミニスト分析もまた、女性差別や性暴力など「女性に共通の」政策領域だけに関心を集中させてはならないだろう。ジェンダーと他要素との相互関係を見ながら、今起きている大きな政治的变化の過程について、より深い探求を進めていく必要が実感された。

(報告：本山央子 お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻)

▶ 2016 年度共催海外・国内シンポジウム詳細

国際シンポジウム

モダン再考：戦間期日本の都市・身体・ジェンダー

【日時】2017年3月23日（木）～25日（土）

【会場】ストラスブール大学・仏

【プログラム】

《第1日目》

イレーナ・ヘイター（リーズ大学・英）

「再びモダン・ガールについて：スペクタクルと主体性」

サンドラ・シャル（ストラスブール大学／CEEJA・仏）

「モラルな風刺の様相：漫画家によるモダン・ガール」

伊藤るり（一橋大学）

「沖縄のモダン・ガール現象：新興エリート層の娘たちとその新しい卓越感覚」

《第2日目》

伊藤公雄（京都産業大学）

「モダニティとしての「集団」と「技術」：中井正一『委員会の論理』を手掛かりに」

イブ・カド（トゥールーズ大学・仏）「Budō vs. Sport: The Issue of the Body in the So-Called Modan Period」

セップ・リンハート（ウィーン大学・オーストリア）

「日本は本当にそれ程モダンな国だったのか：「細君天下絵葉書」を通じて見た大正日本の夫婦関係への一考察」

フレデリック・エブラール（ストラスブール大学／CEEJA・仏）

「岡本一平：新聞社付属画家の目から見た時代」

スティーブン・ドッド（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院・英）

「宇野浩二の「夢見る部屋」におけるモダニズムの翻訳」

ジェラルド・プルー（セルギー＝ポントワーズ大学・仏）

「旅行をしているモボとモガ：西洋へ行ってみる時の日本モダン」

《第3日目》

クリスチャン・ガラン（トゥールーズ大学・仏）

「Modern or 'modan'? Schools and Schoolchildren in 1920s and 1930s Japan」

黒田昭信（ストラスブール大学・仏）「もう一つの近代の超克：「国語」の「主体」とその運命」

足立眞理子（IGS 教授）「銘仙と「入れ子状の近代」：逸脱への欲望」

和田博文（東洋大学）「十五年戦争下の女学生と、女性教養誌 むらさき」

【主催】ストラスブール大学日本学科、アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）

【共催】お茶の水女子大学ジェンダー研究所ほか



『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう?』出版記念 トークセッション

【日時】2016年9月19日(月・祝) 14:00~16:40

【会場】共通講義棟2号館201号室

【出版報告】

綱島茜 (LGBT法連合会事務局長代理)

【報告者・パネリスト】

若林一夫 (世田谷区人権・男女共同参画担当課長)

瀬尾かおり (文京区総務部ダイバーシティ推進担当課長)

齊藤静子

(多摩市くらしと文化部平和・人権課長、TAMA女性センター長)

【ビデオメッセージ】

長谷部健 (渋谷区長)

【特別報告】

熊坂義裕 (一般社団法人社会的包摂サポートセンター代表理事)

【活動提起】

原ミナ汰

(NPO法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク代表理事)

【司会】

森谷佑未 (LGBT法連合会)

【パネルディスカッション司会】

神谷悠一 (LGBT法連合会事務局長)

【開会挨拶】

猪崎弥生 (お茶の水女子大学副学長)

池田宏 (特別配偶者法全国ネットワーク事務局共同代表)

【閉会挨拶】

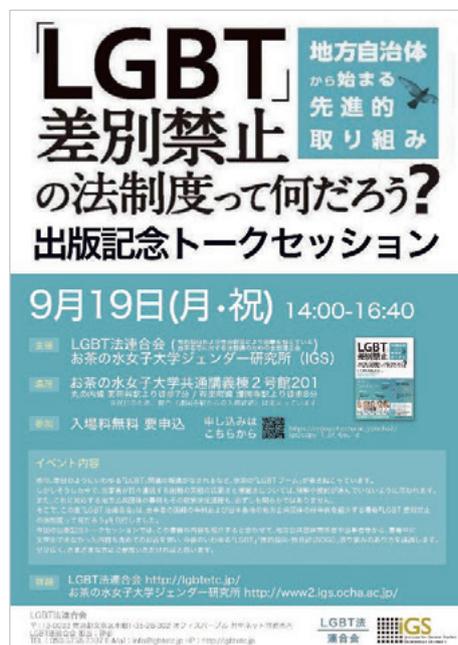
永野靖 (LGBT法連合会)

【主催】

性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会 (LGBT法連合会)

ジェンダー研究所

【参加者数】137名



【趣旨】

昨今、毎日のようにいわゆる「LGBT」関連の報道がなされるなど、空前の「LGBT ブーム」が巻き起こっています。しかしそうした中で、当事者が日々遭遇する困難の実態の広範さと複雑さについては、理解や検討が進んでいないように思われます。また、これに対応する地方公共団体の事例もその政策決定過程も、必ずしも明らかではありません。そこで、この度「LGBT 法連合会」は、当事者の困難の事例および日本各地の地方公共団体の好事例を紹介する書籍『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう？』を刊行しました。今回の出版記念トークセッションでは、この書籍の内容を紹介するとともに、地方公共団体関係者や当事者等から、書籍中に文字化できなかった内容も含めてお話しを伺い、今後のいわゆる「LGBT」「性的指向・性自認（SOGI）」取り組みのあり方を議論します。

【開催報告】

2016年9月19日（月・祝）お茶の水女子大学にて、ジェンダー研究所とLGBT法連合会（正式名称：性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会）共催により、『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう？～地方自治体から始まる先進的取り組み～』の出版記念トークセッションが開催された。

本書は、共催団体であるLGBT法連合会により2016年5月に出版されたものであり、いわゆる「LGBT」（注）への差別禁止の法律の必要性について考察しているものである。全三章から成っており、法制度の必要性、当事者から集めた困難事例などの他、地方自治体での「LGBT」差別禁止の施策について、各自治体の長にインタビューも行っている。今回のトークセッションでの登壇者には、本書内で取り上げられた自治体のうち3自治体の、LGBT差別禁止施策の所管課長が含まれている。

司会は森谷佑未氏（LGBT法連合会）がつとめ、本学の副学長猪崎弥生氏、パートナー法ネット（LGBT法連合会代表団体）共同代表の池田宏氏からそれぞれ開会挨拶が行われた。続いてLGBT法連合会事務局長代理の綱島茜氏が出版報告と書籍の内容紹介を行った。

一人目の登壇者である世田谷区人権・男女共同参画担当課長若林一夫氏からは、世田谷区でのパートナーシップ宣誓の取り組みについて、制度の概要や運用状況の説明が行われた。世田谷区のパートナーシップ宣誓制度は、条例ではなく要綱の制定によって運用されている。要綱の場合、法的拘束力を持たないが、条例に比べ施行までの期間が短くできることが利点であるという。困難な状況に置かれている当事者に対して、できる限りはやく対応するべきであるという考えから選択された方法である。

二人目の登壇者である文京区総務部ダイバーシティ推進担当課長瀬尾かおり氏からは、現在の「文京区男女平等参画推進条例」におけるLGBTの扱われ方等と、今後の取り組みについての報告があった。今後の取り組みについては、まず文京区的全職員に対して、LGBT差別禁止についての啓発をし、認識を改めてもらうことを挙げていた。なぜならば、当事者は他の人たちと同様に、住民票の受け取りや税金の手続き等、様々な用件で役所との関わりを持っているからである。LGBT差別禁止の取り組みは、人権を扱う部署だけの問題ではなく、横断的にすべての部署に関わるものである。

三人目の登壇者である多摩市くらしと文化部平和・人権課長、TAMA女性センター長齊藤静子氏からは、「多摩市女と男の平等参画を推進する条例」公布までの経緯について発表が行われた。この条例は市民案を土台に作られたものであるが、市民案の段階（平成21年11月提出）から、LGBTも暮らしや

すい社会を実現するという内容が盛り込まれていた。市民案であるからこそ、これだけ早い時期から LGBT への配慮を盛り込もうという案が提示されたのではないだろうか。行政の職員でなく市民が、自らの生活感覚をもとに差別禁止を訴える方が、より実態に即した施策となるという面もある。多摩市では条例をもとに、LGBT に関する市民向け・職員向け両方の取り組みをすでにいくつもやっているが、相談体制の充実など、これから行うべきことも多く残されているという。



また、合わせて渋谷区長長谷部健氏からのビデオメッセージが上映された。渋谷区では全国的に有名になった同性パートナーシップ制度が施行されている。しかしこれだけにとどまらず、今後他の自治体の施策も参考にしながら、ますます LGBT 差別を排除するような社会づくりをしていく予定だという。

休憩を挟み、パネルディスカッションが行われた。司会は LGBT 法連合会事務局長神谷悠一氏がつとめ、パネラーには報告者として登壇した若林氏、瀬尾氏、齊藤氏の三名が並んだ。

神谷氏からは、他部署との連携の難しさについて問いかけがあった。行政の特徴である縦割り組織では、課を越えての問題共有には難しさが伴う。しかし、瀬尾氏の報告にもあったとおり、LGBT の問題は役所全体で取り組まなければならないものだ。とりわけ、窓口職員など直接当事者に接する機会の多い職員に対しては研修が必須であるし、役所は異動の多い組織であることから、結局はすべての職員への啓発が肝要である。パネラー三者ともに、それぞれの自治体での一層の職員への啓発の必要性を強調した。

最後の報告として、(一社)社会的包摂サポートセンター代表理事熊坂義裕氏から、電話相談「よりそいホットライン」のデータをもとに、全国的な「LGBT」の困難状況に関する発表が行われた。セクシュアルマイノリティ専用ラインでの相談者には自殺念慮を抱いた・抱いている人が多いことや、悩みの多くが人間関係に起因していることなど、困難な状況にある当事者の実像が示される内容であった。

次に、共生ネット (LGBT 法連合会代表団体) 代表の原ミナ汰氏から、今後の活動提起が行われた。今回のトークセッションで扱われたのは、主に自治体レベルでの LGBT 差別禁止のための施策であった。しかし、自治体で行える範囲には限界があり、国レベルでの法律制定をもってしか行い得ない施策も多々ある。今後、自治体レベルの施策と国レベルの施策の両方が揃ってこそ、困難の不可視化や潜伏化を防いで、多様な人にとって暮らしやすい社会が実現するはずだとし、自治体だけでなく国への訴えかけの重要性を提起した。

閉会挨拶は、永野靖氏 (LGBT 法連合会) によって行われた。

自治体レベルでできる限りの施策を考え、進めていくことと、国レベルでの立法を求める、という二通りの方法を同時に行っていくことが急務である。

(注) 書籍内では LGBT 法連合会によって「LGBT」ではなく「SOGI (Sexual Orientation and Gender Identity)」つまり性的指向と性自認という指標を用いるべきとする立場が示されている。ただし、すでに多くの人に馴染みつつある言葉であることから、今回のトークセッション内でも「LGBT」を便宜上用いている。

(記録担当：吉澤京助 お茶の水女子大学大学院博士後期課程)

▶ 2016 年度主催 IGS セミナー・研究会詳細

IGS セミナー（生殖領域シリーズ 1）

AID 出生者のドナー情報を得る権利

〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕

【日時】2016 年 6 月 8 日（水）18:30～20:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 408 号室

【司会・コーディネーター】

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【報告】

久慈直昭（東京医科大学教授）

「医師から見た各国の AID 事情～ドイツ・イギリス・ベルギー等の状況」

仙波由加里

「AID 出生者のドナー情報を知る権利—英国・オランダ・ドイツ・米国の状況」

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】22 名

【趣旨】

近年の生殖医療の進歩は著しく、それともななって家族づくりの形も多様になりつつある。こうした生殖医療をとりまく現状の中で出てくる問題を、専門家や一般の人と議論する場として、IGS セミナー生殖領域シリーズを、開催することになった。第 1 回目は「AID 出生者のドナー情報を知る権利」に関する各国の状況についての報告の後、参加者と AID 出生者の出自をめぐる問題について議論する。

【開催報告】

2016 年 6 月 8 日（水）、お茶の水女子大学にて、ジェンダー研究所主催の IGS セミナー（生殖領域シリーズ第一回）を開催した。このセミナーは、東京医科大学の久慈直昭教授、城西国際大学の清水清美教授と、お茶の水女子大学ジェンダー研究所の仙波の 3 人で研究をすすめている「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」の一部として開催し、今回のセミナーは「AID 出生者の出自を知る権利」をテーマに討論した。

最初の登壇者の久慈直昭氏（東京医科大学教授）は産婦人科医であり、実際に長く AID（提供精子を使った人工授精）を実施してきた経験を持つ。久慈は「医師から見た各国の AID 事情～ドイツ・イギリス・ベルギー等の状況」と題して、まず、AID が抱える問題を提示し、次にドイツ・イギリス・ベルギー等の状況について、自身が実際に現地に足を運び、得た情報を報告した。AID により起こっている問



題は、子が偶然に知った場合、これまでの親子関係に影響が及んだり、自らのアイデンティティの喪失、および遺伝情報の欠如から起こる遺伝病や近親婚の不安があげられる。そのため、久慈氏は現在日本でも、AID 開始時に夫婦に、①精子ドナーは匿名、②告知はしたほうがいい、③告知しても家族関係は悪くならない、④どうしても話せないときには、子どものリスク（子どもの苦痛）を考えるよう伝えるようにしている。諸外国に目をむけると、法によって「知る権利」が確保されるようになったことで、改正前のドナー情報が破棄されたり（ドイツ・オランダ）、提供者不足が生じたりしている。こうした状況を踏まえて、日本で今後も AID を継続して提供するために、提供が社会的善として認められるようになること、親子関係を法で確定すること、およびカウンセリングの整備が必要だと述べた。

二人目の登壇者の仙波由加里 IGS 特任リサーチフェローは、「AID 出生者のドナー情報を知る権利—英国・オランダ・ドイツ・米国の状況」と題して、現地に足を運び、得た情報を報告した。英国とオランダは、国が主体となって、DNA 鑑定をベースにして、ドナーと出生者、同じドナーから生まれた生物学的きょうだいを探す支援をしている。本報告では英国の UK DonorLink とオランダの Fiom の活動について紹介し、出生者のドナー情報を得る権利がどのように保障されているのかについて紹介した。また、ドイツは判例によって AID 出生者のドナー情報を得る権利が認められるようになったが、その判例（サラ・ピーンコスの事例）を紹介した。最後に米国については、米国統一親子関係法にて、どのように生殖医療で形成された親子関係を規定しているかを紹介した。遺伝子検査の普及から、偶然に育ての親と血縁がないことを知る者が現れたり、AID 出生者がドナーや、同じドナーから生まれた人を特定するケースについても紹介した。そして、これらの諸外国の事例を踏まえて、ドナーの匿名性が保障できないことを前提に、日本でもドナーの匿名性の廃止を訴えた。

（記録担当：仙波由加里 IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー（特別招聘教授プロジェクト） Family and Schooling in Contemporary Japan Foreign Perspectives and Research

（現代日本における家庭と学校教育：外国人研究者の視点と研究）

【日時】 2016 年 6 月 16 日（木） 15:00～16:30

【会場】 本館 128 号室

【コーディネーター】

石井クンツ昌子（お茶の水女子大学教授／IGS 所長）

【講師】

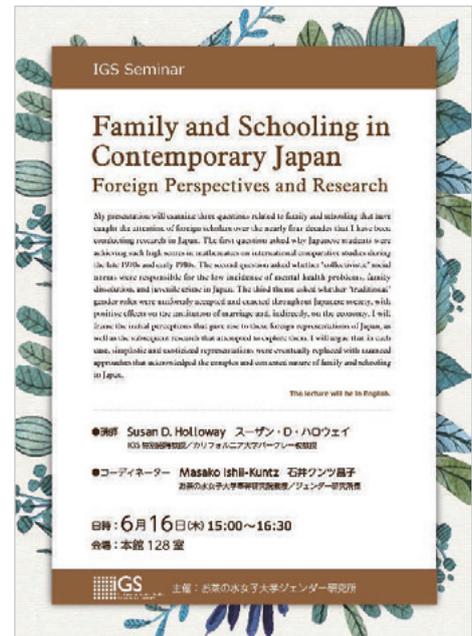
スーザン・D・ハロウェイ

（カリフォルニア大学バークレー校教授・米／IGS 特別招聘教授）

【主催】 ジェンダー研究所

【言語】 英語

【参加者数】 30 名



【趣旨】

本セミナーでは、3つの問いをもとに、日本の家庭と学校教育について、1970年代後半以降、外国人研究者が特に注目した事柄について考察する。一つめは、1970年代の終わりから80年代の初めにかけて、日本の子どもたちが、学習達成度の国際比較試験の算数科目で、高い得点を出すことが出来たのはなぜか？である。二つめは、日本における、精神疾患の発症と家族崩壊、少年犯罪の少なさ、集団主義的な社会規範に因るものか？三つめは、「伝統的」ジェンダー役割分担は、日本社会で一様に受け入れられて実行され、結果として、婚姻制度や（間接的に）経済活動に、実質的な効果をもたらしているのか？である。海外において日本がどのように描写されていたかと、それを起点になされてきた日本研究を振り返り、当初は短絡的に特異性が強調されていたものが、徐々に、日本社会の中の細かな差異や複雑性を理解するものに、変化してきたことを解説する。

【開催報告】

2016年6月16日、スーザン・D・ハロウェイ IGS 特別招聘教授による IGS セミナー「Family and Schooling in Contemporary Japan: Foreign Perspectives and Research」が開催された。ハロウェイ教授の研究分野は、家族と幼児教育の文化的側面からの分析であり、日本の就学前教育についての調査をもとにした著書『ヨウチエン：日本の幼児教育、その多様性と変化』（北大路書房、2004年）は、幼児教育関係者の間で広く講読されている。

講義では、米国人研究者による日本研究手法の変遷およびハロウェイ氏自身の40年にわたる日本でのフィールドワークについての解説がなされた。米国内で日本の教育についての関心が高まったのは、「日本脅威論」が広がりを見せた70年代終盤であり、これはちょうど教授自身が日本の幼児教育研究に着手した時期に当たる。当時の米国研究者の視点は、主に、日本の特異性や「良さ」にばかり目を向け、その源泉を短絡的に「文化」に求める偏りのあるものだった。そうした「外国」からの研究視点が、日本社会の中の差異の存在に気づき、それに目を向け、理解しようとする中で、内外の別へのこだわりを排した客観的な分析視点に変わってきた。講義の中で、ハロウェイ氏はこうした客観的視点を自身がどのように経験的に身に付けてきたかを示してくれた。氏の経験に基づくこの研究方法の解説は、国際比較研究に取り組む大学院生にとっては示唆に富んだものであった。



講義後半では、『少子化時代の「良妻賢母」：変容する現代日本の女性と家族』（新曜社、2014年）にまとめられた研究にも触れ、日本社会には、伝統的な「良妻賢母」の役割を担おうとしない現代女性を利己的と決めつける伝統文化偏重の傾向があると指摘し、政府や女性問題を取り扱う行政機関は、そうした時代遅れな文化的な言説の強化に努めるのではなく、もっと女性の意見に耳を傾け、現状理解を深めることが望まれるとの希望を示した。そして、「文化」であると正当化される慣習への思い込みを捨て、あきらめずに社会的公正を求める行動を続けることが、自身の日常を変えていくことにつながるはずとの励ましの言葉で、講義は締めくくられた。

（記録担当：吉原公美 IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー

Imagining a Postneoliberal Future

The Queer (Im)possibilities of Ecuador's Citizen Revolution

(ポスト新自由主義の未来を想像する：エクアドル市民革命のクィアな（不）可能性）

【日時】 2016 年 6 月 30 日（木） 18：30～20：30

【会場】 人間文化研究科棟 604 大会議室

【司会】

本山央子

(お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻)

【講演】 エイミー・リンド (シンシナティ大学教授・米)

【担当】 足立真理子 (IGS 教授)、 臺丸谷美幸 (IGS 特任 RF)

【主催】 ジェンダー研究所

【言語】 英語

【参加者数】 39 名



【開催報告】

6月30日(木)、エイミー・リンド教授(シンシナティ大学 女性・ジェンダー・セクシュアリティ学 学部長・米)による講演会が開催された。リンド教授は、政治経済学、ポストコロニアル研究、フェミニズム、社会運動と広い分野にまたがる研究に従事している。

格差拡大や金融不安定化など新自由主義経済の危機がグローバルに波及する中、2000年代半ばから中南米で左派政権が相次いで誕生したことは、日本でも一時注目を集めたが、ジェンダー、セクシュアリティ、植民地主義といった観点からの報告はほとんどなされていないように思う。その意味で、長年エクアドルをフィールドとし、現地の大学で教鞭もとっているリンド教授から、今回、左派政権による改革プロセスについて、しかも「クィア政治」という観点からの報告を聞くことができたのは、たいへん貴重な機会であった。講演では、左派革新政権と社会運動との緊張関係に焦点をあてながら、この改革がはらむ可能性と矛盾について議論された。

エクアドルでは2007年に社会主義者のラファエル・コレアが大統領に選出され、「市民革命」と呼ばれる改革がスタートした。その法的基盤となったのが、2008年の改正憲法である。リンド教授によれば、先住民運動、LGBT運動、フェミニスト運動などさまざまな社会運動が議論に参加したこの改憲は、ポスト新自由主義経済への移行だけでなく、はるかに広く深い変革を志向するものであった。

なかでも注目されるのは「家族」の再定義である。新憲法は、家族が血縁に基づく関係のみに限定されないことを承認し、LGBTが形成する家族や、ひとり親家庭、国境をまたいで形成される移民の家族など、多様な関係性に基づいて組織される家族を包摂し、再分配へのアクセスを保障する。さらに、先住民の自治と主権を認めてエクアドル国家を「多元的なネーション」としたこと、「自然の権利」を書

き入れたことに見られるように、2008年憲法は、家族、ネーション、経済、生命、市民権といった概念の意味づけなおし（resignification）を行うものであった。異性愛主義・植民地主義・新自由主義という従来の支配的規範からの離脱を志向する点において、この憲法は「クィア」な未来への可能性を開くものであったとリンド教授は指摘する。

一方で、このラディカルな「市民革命」は深刻な矛盾もはらんでいた。社会主義者でありながら敬虔なカトリックでもあるコリア大統領は、LGBTの権利擁護の姿勢を積極的に打ち出す一方、中絶の合法化を含む女性のリプロダクティブライツに対しては抑圧的で、国家女性省も廃止されてしまった。また、石油採掘や水資源の民営化に反対する先住民族運動や環境運動に対してもきわめて抑圧的であるという。

この矛盾をどう理解すべきだろうか。リンド教授は、国家における同性愛保護（homoprotectionism）と同性愛嫌悪（homophobia）との交差を指摘する。イスラエルがパレスチナ占領政策を正当化するために「中東で唯一のLGBTフレンドリーな国家」を標榜しているように、政府はしばしばLGBTの権利擁護を、何らかの目的を達成するために利用してきた。新自由主義、植民地主義的規範からの離脱をめざすエクアドルの「革命」においても、LGBTの権利は近代性と結び付けられ、解体されたかに見えた二項対立の規範は再構成されているのである。こうして「クィアネス」の可能性は開かれつつも同時に不可能性を示すように見える。

ここまでの議論からわかるように、リンド教授は「クィア」という概念を、セクシュアリティ・ジェンダー規範から外れる存在を示すカテゴリーの一つとしては扱っていない。では「クィア」とは何か？ 支配的規範に反する立場はすべて「クィア」と言いうるのだろうか？

リンド教授は、クィアの単一の定義はないとしながら、「私にとってクィアとは、制度化され自然化された二項対立的規範を脱構築し乗り越えるための方法論」とする。多くの国家が社会の基盤として家族を位置付けており、これは市民権の基礎ともなっている。したがって異性愛規範への批判は、国家と人々との関係を考え直すうえで核心となるのである。また売春規制や人種分離の法に見られるように、植民地主義において異性愛規範は中心的な役割を果たしてきたといえる。「クィア」をめぐる学術的理論化とは別に、活動家たちはそれぞれのローカルな文脈において単一のアイデンティティ・カテゴリーを超えて社会正義を迫及しようとしてきた事実を強調していたのも、社会運動に敬意を払いながら調査してきたリンド教授らしい回答であった。

ポスト植民地主義・ポスト新自由主義・ポスト異性愛規範をめざすエクアドルの「市民革命」の可能性と矛盾から、私たちは何を学ぶことができるだろうか。ひとつには、異なる政治的文脈の中で、国家の同性愛嫌悪と同性愛保護がいかに関与しているかに注意深く目を向けることであろう。日本においても同性パートナーシップを中心にLGBTの権利擁護の議論が盛んになっている状況について、あるいは「女性の活躍」が打ち出されている状況について、それがどの程度、異性愛規範に基づく家族制度に挑戦するものであり、どのような地政学的文脈の中で展開されているか、どのように植民地主義の遺産と関連しているのかを批判的に検討してみることは有用だろう。とりわけ、エクアドルと異なる方向性を志向する日本の改憲論においても、「家族」の意味づけなおしがひとつの焦点となっていることは興味深い。会場には研究者だけでなく社会運動に関わる人々も多く参加し、実践と理論の両面で多くの刺激に満ちたセミナーとなった。

（報告：本山央子 お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

IGS セミナー（生殖領域シリーズ 2）

同性カップルの家族づくりと AID

〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕

【日時】2016 年 7 月 27 日（水）18:10～20:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 604 大会議室

【司会】

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【報告】

東小雪（LGBT アクティビスト）

「日本におけるレズビアンマザー」

青山真侑（にじいろかぞく 副代表）

「日本で子育てするセクシュアル・マイノリティ親」

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】85 名

【趣旨】

近年、諸外国では同性婚を法的に認める動きがあちこちで見られ、生殖医療を利用して子どもを持つ同性カップルも増えてきている。まだわずかではあるが、日本でも親になることを望む LGBT カップルや、すでに子どもを持つ LGBT 家族も見られる。日本の LGBT の人たちが生殖医療等を介して子どもを持つとき、どのような問題にぶつかり、子どもに出生の事実を伝えることについてどのように考えているのか等を含め、本セミナーでは、レズビアンである女性 2 人に同性カップルの家族づくりについて話を聞き、さまざまな領域の人たちと討論する。

【開催報告】

最初の登壇者である東小雪氏（LGBT アクティビスト）は、「日本におけるレズビアンマザー」と題して報告した。2015 年、東京都渋谷区で始まった地方自治体による同性パートナーシップ制度が全国に広がりつつあり、日本でも同性カップルの存在が少しずつ目に見えるようになってきた。その一方で、子どもを育てる同性カップルについては、まだまだ可視化されづらい現状がある。実際には、レズビアンカップルを中心に、妊娠・出産により子どもを持ち育てる家族が日本でもここ数年で増えてきてはいる。しかし、そのハードルは高く、養子を希望しても、現実養子を迎えることは不可能に近い。また生殖医療で子どもを持とうとしても、日本産科婦人科学会の生殖医療は異性のカップルにしか提供しないという規定があるため、同性カップルは AID（提供精子による人工授精）などの生殖医療は受けられない。そのため、自分たちでドナーを探し、自己授精などを行おうとするが、精子提供者を探すのもむずかしい。精子提供者を見つけたとして、提供精子で自宅での自己授精を禁じる法はないが、現行法では出産した女性しか親にはなれず、子どもの法的な立場も不安定になる、子の福祉の観点からも問題である。また心理カウンセラーから、仮に AID で子どもを持っても、子どもには真実を伝えることが重要だとい



うアドバイスを受けた。東氏は最後に、自分たちも AID で子どもを持った場合には、ドナーへのコンタクトの可能性も含めて、子の出自を知る権利を守りたいと述べた。

二人目の登壇者の青山真侑氏（にじいろかぞく副代表）は、提供精子による体外受精で子どもをもったレズビアン女性である。ゲイ友人の精子提供により授かった子どもを育てている立場から、自身の経験を中心に「日本で子育てするセクシュアル・マイノリティ親」というタイトルで報告した。青山氏はファシリテータの仙波との対談形式で、自身の子どもを持つと動きはじめて、どのような問題に直面したかなど、自身の経験を話した。青山氏は現在のパートナーとのつきあいは、18年間にも及んでいる。子を持つために精子ドナーを探すのもたいへんだったが、子どもが生まれ、育児は二人でするものと思っていたが、パートナーは出産していないし、レズビアンであることを口外していなかったため、育児をしたくても職場の理解がなく、非常にたいへんな思いをした経験などを話した。また両親が女性であることを、子どもなりに理解している様子についても紹介した。

二つの報告から、同性カップルの家族づくりには、社会が多様な家族の形を受け入れ、親子規定を含め、子どもがどのような家族に生まれても不利益を受けない法制度等が必要だと感じた。

（記録担当：仙波由加里 IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー

訳者と語る『京城のモダンガール』

消費・労働・女性から見た植民地近代

コロニアリズム／ポストコロニアリズム／ネオコロニアリズムの射程と『女』の位置

【日時】2016年7月29日（金）10:00～12:00

【会場】本館 212 号室

【司会・コーディネーター】

臺丸谷美幸（IGS 特任リサーチフェロー）

【講演】

高橋梓（東京外国語大学大学院博士後期課程）

「京城の『モダンガール』とは誰なのか：訳者として日本語版

『京城のモダンガール』にかかわって」

姜信子（作家）

「私はいかにして植民地のモダンガールに出会ったか」

【ディスカッサント】足立真理子（IGS 教授）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】41 名

【成果刊行】

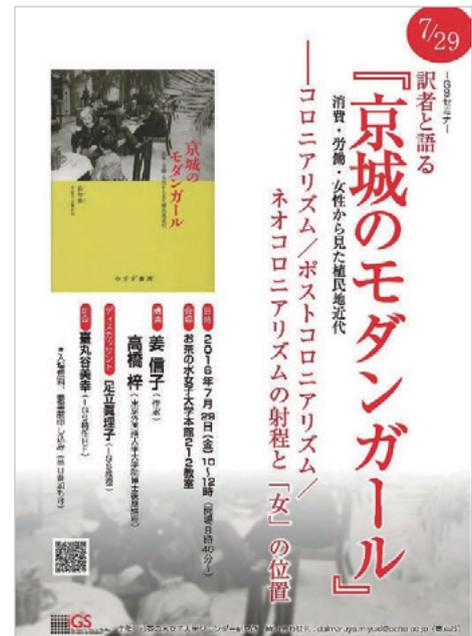
IGS Project Series 11 『訳者と語る『京城のモダンガール—消費・労働・女性から見た植民地近代』』

【趣旨】

2016年4月にみすず書房より、徐智瑛著、姜信子氏、高橋梓訳『京城のモダンガール：消費・労働・女性から見た植民地近代』（서지영『경성의 모던걸: 소비·노동·젠더로 본 식민지 근대』）が出版された。本会はこの日本語版出版を記念して、訳者の両氏を講演者に迎え、日本語版刊行に至った経緯や、日本の読者が日本語で本書を読むことの意味について議論した。司会は臺丸谷、ディスカッサントは足立氏が務めた。1920-30年代の植民地近代都市・京城（ソウル）で「モッタンガール（못한걸—あやまてる女、間違った女という意味）」といわれた「女」たちの表象と実像に、コロニアリズム、モダニズム、ジェンダー、人種／エスニシティ、階層など多様な視点から迫ることを目指した。

【開催報告】

セミナーは、はじめに司会の臺丸谷から、今日において継続・再生産される日本の植民地主義への警鐘、植民地都市京城のモダンガール研究から私たちは何を学ぶのかという問題提起がなされた。講演では、高橋氏から、本書の韓国での評価について解説の後、「モダンガールとは誰なのか」という発題を元に、本書が描いた女性たちの実像に迫る議論が提示された。次に姜氏は本書に出会う以前の出来事として、自身の家族の物語を出発点とする旅の話、すなわち、かつて朝鮮民族が歴史的に辿ったロシア、中央アジアへのディアスポラの軌跡を追い、さらに石垣島やハンセン病患者が隔離された島など日本国内に存



在する植民地を指摘しながら、濟州島に至るまでの経緯を述べた。そして言葉を奪われ「語る言葉を持たない」者の言葉を聴くことの重要性を指摘した。最後に「帝国が劣情をもって組み伏せる植民地は、常に従順な女の顔をしている」だろうが、本当は女の中には「鬼」がいるのだと述べた。ディスカッサントの足立氏は、戦間期研究とジェンダー分析による近代再考の重要性を指摘し、モダンガールとは、女性散策者であり移動する主体であること、植民地近代を異化する概念であると指摘した。ゆえにモダンガールの分析には、女性の行為遂行性そのものを見ることに限り可能となると分析した。学問知と文学や言葉が出会い、交差し、融和することで、本書が投げかけた多くの問いを紐解き、語る場となった。

《午後の部》

『京城のモダンガール：消費・労働・女性から見た植民地近代』書評会

【日時】2016年7月29日（金）13:10～19:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟408号室

【総合司会／コーディネーター】臺丸谷美幸（IGS 特任リサーチフェロー）

【報告】板橋晶子（中央大学兼任講師）

磯山久美子（お茶の水女子大学兼任講師）

臺丸谷美幸（同）

尹智炤（日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学準教授）

土野瑞穂（お茶の水女子大学みがかずば研究員）

岡崎まゆみ（帯広畜産大学専任講師）

吉良貴之（宇都宮共和大学専任講師）

崔世卿（早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員）

【応答】高橋梓（東京外国語大学大学院博士後期課程）

【主催】ジェンダー研究所

【共催】ポストコロニアル法理論研究会（代表：岡崎まゆみ・同）

【参加者数】19名（一般非公開）



IGS セミナー（第 1 回冷戦とジェンダー研究会）

「冷戦とジェンダー」研究会

第 1 回研究会/キックオフミーティング

【日時】2016 年 10 月 24 日（月）18:00～20:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 408 号室

【司会】岡崎まゆみ（帯広畜産大学専任講師）

【報告】

幸田直子（近畿大学専任講師）

"A Social History of the Cold War"

臺丸谷美幸（IGS 特任リサーチフェロー）

「調査報告：日系アメリカ人朝鮮戦争従軍兵士によるトランスナショナルな記憶の構築」（H27 年度竹村和子フェミニズム基金助成活動報告）

【ディスカッサント】兼子歩（明治大学専任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【助成】

日本学術振興会科学研究費（若手研究(B)）「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入：ジェンダーとエスニシティの視点から」（JP16K16670）

【研究会趣旨】

「冷戦の再考」という言葉は、ややもすると使い古された印象を受けるかもしれない。しかし、ことジェンダー、フェミニズム視点からの冷戦研究あるいは、冷戦史再考はいまだ研究が十分とはいえないのではないか。本研究会はこの問題関心を出発点とし、冷戦とジェンダーに関する問題に関心を持った広く学際的な交流の場の構築を目指し、設立するものである。

【2016 年度研究会構成】

コーディネーター：臺丸谷美幸（同）

構成員：申瑛榮（IGS 准教授）、宮内貴久（お茶の水女子大学教授）、武田興欣（青山学院大学教授）、幸田直子（同）

協力：岡崎まゆみ（同）、兼子歩（同）、山本めゆ（日本学術振興会特別研究員 PD）、土野瑞穂（お茶の水女子大学みがかずば研究員）

【開催報告】

はじめに幸田氏の報告では、昨今の冷戦研究の動向が紹介され、外交史と社会史の複合的観点からの冷戦史再考について提起がなされた。次に臺丸谷が研究報告を行った。本報告は H27 年度竹村和子フェミニズム基金助成の成果報告と位置づけられており、特に報告者が 2015 年 9 月に実施した韓国ソウル近郊と 2016 年 5 月に米国カリフォルニア州にて実施したフィールド調査を基にし、現代の朝鮮半島と米国にまたがる、日系人朝鮮戦争退役軍人会の戦争記念碑設立と顕彰運動に関する考察を行った。



IGS セミナー（特別招聘教授プロジェクト）

The Lives of Samurai Women of the Edo Period

（江戸時代の武家の女性たち）

【日時】 2016年11月8日（火）19:00～20:30

【会場】 本館 125号室

【コーディネーター/司会】

ラウラ・ネンツィ

（テネシー大学教授・米/IGS 特別招聘教授）

【講師】

ルーク・ロバーツ

（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授・米）

【主催】 ジェンダー研究所

【言語】 英語

【参加者数】 25名

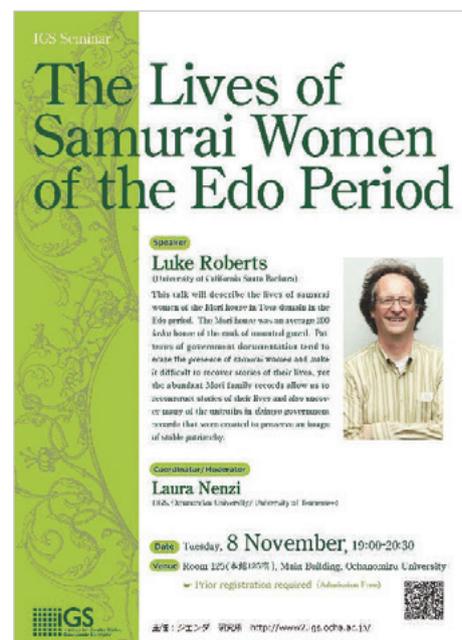
【趣旨】

江戸時代の武家の女性たちの生き様を、土佐藩に仕えた家の記録をもとに解説する。森家は藩の警護の役を務める200石取りの家である。藩の公式な記録文書は、女性たちの存在を見えないものとする記述であり、そこから、当時の女性たちの生き方がどのようなものであったかを知ることは難しい。しかし、森家に保存されていた大量の私的文書には、女性たちの生き様の再現を可能にする記録が残されている。そしてそれらの記録は、大名家の公式記録が、家父長制度は安定堅固であると証拠づけるための、偽りを含んだものであったことを明らかにしている。

【開催報告】

2016年11月8日、ラウラ・ネンツィ特別招聘教授の企画によるIGSセミナー「The Lives of Samurai Women of the Edo Period（江戸時代の武家の女性たち）」が開催された。カリフォルニア大学サンタバーバラ校のルーク・ロバーツ教授を講師に迎えての、英語による講義である。ロバーツ教授は、江戸時代の土佐藩の歴史研究に取り組んでいる。本セミナーは、土佐藩政府の公的記録と、家臣森家の家内で保存されていた私的記録の比較から、当時の武家の女性たちの生を読み解く内容であった。

藩の公的記録として残されている森家系図と、森家が私的記録として保存している系図には大きな違いがある。藩が持っている系図の性格は、各家の藩への奉公の記録であり、このため、すべての男子後継者が記載される。そして彼らの婚姻と、各家の構成員による犯罪が記録される。女性は婚姻についての記載と犯罪の記録にのみ登場するが、本人の名前が書かれているのではなく、誰それのおんな、というかたちで実家の父親の名前で識別されている。つまり、大事なものは姻戚関係ということだ。また興味深いことに、男子であっても年齢は記載されない。



これに対し、私的記録の家系文書には、女性の名前もきちんと書かれ、また全員の年齢がわかる。没後の法事や供養のためもあり、生没年の記載は重要であった。このような家内で管理されている系図の情報からは、公的記録には全く現れてこない、武家の女性たちの家内での役割を知ることができる。

森クマは、女性でありながら、実質的に家を管理していたが、それは藩の記録には記載されていない。クマは、かなり年長の夫の後妻として森家に入った。前妻には子がなく、妾の産んだ子が、夫の死後、家督を継いだ。しかし、この跡取りの夫婦は、若くして、成人前の子どもたちを残して死亡してしまう。彼らの長男が、後継として家長の立場になるが、まだ年若い上、参勤交代の供を命じられ江戸へ出立してしまう。そこで、家を管理する役割は、祖母であるクマが引き受けざるを得なくなった。それからまもなく城下で大火事があり、森家も焼け落ちるといふ困難もあった。こうした苦境から、クマは家を立て直し、さらに次男に独立した所帯をもたせるといふ偉業を、森家と実家のヨシダ家の親族の助けを得て成し遂げている。クマに限らず、母親が、幼い息子に成り代わって家を取り仕切るといふことは、珍しくなかったであろう。ただ、それがわかるのは、相続時の子どもの年齢がわかればこそのことである。藩の家系文書には年齢記載がないため、実権を握っていたのが家内の女性であったことが隠されてしまう。つまり、藩は、男性中心、家父長制という建前を記録することに力をいれていたということなのだ。

同様に、身分制度により、公的記録からは隠されてしまう女性がいる。港の税収役を父に持つ、庶民出身のウメノは、夫の3人目の妻として森家に入った。最初は使用人の立場であったが、婚礼の席には森家の親類縁者が招かれ、森一族からは正式に妻として認められた婚姻であったことが、夫の日記に記されている。しかし、庶民出身の彼女が、藩から公的に妻として認められることはなかった。伺いは立てたものの、その話はするなと言われた。後に、彼女の息子が家督を継いだとき、ウメノは、藩の記録に、その母である妾として記載された。だからといって、家内での立場が弱かったというわけではなく、夫の死後には養子である跡取りの結婚の一切を取り仕切るなど、重要な役割を果たした。社交的で婚家と生家の親戚との付き合いも多く、彼女が亡くなったときには、105人の会葬者が葬列に加わったと、日記に記されている。これも、藩の記録を見ているだけではわからない、武家の女性の姿である。

藩に残される系図は、下書きの提出に始まり、交渉を経て、最終的な公的バージョンが作られた。藩が気に入る、法に沿った記述であることが大事で、事実を正確に記録する必要はなかった。とはいえ、これは嘘というよりも、ある種の情報管理であると、ロバーツ教授は指摘した。これは、幕府なり藩政府にとって、または武家の男性たちにとって、家父長制は安泰であり、すべてを管理しているのは男性たちであるというイメージ作りをする機能を持っていた。

こうした構造は、女性による犯罪への対応にも表れている。女性が藩の記録に現れるのは、婚姻のほかには罪を犯したときであるが、藩の処罰の対象になるのは女性本人ではなく、夫など、家長の男であり、管理責任が問われるのだ。そのため、まずは夫が妻を罰することが求められ、そして、管理不行き届きとして、夫が藩から処罰される。そしてもちろん、女性の犯罪に限らず、男性の不品行についても、家としての責任が問われる。何か大事になりそうな問題が発生したときは、いかに内々に事を取めるか、家と藩の間の政治的な駆け引きに力が尽くされる。この際の水面下の動きは、藩の公的記録には残らないが、日記や随筆のような私的文書に、詳細な記録が残されていたりする。

マエノ家に嫁いだ森ナオは、夫の暴力に耐えかね、森家の母親に助けを求めた。一度は諭されて帰ったものの、もう我慢がならないと家を抜け出して実家に戻った。今度は母親も離婚に同意し、息子たちを説得して、森家の親戚に支援を求めた。当時、離婚は、夫が離縁状を書くことによるのみ成立したのである。森一族は一丸となってマエノ家の説得にあたり、並行して、藩政府への政治工作も進めた。

これを受けて、藩政府は、離婚が成立しなければ事を公にせざるを得ない、とマエノ家に圧力をかけた。この間、マエノ家は夫を懸命に説得し、ついには、離婚は殿への務め、と言って迫ったが、夫は頑なに首を縦には振らず、務めなどどうでもいい、とまで言い出した。結局、マエノ家では、庭に大きな檻を作り、真冬に2ヵ月、夫を閉じ込め、ついには離縁状を書かせてことを収めた。この件はマエノ家の男性が詳細な記録を残していたのだが、興味深いことに、その文章のどこにもナオの名前は書かれていない。



ロバーツ氏が、これは森ナオの話であるとわかったのは、森家の系図があったからとのことである。合わせて、この離婚は、ナオの母が一家を束ねる立場にあったおかげで実現したことであり、ここにも、女性の持つ力を垣間見ることができる。

この他にも、各家に保存されている日記や手紙からは、女性たちの生活のいろいろな側面が見えてくる。例えば、クマの孫娘エツについては、弟の日記に、釣りが好きだったことを始めとして、たくさんの日常生活についての記述が残されている。興味深いのは、形見分けのリストである。自分が亡くなった後に、自分の持ち物の内から、何を誰にあげるかの一覧であるが、これを見ると、どんなものが大切な品で、誰が親しい人だったかがわかる。またそこから、女性たちが、生家や婚家の親戚やその他の友人たちと、どんなネットワークを持っていたかも見えてくる。

これらの物語により、江戸時代の家父長制のもとで声も力も持たなかったと思われがちな武家の女性たちが、実際には、様々な形で、自分の思うところを実現させる力を、人間関係のネットワークをうまく使うことで得ていたことが明らかにされた。その他にも、セミナーでは、ロバーツ氏の歴史文献の読み込みの技術について知ることが出来た。例えば、藩の記録ひとつに目を通すだけでなく、私的記録との比較をしていくことで、藩の公的記録の目的やその社会的意味合いがわかってくる。私的記録にしても、男性が残した日記や随筆の量は、女性たちの手による手紙などよりずっと多いが、その中に家内の女性に関する記述は少なからずあり、そこから、家父長制の建前の背後に隠された、女性たちの生き生きとした姿をイメージすることができる。講義後には聴衆からの質問も多く出され、皆がロバート氏の話を楽しみ、そこから多くを学んだことが伺われた。歴史研究者が感じる発見の喜びを、一緒に味わせてもらったような講義であった。

(記録担当：吉原公美 IGS 特任リサーチフェロー)

IGS セミナー（生殖領域シリーズ3）

The Ethics of Prenatal Testing（出生前検査をめぐる倫理）

〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕

【日時】2016年11月10日（木）18:30～20:30

【会場】人間文化創成科学研究科棟 408 号室

【司会】

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【報告】

キャサリン・ミルズ（モナシュ大学准教授・オーストラリア）

「Gender, Disability and Bodily Norms」

武藤香織（東京大学教授）

「Ethics and Governance of Non-invasive Prenatal Testing in Japan」

【コメント】

石田安実（グローバル人材育成推進センター特任准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】12名

【成果刊行】IGS Project Series 9 『The Ethics of Prenatal Testing』

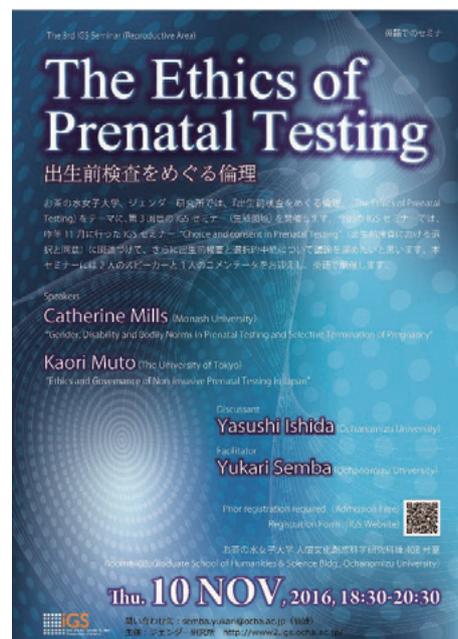
【趣旨】

お茶の水女子大学ジェンダー研究所では、2015年にモナシュ大学（オーストラリア）のキャサリン・ミルズ氏を迎え英語セミナーを開催したが、2016年度もミルズ氏が再来日し、前年に引き続き2016年11月10日に『出生前検査をめぐる倫理』“The Ethics of Prenatal Testing”をテーマにした英語セミナーを開催した。ミルズ氏のほかに、東京大学の武藤香織氏も招き、日本の出生前検査について報告していただき、この二人の報告に対して、お茶の水女子大学グローバル人材育成推進センターの石田安実特任准教授がコメントを述べた。

【開催報告】

今回のセミナーでは、胎児の障害とジェンダーの関係性も含め、出生前検査と障害胎児の中絶にかかわる問題を倫理的視点からとりあげた。

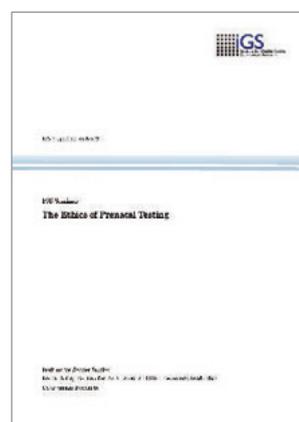
ミルズ氏が取り上げた事例は、定期妊婦検診で胎児の腕に障害があることがわかり、胎児が女の子であるために、美容面でのハンディを懸念して、親が胎児中絶を選択したケースである。そして武藤氏は、日本のこれまでの出生前検査と中絶をめぐる動きを紹介し、武藤氏らが実施した



NIPT（新型出生前診断）を希望するクライアントにカウンセリングを行う遺伝カウンセラーを対象とした調査結果についても報告した。NIPTは2012年に日本でも導入され、導入された当初は、安易な中絶につながるのではないかという懸念や、女性たちが検査のためにクリニックに押し寄せるのではないかなどといった予想もあったが、カウンセラーらによれば、NIPTの情報を提供しても、実際には、検査をうけない選択をする女性のほうが圧倒的に多いことがわかった。

石田氏は哲学者の立場から、二つの報告について倫理的視点からコメントを述べた。それぞれの報告につき、非常に詳細なコメントを述べたが、ミルズ氏の報告に対しては、腕が欠損している障害を持つ胎児が女兒であるために、生きる上では大きな障害ではないにも関わらず中絶された例について、選択の構造（choice architecture）や障害の重症度の感じ方（perception of severity）、正常性（normality）や健康と疾病（health and disease）が社会やある状況によって受け取られ方が異なること、特異であること（being anomalous）が異常（abnormal）とかならずしも一致しない点をあげた。そしてこの事例について、障害ベースでの中絶なのか、性別をベースとした中絶と判断するのか、それが非常に難しい点だと述べた。武藤氏の報告に対しては、マス・スクリーニングの問題を取り上げ、武藤氏がとりあげた「青い芝の会」や「不幸な子ども」（unhappy child）についても言及し、障害を持つ者に対する配慮のある社会の必要性について述べた。

当日の出席者は全員で12名と小規模なセミナーであったが、興味深い質問もあり、実りの多いセミナーであったと思われる。女性の社会進出が奨励され、高等教育や職場においても、男性と肩を並べ活躍する女性が増えて来た。それに伴って、女性がキャリアを築くまで妊娠・出産を先延ばしにするケースも少なくなく、高齢になっての妊娠のために、出生前検査を求める人も増えている。しかし、障害のある子は産まないほうがいいのか、そもそも障害とは何なのか、出生前検査は私たちに多くの倫理的な問題を投げかけている。



（記録担当：仙波由加里 IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー（特別招聘教授プロジェクト） Gender, Food, and Empire

Eating the Other in Hayashi Fumiko's Novels and Naruse Mikio's Adaptation Films (ジェンダー・食・帝国)

「他者を食べる」物語と記憶（林芙美子の小説と成瀬巳喜男の翻案映画を中心に）

【日時】2016年11月25日（金）18:30～20:00

【会場】本館125室

【コーディネーター/司会】

ラウラ・ネンツィ

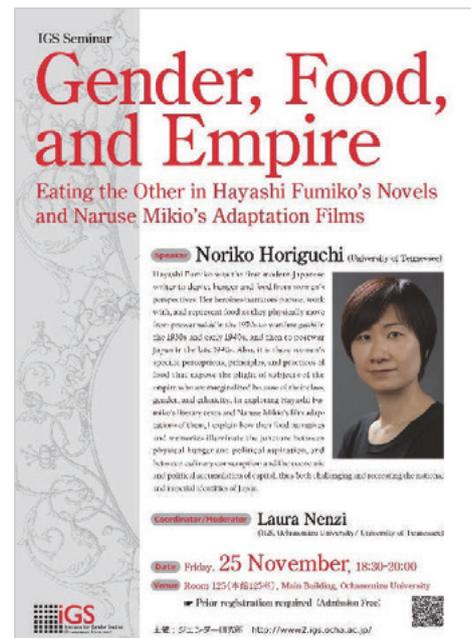
（テネシー大学教授・米/IGS 特別招聘教授）

【講師】堀口典子（テネシー大学准教授・米）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加人数】15名



【趣旨】

林芙美子は、日本で初めて、女性の視点から、飢えと食について書いた作家である。彼女の本の登場人物/語り手は、1920年代の戦前の内地を出発し、1930年代から1940年代前半の戦時中の外地へ、そして1940年代後半の戦後日本への移動をしながら、食を求め、食と共に働き、食を象徴してきた女性たちである。女性特有の、食についての理解と信念、行動があらわになっているのは、階級やジェンダー、民族を理由に周縁化された帝国臣民の苦境である。本セミナーでは、林芙美子の小説と、成瀬巳喜男によるその翻案映画を分析することで、女性たちの食についての語りと記憶が、身体的な飢えと政治的な野心の接合点、そして食事の消費と資本の経済的・政治的蓄積の接合点を、いかに照らし出しているかを解説する。そしてまた、その語りと記憶は、日本の国民と帝国のアイデンティティに異議を唱え、かつ再構築しているのである。

【開催報告】

2016年11月25日、ラウラ・ネンツィ特別招聘教授の企画によるIGSセミナー「Gender, Food, and Empire: Eating the Other in Hayashi Fumiko's Novels and Naruse Mikio's Adaptation Films（ジェンダー・食・帝国：「他者を食べる」物語と記憶（林芙美子の小説と成瀬巳喜男の翻案映画を中心に）」が開催された。英語による講義であり、ゲスト講師は、テネシー大学の堀口典子准教授。堀口氏の研究分野は、近代日本文学、大衆文化、映画、ジェンダーである。セミナーでは、現在進行中の、女性による食と帝国についての語りと記憶の研究についてお話いただいた。

堀口氏の前著『Women Adrift: The Literature of Japan's Imperial Body』は、帝国日本内を移動する女性の身体と「国体」言説との関わりに関するものであった。それに続く現在のプロジェクトでは、移動する女性たちの身体、そして国体をつくりだした、同時代の「食」に焦点を当てている。戦前の内地の放浪、戦中の外地への旅立ち、そして戦後の日本への帰還という移動の中で、女性たちの食がどう変化し、食がどのように帝国日本と国民のアイデンティティ構築に関係していたかを、林芙美子の『放浪記』（1930 刊）、『北岸部隊』（1939 刊）、『浮雲』（1951 刊）という 3 作品を読むことで紐解いていく。

『放浪記』に描かれているのは、戦前の内地の女性労働者たちの姿である。主人公は、貧しく、職と住処を転々とし、独り身で、家族がそろってちゃぶ台を囲むような、幸せそうな食事風景とは無縁である。つまり、そのちゃぶ台が象徴するような、家族国家のイデオロギーの外にいる存在である。彼女が自分を同化させる対象は、魚屋の店先の魚や八百屋の店先の茄子といった、安価に売り買いされる食料や、西洋列強の支配者に売り買いされる「土人」であり、自らを地理的、社会的、民族的に周縁に押しやられている存在とみている。しかし、主人公は、強者の保護を求める弱い存在ではなく、どんなに空腹を嘆いても、「男にくわしてもらおう事は、泥を囓んでいるよりも辛いこと」と気を張り、日本を象徴する富士山を「古い朽ちたまんじゅう」とさげすんで、「お前に頭をさげない」と、国家への抵抗を表明している。そして、「外国へ・・・何処か遠くへ行きたい。」と、日本を離れる移動への欲求が語られている。

『北岸部隊』は、内閣情報部が編成したペン部隊の一員として、中国戦線の部隊に同行した際の従軍記である。日本を離れた外地で、語り手が自分を同化させていく対象は、日本帝国軍の兵士たちになる。戦場という空間で、食や煙草や水を分け合うことが、林を家族国家の一員にしていった。飢えや粗食に対する不平感も消え、兵士たちの看病をしたいという奉仕の気持ちと、兵士たちの精神の純粋さへの崇敬の念が表される。兵士たちは良き家庭人であり、親切で礼儀正しかったという記述も、『放浪記』に登場する男性たちの、侮辱的で女性たちを食べ物にしている姿とは対照的である。『放浪記』で自分を同化させる対象としていた周縁的存在である中国人に対しては、その「死体は一つの物体にしか見えず」、「敵対」する民族、つまり、他者という位置づけに変わっている。自らは、他者を食べ物にする立場に転身している。こうした人気作家による語り、帝国日本のアイデンティティ構築に貢献したであろうことは、想像に難くない。また、「国を愛する気持ち・・・を、私は生涯忘れないだろう。」という強い愛国心は、日本に居場所を求める動機であり、話は、戦後日本を舞台にした『浮雲』につながっていく。

『浮雲』の主人公ゆき子は、米兵相手の売春で生計を立てている独身女性で、人目を忍んで会う、既婚者の日本人の恋人がいる。貧しく、病んだ生活の中、ゆき子は、戦中のベトナムでの、恋人との幸福な日々を懐かしく思い起こす。成瀬巳喜男制作の映画作品（1955 年）では、現在の苦境とベトナムでの幸福な生活の違いが、映像の明暗で表現されている。戦後の、薄暗い屋内で、汚れたちゃぶ台を、恋人と二人でうつむき囲むシーンに対し、ベトナム時代の懐古では、洋風の大邸宅の、白を基調としてコーディネートされたダイニングルームでの、ベトナム人メイドの給仕による楽しそうな食事シーンと、明るい屋外の森の中ではしゃぐシーンが使われる。しかし、この失われた帝国時代の思い出の中では、同時に、利己的で破壊的な、ベトナムの労働力や食料、自然資源を奪う日本人占領者の姿への疑問や反省も語られている。

3 作品を追って見てきたように、女性たちの社会的課題と政治的立ち位置は、彼女たちの身体が帝国内を移動し、食糧事情と食卓環境が変化するにつれて変わってきた。食はまた、帝国日本の経済的・政治的欲求、そしてその崩壊とも密接に関わっている。林芙美子と彼女の小説の主人公である女性たちによる、食についての語りと記憶は、日本の国民と帝国のアイデンティティの構築と再構築に貢献してき

た。その意味で、林芙美子は、日本で初めて、飢えと食について女性の視点から描いた女性作家というだけでなく、近代日本の帝国史を称賛しかつ批判する、食への欲求と政治的野心を描いた最初の女性作家だと言える。



合わせて、講義では、文学研究の手法についての解説もあった。私たちの世界はテキストの世界であるという前提で、

文学研究やカルチュラルスタディーズでは、テキストとコンテキスト（分りやすく言い換えるならば、書かれた言葉とその文脈）を慎重に読むことが求められる。また、デカルト主義二元論という、モノとココロを対極に置く分析軸が、この文献の分析にどう有効で、どう使えるかの検討が示された。このほか、ジャック・デリダとベル・フックが 1990 年代初頭に説いた、「他者を食べる」ことについての分析が、この文脈でどう援用できるか、といった説明も要所で加えられた。そして、講義内容からは、数百ページにわたるテキストや、数時間に及ぶ長さの映像作品から、これという文章やシーンを発見して、そこを読み込んで、分析材料として提示する作業の緻密さを知ることもできた。

質疑応答では、堀口氏の分析ポイントについてのさらなる解説を求める質問や、異なる視点からの解釈の提案、他の同時代テキストとの比較、原作と舞台化作品、映画化作品の違いについてなどのコメントが出され、様々な点についての議論が展開された。参加者からのコメントのひとつひとつに対し、メモを取りながら丁寧に応答する、堀口氏の姿が印象的であった。また、セミナー全体を通し、堀口氏のこのプロジェクトへの熱意が感じられた。本セミナーが、堀口氏の研究の一助となったことを願うとともに、執筆中の同テーマの新著の完成を待ち望む。

（記録担当：吉原公美 IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー（「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会）

台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開

〔2016年度 第1回「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会〕

【日時】2016年12月12日（月）18:30～20:30

【会場】本館135（カンファレンスルーム）

【司会】申琪榮（IGS 准教授）

【講師】福永玄弥（日本学術振興会特別研究員）

【主催】特定非営利活動法人アジア女性資料センター

【共催】

ジェンダー研究所「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会

【参加人数】30名



【趣旨】

台湾はアジアでもっとも「ジェンダー平等」な社会であるとともに、近年は「LGBTフレンドリー」であることも広く知られるようになった。ところが1990年代以前の台湾は女性や性的少数者に対して差別的な社会であり、人権を保障する制度を欠いていたことはあまり知られていない。本セミナーでは、とりわけ1990年代以降の女性運動の展開や国内・国際政治の動向から、台湾で急速にジェンダー主流化が進んだ背景を紹介するとともに、女性運動が抱えてきた困難にも言及する。台湾スタディツアー（2017年1月16～19日予定）で訪問する運動団体の歴史や取り組みにも触れる。

【開催報告】

台湾はアジアでもっとも「ジェンダー平等」かつ「LGBTフレンドリー」な社会として広く知られている。2017年5月末に、さらに初の同性婚認可に向けて、大きな一歩を踏み出している。福永玄弥氏は「ジェンダー平等」と「LGBTフレンドリー」の関係に着目し、クィアのポジションから1990年代以降台湾の女性運動とジェンダー主流化の展開を報告し、これまでの国内・国際政治の動向にも触れながら女性運動が抱えてきた困難に言及した。

1987年の戒厳令解除は台湾の女性運動の大きな転換点となっている。戒厳令下では、国民党の指導による「官製」女性運動が前面化されており、1970年代に党外運動と結びついた「新女性主義運動」は抑圧的な政治環境の中で挫折していた。戒厳令解除後の女性運動は台北市を中心に、政治領域（立法や法改正）が闘争の主要舞台となった。とりわけ1990年代に、国家機構の積極的な介入による公／私領域のジェンダー平等の実現が主な運動方針とされていた。1990年代後半から行政院婦女權益促進委員会は「ジェンダー主流化（Gender Mainstreaming）」を提唱し、与野党の後押しをうけてフェミニストが起草に関わった一連のジェンダー平等関連立法が次々と可決されていった。このようにジェンダ

一主流化が急速に推進された要因として、福永氏は台湾の民主化＝脱「中国」イデオロギー、及び国際的な可視性を高めようとする台湾の周縁的ポジションを指摘した。LGBT運動も同様の方針で推進してきた結果、「SOGI (Sexual Orientation と Gender Identity)」を包摂した「台湾型ジェンダー主流化」が構築されてきた。

一方、フェミニズム流派をめぐる論争と分裂は台湾の女性運動における注目すべき点である。1994年、性解放運動を提唱するフェミニスト何春蕤氏は、これまでの女性運動の前提とされてきた一枚岩的な「女性」像、及び国家の私領域への介入を批判している。さらに、1997年、陳水扁台北市長の台北市娼妓管理法の廃止宣言がきっかけとなり、台北市で公娼運動が勃発した。その中で、フェミニズム運動の分裂が顕著になり、政府側を支持し、保守的なセクシュアリティ観の持つキリスト系を中心とする「主流派」女性団体と、公娼を支持し、セックスワーカーの労働権を肯定する「性解放派」フェミニストとの対立が深刻になった。この女性運動の分裂により主流から排除された性解放派のフェミニストや運動家たちは、2000年代にさらなるセクシュアリティをめぐる性解放運動を推進してきた。その成果として、セクシュアリティをめぐる諸問題を法律制度や政策などに取り入れることに成功しているが、保守派からのバックラッシュ運動も大規模化しつつある。

今回のシンポジウムで、台湾の女性運動の歴史展開と現状を明確にまとめられた。文化的・社会的近似性のある日本にとって、台湾の経験はよりジェンダーの社会の実現に向けて参考になる部分が多いと考えられる。アジアで最もジェンダー平等が進展し、LGBTフレンドリーな社会としての台湾の今後の動きは注目に値するだろう。

(記録担当：張瑋容 お茶の水女子大学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻)

IGS セミナー（特別招聘教授プロジェクト）

Finding your Place

Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions

（立ち位置を理解する：日本の新宗教フィールドワークからの考察）

【日時】2016年12月14日（水）13:00～14:30

【会場】本館124号室

【講師】

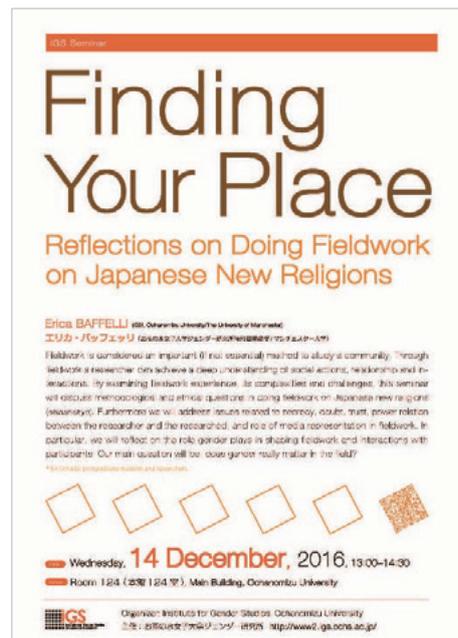
エリカ・バッフェツリ

（マンチェスター大学准教授・英/IGS特別招聘教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】10名



【趣旨】

フィールドワークは社会を研究する（本質的ではないとしても）重要な方法と考えられている。フィールドワークを通して、研究者は社会的行為や社会的関係、相互的な影響について深い理解を得ることができる。このセミナーではフィールドワークの経験やその複雑さを検討することによって、日本の新宗教にフィールドワークを行なう際の方法的倫理的問題を議論することにした。さらにフィールドワークにおける研究者と研究対象者との間での情報の保護、信頼、力関係、またメディアにおける表象の役割に関する問題も取り上げたい。とくにフィールドワークを行なう上で、また対象者との関係性において、ジェンダーが果たす役割についても考察したい。主要な関心は、フィールドにおいてジェンダーは実際に問題となるのか、である。

【開催報告】

2016年12月14日、エリカ・バッフェツリ IGS 特別招聘教授による IGS セミナー「Finding Your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions（立ち位置を理解する：日本の新宗教フィールドワークからの考察）」が開催された。バッフェツリ氏の研究テーマは、日本の新宗教であり、特に、1970年代に活動を開始し、90年代初頭までに大きな団体となった、幸福の科学、阿含宗、オウム真理教に着目している。文化人類学やエスノグラフィーの手法である、フィールドワーク調査によるデータ収集を行っており、本セミナーは、自身の調査経験を例に、フィールドワークを行う研究者の立ち位置や調査が及ぼす影響であるリフレクションの問題についての講義であった。

リフレクションや立ち位置の課題については、70年代から継続的に議論されているが、現在、そして以降も常に研究者が向き合い、考え続けなくてはならない課題といえる。そしてそれは、文化人類学や

エスノグラフィー分野に限らず、社会学や開発学ほか、様々な分野の研究現場においても考察されている。

インタビューや参与観察を伴うフィールドワークでは、研究者の個性、性別、セクシュアリティや人生経験が、調査の様々な局面に影響する可能性がある。例えば、バッフェツリ氏の場合、インタビュー相手や、調査対象団体の窓口となるインフォーマントとの出会いの場で、会話の糸口となったのは、音楽の趣味や、同じ地域に居住したことや、出産・育児などの共通する経験であったりするという。また、特に女性の元オウム真理教信者へのインタビューの際には、同じ女性であることが、話しやすい相手と思われることに役立っているのではと感じているようだ。ある程度の親しさ、近さに身を置けるということが、インタビューをうまく進める必須条件となる。

そうした面があるだけに、研究対象との距離の置き方には、十分な配慮が必要である。例えば、宗教団体との関係では、参与観察を続ける条件として入信を迫られる場面もあるという。また、団体が自分たちを調査対象としている研究者を、公的承認の証として利用しようとすることもある。また、宗教団体または信者グループには、メンバー以外には明かさな秘密の部分が必ず存在する。このような、調査の限界に面した際には、研究者としての目的は何かを自分の中で明確にして、行動方針を決めなくてはいけない。

こうしたことから、研究者は、フィールドにおいて、自分は何者なのか、自分の中のどの部分を仕事や研究に使っているのかの自問自答を経験することになる。研究者間で広く理解されるようになっているのは、研究者は見えない存在なのではないということだ。そして、研究者自身の個性がフィールドワークに影響することは無視できない。個性は、インタビューを円滑に進めるなど有利に働く場合もあれば、女性であるということが身体的危険につながるなど不利に働く場合もある。つまりは、研究に自己が反映される可能性があるといえる。

また、フィールドワークには、人との出会いや関係づくりが必須であることから、研究者がフィールド社会やその人間関係に介入することに伴うリスクが存在する。研究者はいつでもフィールドを去ることができるが、研究対象者はそうではないという面もあり、自分を与える影響についての熟慮が必要である。前出の研究対象との接触が自己に内省を促す点と、この自己が研究対象に与える影響とを合わせ、フィールドワークは、双方向の影響（リフレクション）とその循環を生み出すと言える。

また、エスノグラフィーにおける研究者と研究対象者との力関係は、対等ではない。フィールドワークそのものは、研究者と研究対象者の協働作業により成り立つものだが、それを論文として公表する作業は研究者の手に委ねられることになる。誰の「声」がそこに書かれているのかは、両者間の力関係の表れであり、また、研究者の立ち位置を示すものにもなる。

立ち位置の問題についての議論は、西洋中心主義的なステレオタイプを避けるべきという議論から始まった。議論の流れを受けて、最近では、文化人類学者の文章に、自分は「これこれの」立場からこれを書いているといった断り書きが登場するようになってきているという。これが極端に高じると、研究者が自分自身を、人種や階級、文化背景に基づくカテゴリーに自分を閉じ込めてしまうセルフ・ステレオタイプを生じさせる危険性がある。フィールドワーク現場で起こる



研究者自身へのリフレクションが、アイデンティティの認識を強めさせるが故のことでもある。しかし、既存の型通りの属性に自らを当てはめることは、個々の研究者の個性を埋没させ、かつ、研究対象者と自らの属性の対比によるステレオタイピングをももたらしてしまう可能性がある。

バッフェッリ氏が自身の研究について語る中で、立ち位置の問題に関し、よく耳にするエスノグラファーの体験とは異なり、調査対象者のグループは自身とは異なる価値観を持つ人々で、その話に共感を抱くということはまずないと話している。しかし同時に、調査しているのは宗教団体で、その構成員である彼ら、彼女らは、同じ価値観や世界観、宗教的指導者を持つ人々ではあるが、団体を均一な人々の集団とは見ずに、その中の多様性に目を向け、集団ではなく、個人個人として接するようにしているという。話を聴きながら、時にはその内容を不快に思うこともあるが、調査対象者の中に自分と近い部分を感じたりすることもあるという。例えば、比較的若い元オウム真理教信者は、自分と同世代で、同じ時代に学校に通い、同じポピュラーカルチャーに親しみ、同じ本を読んだり、同じような疑問を抱いたりしてきている。この点について、バッフェッリ氏は、ジュディス・バトラー著『自分自身を説明すること』（月曜社、2008年）から、たとえ非難の対象とする相手であっても、その相手との近しさや関係の形成抜きでは、倫理的な判断をすることはできない、と述べられている一節を紹介した。

講義の冒頭で、バッフェッリ氏は、フィールドワークとは他者との出会いであると説明しているが、それは、単なる点での遭遇ではない。互いの背景にある歴史や経験、体験や思い出を語るという行為、リフレクションによる相互作用や内省、そしてフィールドワーク後に行われるデータの分析・考察などを通して、「関係」が形成される。このため、研究者の立ち位置も、初めから確固たる点として決定できるものではなく、様々な相互作用を経ながら設定される部分があるだろう。研究は、他者についての何らかの「判断」をすることでもあるが、そのための考察をより深く豊かな人間性への理解に導くのは、この「関係」についての理解なのだと言える。

この他にも、インターネットを含むメディアを活用したエスノグラフィーや、新たに取り組んでいる研究プロジェクト「女性、宗教、暴力」についてなど、バッフェッリ氏の研究内容の紹介もあった。研究者としてのスタートから最近の研究活動まで網羅し、かつリフレクションや立ち位置といった、フィールドワークの主要課題に焦点を当てたバッフェッリ氏の語りは、研究に対する熱意のみならず、研究者としてのプロフェッショナリズムをも感じさせるものであった。

（記録担当：吉原公美 IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー 日本における女性と経済学

【日時】2017年2月22日（水）13:40～18:00

【会場】本館 213 号室

【司会】板井広明（IGS 特任講師）

【報告】

上村協子（東京家政学院大学教授）

栗田啓子（東京女子大学教授）

松野尾裕（愛媛大学教授）

生垣琴絵（沖縄国際大学講師）

【ディスカッション】

池尾愛子（早稲田大学教授）*紙面討論者

足立真理子（IGS 教授）

金野美奈子（東京女子大学教授）

【論点提供者】

伍賀借子（元大阪総評オルグ、元関西女の労働問題研究会代表）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】28 名

【趣旨】

昨今、女性と経済学をテーマにした研究が進展する中、日本における女性と経済学の問題を検討するセミナーを合評会形式で開催する。対象テキストは栗田啓子・松野尾裕・生垣琴絵編著『日本における女性と経済学 — 1910 年代の黎明期から現代へ』（北海道大学出版会、2016 年）。経済学教育の歴史、女性経済学者の生活に定位した研究、労働運動フェミニズムなどの論点について、山川菊栄、森本厚吉、松平友子、伊藤秋子、御船美智子、竹中恵美子らの議論を検討する。当日は執筆者の方々にお越しいただいて議論を行なう。

【開催報告】

セミナーでは、まず合評対象の書籍の執筆者 4 人が報告を行なった。上村協子（東京家政学院大学、第 5 章）、栗田啓子（東京女子大学、第 2 章）、松野尾裕（愛媛大学、第 1、4、6 章）、生垣琴絵（沖縄国際大学、第 3 章）の各氏が、自身が執筆した章の内容と展望を報告し、それに対して、池尾愛子（早稲田大学、当日は欠席でコメント文書を板井が代読）、足立真理子（お茶の水女子大学）、金野美奈子（東京女子大学）の各氏からコメントをしてもらった。池尾氏は日本経済思想史研究の立場から、明治以前の家道訓や家計概念との連続性を指摘し、足立氏はフェミニスト経済学の立場から、『日本における女性と経済学』で取り上げられた女性経済学者の経済循環モデルの比較検討や経済学批判という視角からコメントし、金野氏は社会学の立場から、家庭に経済学を持ち込むことの問題や、あるいは本書全体が



前提にしているジェンダー観を問い直すようなコメントが投げかけられた。また論点提供者として第 8 章を執筆している伍賀偕子（元大阪総評オルグ、元関西女の労働問題研究会代表）氏からは、労働運動フェミニズムと竹中理論に関する補足的な話題提供もあった。

その後、リプライや質疑応答となったが、女性という視点が必然的に従来の経済学理論とは異なった理論体系を必要としたこと、その意味で女性が不可視化されていることの告発など、さまざまな論点が取り上げられ、また生前の諸先生のお姿を偲ぶ逸話も紹介され、活発で、心温まる議論が行なわれた。

（記録担当：板井広明 IGS 特任講師）

IGS 研究会（第 2 回「冷戦とジェンダー」研究会）

『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス アメリカ合衆国の動向に注目して

【日時】2017 年 1 月 30 日（月）17:00～19:00

【司会】山本めゆ（日本学術振興会特別研究員 PD）

【報告】

土野瑞穂（本学みがかずば研究員）

「アジア女性基金解散後の日本政府による『慰安婦』問題への
対応：アジア女性基金フォローアップ事業を中心に」

武田興欣（青山学院大学教授）

「『慰安婦』決議をどう読むか：アメリカ連邦議会研究者の立場
から」

申琪榮（IGS 准教授）

「新刊紹介 山口智美他『海を渡る「慰安婦」問題：右派の歴史
戦を問う』」

臺丸谷美幸（IGS 特任リサーチフェロー）

「慰安婦少女像建設運動を巡るローカルコミュニティの反応：
アジア系アメリカ人を中心に」

【担当】臺丸谷美幸

【開催報告】

本会は「『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス」という題目が示すように、昨今、世界各地で韓国系市民団体などが中心となって建設されている慰安婦少女像を巡る動向について把握するとともに、特に米国国内での動向を中心として、国際政治学、アメリカ政治学、アメリカ史、ジェンダー史、社会学など学際的、多角的な観点から検討することを目標とした。結果として、今日、グローバル社会が日本政府へ求めている歴史的応答責任を確認し、本課題に取り組むにあたり、1945 年の敗戦に伴う帝国日本の解体から冷戦期への時間的連続性と東アジア情勢の変化、その重要性を議論した。



IGS 研究会 JAWS 研究交流会

【日時】2017年3月16日（木）10:00～15:00

【プログラム】

第一部：生と医療のジェンダー政治学

《司会》田中洋美（明治大学准教授）

《報告》

武田宏子（名古屋大学教授）「政治課題としての日常生活」

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

「Government Subsidized Project for The Cost of Infertility Treatments As a Population Policy in Japan」

マリアン・パリー（デラウェア大名誉教授・米）*悪天候により来日キャンセル=紙面討論者

「Some Possible Scenarios for the Future of Women's Health Care in a Trump Administration」

第二部：ジェンダーと政治的代表性

《司会》申琪榮（IGS 准教授）

《報告》

大木直子（グローバルリーダーシップ研究所特任講師）

「How 'Politics School' Promote Women's Participation in Politics in Japan」

ユン・ジソ（日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学准教授・米）

「Who Speaks for Women and Why: Evidence of Substantive Representation in the Tokyo Metropolitan Assembly」

《コメンテーター》岩本美砂子（三重大学教授）

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【言語】英語

【主催】ジェンダー研究所

【趣旨】

一般公開の国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙」（3 月 18 日）に先立ち、「日米女性政治学者シンポジウム（JAWS）」のメンバーと、関連研究者や学内関係者が参加する、IGS 研究会「JAWS 研究交流会」を企画・開催した。各メンバーがこれまで行ってきた研究成果を共有したうえで、今後の共同研究の発展について議論を交わした。報告と討論は全て英語で行われた。

研究会は、参加者の研究関心や近年の政策課題を勘案したテーマを設定し、午前の第一部「生と医療のジェンダー政治学」と、午後の第二部「ジェンダーと政治的代表性」とに分けて開催した。第一部では、武田宏子氏（名古屋大学教授）と、仙波由加里 IGS 特任リサーチフェローが発表した（マリアン・パリー氏（デラウェア大学名誉教授）の参加も予定されていたが、悪天候により来日キャンセル）。第二部は、大木直子（本学グローバルリーダーシップ研究所特任講師）、ユン・ジソ氏（日本学術振興会外国人特別研究員）が、それぞれ研究報告を行った。

第二部の後に岩本美砂子氏（三重大学教授）のコメントを受けて参加者全員が討論を行った。今回の研究会には従来のメンバーら以外に、日本側から新しい若手メンバーが加わり、一層活気に満ちた議論になった。

【開催報告】

田中洋美氏（明治大学准教授）の司会で開始された第一部では、発表予定であったマリアン・パリー氏より事前に送付されていた報告を、参加者の間で共有した。報告タイトルは“Some Possible Scenarios Regarding Health Care Services for Women in the Trump Administration”とし、オバマ時代に成立した国民健康保険制度がトランプ政権の誕生によってどのように変化しうるかを論じた。さらに、今後の見通しについてもいくつかのシナリオを提示した。結論として、アメリカは連邦制であるため、連邦政府がある政策を大きく変えることがあっても、州政府が独自の政策を施すことが可能であるため、今後健康保険政策が変わっても州政府の政策や保険の対象者によって影響が異なると予測した。

続いて、武田宏子氏は“‘Protecting Everyday Life’: ‘Everyday Life’ as Political Agenda”と題した発表で、1980年代から1990年代にかけて、「生活」が日本政治においてかつてないほど注目されるようになった背景と、その政治的な過程について分析した。日本政府は、この時期から個人の日常生活のあり方や管理に大きな関心を持つようになり、政府が国民の「生活」を守る主体的役割を受け持つようになった。その過程で政府は、国民のあるべき「生活」について、政府の主張や考え方を様々な言説や政策を通じて社会に浸透させようとした。しかし、そのような主流的な考え方に対抗する勢力もまた登場し、支配する（governing）側と挑戦する側の間で「生活」をめぐる争いは続いていると分析した。

最後に、仙波由加里氏は、“Government Subsidized Project for the Cost of Infertility Treatments as a Population Policy in Japan”と題して、特定不妊治療費助成事業の取り組みと、日本の不妊治療に対する状況の変化について報告した。日本は1980年代後半から、少子化を深刻な社会問題と認識するようになり、1990年代から始まった少子化対策の中で不妊治療支援も含まれるようになった。2001年には不妊相談事業が全国で展開され、2004年には、一定の条件を満たす不妊夫婦に限って、高度生殖補助医療（ART）の医療費の助成が受けられるようになった。開始以来、助成対象の条件は緩和され、利用者数も7.6倍に増え、国の負担額も2004年の推計8億8000円から2012年に101億1607万円まで増大した。しかし、それでも出生数の減少を食い止めることはできていないばかりか、特に高齢になった女性たちには不妊治療を受けることを促す要因にもなり、国による女性の体へのコントロールを増やす結果にもつながった。

第二部は、申琪榮 IGS 准教授の司会で、まず大木直子氏が“‘How Do “Politics Schools” Promote Women's Participation in Politics in Japan?’”と題して報告を行った。1990年代以降日本で盛んになっている地方政治家や政党の地方組織による政治塾に研究関心を寄せ、政治塾が従来の既成政党による候補者選出とどのように違うのかについて考察した。日本において政治塾とは「政治家の養成を目的とする私塾」とされており、「松下政経塾」や「小沢一郎政治塾」、橋下徹前大阪市長の「維新政治塾」、小池百合子都知事の「希望の塾」などがその典型例である。政治塾の目的は、主に直近の選挙に向けた候補者選出や新しい人材発掘であるが、女性や若者のような新しい人材を意識的に集める塾も開かれている。報告では、まず1990年以降に設立された政党や政治家、市民団体などが主催する政治塾を取り上げ、各政治塾の性格と特徴を浮き彫りにした。そして女性議員のリクルートメントモデルを用いて、それぞれ異なる政治塾がどのように女性の政治参加を促しうるのかについて検討した。

最後の報告は、ユン・ジソ氏による“Who Speaks for Women and Why? : Evidence of Substantive Representation in the Tokyo Metropolitan Assembly”であった。2000年代以降の東京都議会の本会議と委員会の発言資料を分析し、どのような議員が「女性」関連の政策に関心を持って発言しているのかを考察した。その結果、マイナーな政党や少数会派の議員が男女ともに「女性」関連の発言が多いこと、女性議員の方が全体的に女性やマイノリティーについて関心が高く、議会で発言も多いことが明らかになった。

報告者の発表が終わった後に、討論者と参加者全員が互いに質問やコメントを交わし、多岐にわたる活発な討議が行われた。

▶ 2016 年度共催セミナー・研究会詳細

IGS セミナー

Perinatal Mental Illness, Attachment, and Affect Communication

(周産期精神疾患、母子間愛着、および情緒的コミュニケーション)

【日時】2016年10月31日(月)10:40~12:10

【会場】本館124室

【司会・コーディネーター】

石田安実(グローバル人材育成推進センター特任准教授)

【講師】

リンダ・M・ペレス

(ミルズ大学 Abbey Valley 教授・米/臨床心理士)

【主催】グローバル人材育成推進センター、ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】30名



【趣旨】

周産期精神疾患は、母親に限らず、そのパートナーや子どもたちにも影響を与えるものであり、世界中で公衆衛生の関心事となっている。すべての国が、妊娠中や出産後のうつ病や不安障害という課題に直面しているが、低・中所得国における状況はより深刻である。この講義では、見過ごされがちではありながら子に影響をおよぼす、周産期の気分障害や不安障害について明らかにする。母子間で引き継がれる妊娠期ストレスの傾向により、新生児は体質的に脆弱となるため、うつ病や不安障害を抱える母親が子どもの健康状態を管理し母子の絆を築くには、大きな困難が伴う。

乳児はさまざまなリスクの影響を受けやすく、幼児期およびその後の成人期までの健全な発達のためには防御的な要因が必要となる。母子間の愛着は、子どもの成長とストレス対処において中心的な役割を果たす。安定した母子間愛着は、子どもにとって、高レベルのストレスを和らげるものとなる上、感情制御の力を身につけるのに不可欠である。母子に対する関係性への介入法として推奨されるものは、母親の精神疾患の治療をおこない、安定した乳児期の母子間愛着と情緒的発達を促進することなのだ。

【開催報告】

2016年10月31日、米・ミルズ大学のリンダ・ペレス教授によるIGSセミナー「Perinatal Mental Illness, Attachment, and Affect Communication (周産期精神疾患、母子間愛着、および情緒的コミュニケ

ーション)」が開催された。ペレス教授は、グローバル人材育成推進センター主催事業、GREAT-Ocha (Global Research Exchange at Ochanomizu University)へ講師として参加するため来日した。この機会に、教授自身の研究についての講義も依頼し、グローバル人材育成推進センターとジェンダー研究所で、セミナーを共催した。

ペレス教授の専門領域は発達心理学、幼児教育である。大学での仕事と並行して、カリフォルニア大学メディカルセンターにおいて、臨床心理士としての診療活動もしており、特に、貧困層の、精神疾患や薬物中毒に苦しむ母親とその子どもたちの治療に力を入れている。

講義は、母親個人の問題であると過小評価されがちな、周産期精神疾患（いわゆるマタニティブルーや産後うつ）が、生まれてくる子どもにも大きな影響を与える重大な問題であるということと、母子愛着の形成支援を中心とした最新の治療方法が、中心テーマであった。

ここで言う愛着とは、子どもと、母親に代表される子どもの世話をする人との親密関係のことである。子どもの脳は、妊娠6ヶ月から生後6ヶ月に特に発達する。生後の発達においては、他者、つまり世話をする人とのコミュニケーションが有効である。子どもは、他者を見つめたり、声の抑揚を感じ取ったり、見つめ返されることで、自分の要求に応える人がいることを確認する。こうした、言語外コミュニケーションから世界を知るのである。また、微笑んだり声を出したりすることによって、人がいるかどうかで、身の安全を確認して、情緒面の安定を獲得する。しかし、こうした情緒的コミュニケーションをとることが難しいと、子どもの発達に影響が出ることがある。母親が周産期に精神疾患を抱えていたり、早産で中枢神経系の発達が不十分なまま生まれてくる場合などである。

ホルモンの急激な変動からおこるマタニティブルーは、ごく当たり前の症状である。しかし、これがあまりに長引く場合は、うつが疑われる。うつのほかにも、周産期精神疾患には、気分障害、不安障害、強迫神経症、心的外傷後ストレス障害 (PTSD)、パニック障害、産後精神病がある。また、妊娠以前から精神疾患の病歴がある場合は、周産期に症状が悪化する可能性がある。うつなどの状態の母親は、ストレスホルモンであるコルチゾールのレベルが高く、意欲をもたらすドーパミンと、精神の安定と幸福感を生み出すセロトニンのレベルが低くなる。そして、子どものホルモン状態もこれと同じになるため、子どもは生まれたときからストレス状態になる。また、高いコルチゾール値は、血管の収縮や胎児の成長抑制を引き起こし、低出生体重児や早産という結果をもたらす。

健康な母子であっても、新生児の世話をするのは大変な仕事であり、こうした理由で母子ともに問題を抱えている場合はなおさらである。母親は子どもの様子に注意を払ったり、動作に反応するなど、子どもの要求に応えることが上手く出来ない。子どもも、笑ったり声を上げたりという、母親の注意を引く戦略を持たないため、情緒的コミュニケーションが成り立たない。愛着は、赤ん坊にとって、ストレスやトラウマに対処する手段であり、これによって感情制御を発達させる。しかし、愛着が得られずに過ごす、激しい感情を制御出来ないままになる。愛着は相互交流であり、反応することされることで、母子互いに感情の制御が上手く出来るようになるのである。

こうした理解に基づき、ペレス教授たちが実施している最新の介入法では、母親に対する感情セラピーを取り入れている。母親との人間関係を持つことで、母親の人間関係スキルを磨き、それを



子どもとの情緒的コミュニケーションの中で、自然に発揮できるように促すのである。必要に応じて個別の心理療法や投薬も施していく。早期に発見できれば、早期の介入や予防措置が可能である。家庭内のストレスの軽減も重要であり、そのための、社会的サポートも必要である。周産期の気分障害や不安障害は、母子を傷つけ、ストレスを与える。家族全体のストレスとなることである。言うまでもなく、これは、社会全体の問題でもあり、世界的な課題にもなっていることから、さらなる研究や予防措置の開発が必要である。

その他、講義の中で指摘されたのは、文化的な差異についての配慮である。アメリカは多文化社会であることから、母親の子どもへの接し方にも、文化的な多様性が見られる。治療にあたって、これを無視して、皆にそっくり同じ行動を要求することは出来ない。日本とアメリカの比較においても同じことが言える。研究結果からは、一般論が導き出せる一方で、それぞれの傾向の分析で相違を理解することも必要になる。また、治療や介入に際しては、早急な判断は禁物であることが強調された。例えば、子どもに異常が認められたときは、まずそれが、環境によるものなのか、子ども自身に病気などの問題があるのか、単に性格上のものと理解して良いものなのか、ある程度の時間をかけて見極めた上で対処法を判断する必要がある。

講義そのものは母子関係を中心とした話であったが、質疑応答では、父親の役割や、家族のありようも話題となった。人は、生まれ落ちたその時から、人間関係のスキルを磨き、良好な人間関係を構築し、保つことで、生きる力を強め、維持していく。家族は、子どもにとって、最初に人間関係を持つ相手であり、人間関係は相互作用をもたらすものであることから、子どもを取り巻く人たちの関係性を考慮したケアが、周産期精神疾患への対処においても望まれる。

セミナーは、聴衆にとって、コミュニケーションに重きをおいて患者のケアにあたっている、ペレス教授の人間関係スキルの高さを体感する機会ともなった。終盤で、IT技術の発達によるデジタル・コミュニケーションの興隆への言及もあったが、ペレス教授は、大学での教育にも、対面での人とのつながり形成が大切だと思われる部分は多くあり、すべてがデジタルに置き換え可能なものではないと指摘した。講師と聴衆の対面で行われるセミナーも、参加する人同士のつながりが構成要素のひとつである。講義からは多くの知識を得ることが出来るが、それと同時に、そこで行われている言語外のコミュニケーションからも、私たちは、多くのことを学んでいるのである。

(記録担当：吉原公美 IGS 特任リサーチフェロー)

グローバルリーダーシップ研究所・ジェンダー研究所共催研究交流会

The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis

A Discussion with Gender Scholars Sylvia Walby and Heidi Gottfried

(シルヴィア・ウォルビー教授とハイディ・ゴットフリート教授との研究交流会
— 「知識経済」と『Crisis』後のフェミニズム)

【日時】2016年11月14日(月) 15:00~17:00

【会場】本館135室

【司会】

カレン・シャイア(デュースブルグ=エッセン大学教授・独/
グローバルリーダーシップ研究所特別招聘教授)

大木直子(グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

【登壇者】

シルヴィア・ウォルビー教授(ランカスター大学・英)

ハイディ・ゴットフリート教授(ウェイン州立大学・米)

カリン・ゴットシャル教授(ブレーメン大学・独)

【共催】

グローバルリーダーシップ研究所

ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】24名

【趣旨】

『知識経済をジェンダー化する：労働組織・規制・福祉国家』(原著名 *Gendering The Knowledge Economy: Comparative Perspectives*) の日本語訳本の出版に合わせて来日した、シルヴィア・ウォルビー教授(ランカスター大学)とハイディ・ゴットフリート教授(ウェイン州立大学)、カリン・ゴットシャル教授(ブレーメン大学)の3名の共編著者たちを交えた研究交流会を実施した。この研究交流会は、グローバル女性リーダー育成研究機構グローバルリーダーシップ研究所と、ジェンダー研究所との協働イベントである。

【開催報告】

カレン・シャイア氏(グローバルリーダーシップ研究所特別招聘教授/デュースブルク・エッセン大学教授)と大木直子氏(同研究所特任講師)が司会を務め、学内外からジェンダー、労働、福祉国家などのテーマの研究に従事する大学院生、ポスドク研究者、教員など24名が参加した。はじめに、参加者全員による自己紹介の後、ウォルビー教授、ゴットフリート教授、ゴットシャル教授から、そ

グローバル(公定)リーダーシップ研究所共催
グローバルリーダーシップ研究所 ジェンダー研究所共催

The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis

A Discussion with Gender Scholars Sylvia Walby and Heidi Gottfried

2016年11月14日(月) 15:00-17:00
会場:本館135室

司会:カレン・シャイア(グローバルリーダーシップ研究所特別招聘教授、デュースブルグ=エッセン大学教授)
大木直子(グローバルリーダーシップ研究所 特任講師)

【知識経済をジェンダー化する—労働組織・規制・福祉国家】(原著名 *Gendering The Knowledge Economy: Comparative Perspectives*) の日本語訳本の出版に合わせて、シルヴィア・ウォルビー教授(ランカスター大学)とハイディ・ゴットフリート教授(ウェイン州立大学)が来日し、お茶の水女子大学にて研究交流会を行います。ウォルビー教授、ゴットフリート教授の近年の研究(Walby 2015 *Crisis Polity Press*; Gottfried 2013 *Gender, Work and Economy Polity Press*)や、ジェンダー、労働、福祉国家などのテーマに関心のある方はぜひご参加ください。

参加方法:氏名、所属・学年(学生の方)、メールアドレス、ウォルビー教授、ゴットフリート教授への質問内容(質問のある方)をお書きの上、以下のアドレスにお送りください。タイトルに「11/14イベント申込」と明記して下さい。

締切:2016年11月12日(土)23:59
定員:30名
グローバルリーダーシップ研究所
大木直子 info-leader@cc.ocha.ac.jp

*学内の教職員、学生のみ参加可
*英語に自信がない方も、ぜひご参加ください!

Prof. S. Walby Prof. H. Gottfried

【問合せ】グローバルリーダーシップ研究所 info-leader@cc.ocha.ac.jp / 人間文化研究科学部研究科 505室

それぞれ自身の近年の研究に関するショート・スピーチがあり、その後、参加者全員によるディスカッションが行なわれた。

ディスカッションのテーマは主に、『*Crisis*』（ウォルビー教授の2015年の著作）や『知識経済をジェンダー化する：労働組織・規制・福祉国家』に関するものであった。例えば、いわゆる developed countries



だけではなく、よりグローバルな文脈における crisis の意味や、New Economy と Knowledge Economy の違い、『*Crisis*』後のフェミニズムなど多岐にわたり、活発な意見交換が行なわれた。また、欧州に見られる極右勢力の台頭や、米国大統領選挙などの時事問題についても、様々な観点からの分析、考察が行なわれ、大盛況のうちに終了した。

(記録担当：大木直子 グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

IGS ランチョンセミナー

ジェンダー研究所内では、板井広明特任講師企画によるランチョンセミナーが実施されている。これは、昼食時に、ジェンダー関連テーマの映像作品を鑑賞し、その後討論をするという形態のものである。研究系スタッフにとっては、日ごろは別々の研究プロジェクトを進めている者が集い、テレビや映画で取り上げられているジェンダー課題についての意見交換をする機会となっている。また、事務系スタッフにとっても、現代のジェンダー課題やジェンダー研究についての知識を深める場となっている。グローバルリーダーシップ研究所スタッフや教員へも参加を呼び掛けており、グローバル女性リーダー育成研究機構内の人的交流推進にも寄与している。

▶ 2016 年度協力機関企画シンポジウム

シンポジウム

イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて

【日時】2016年6月11日(土) 13:30~17:30

【会場】東京大学東洋文化研究所 3F 大会議室

【趣旨】

現代世界を理解するためにはイスラームとジェンダーをめぐる問題を考えることが不可欠です。こうした問題をめぐる学問領域の構築は重要な課題の一つであり、この度そのための共同研究プロジェクトが始まりました。そのキックオフとなる本シンポジウムでは、本研究の意義や課題、方法論や方向性について話し合います。多くの方のご参加をお待ちしています。

【プログラム】

開会の言葉・趣旨説明：長沢栄治（東京大学 エジプト近現代史）

総合司会：後藤絵美（東京大学 現代イスラーム思想・文化）

第一部 私の研究とジェンダー

鳥山純子（日本学術振興会特別研究員（PD）／桜美林大学 人類学・ジェンダー）

阿部尚史（東京大学 イラン史）

宇野陽子（東京大学 国際関係論・トルコ近現代史）

第二部 イスラーム・ジェンダー学の可能性

大河原知樹（東北大学 中東地域研究）

松尾瑞穂（国立民族学博物館 文化人類学）

齊藤みどり（帝京大学 英語圏文学・ジェンダー）

第三部 共同研究への期待

白杵 陽（日本女子大学 現代中東政治・国際関係論）

黒木英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 シリア・レバノン近代史）

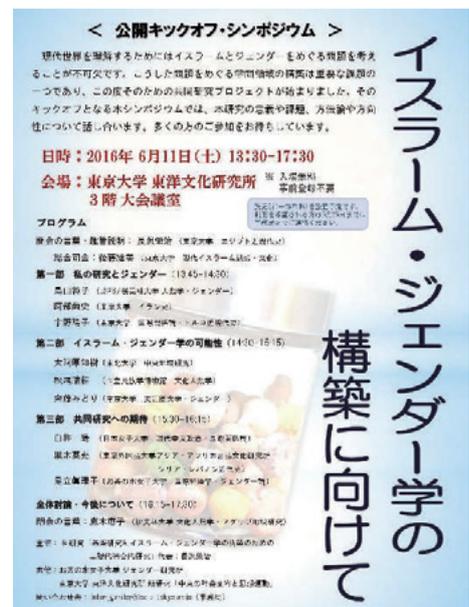
足立真理子（お茶の水女子大学 IGS 教授 国際経済学・ジェンダー論）

全体討論・今後について

閉会の言葉：鷹木恵子（桜美林大学 文化人類学・マグリブ地域研究）

【主催】科学研究費「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」（代表：長沢栄治）

【共催】ジェンダー研究所、東京大学 東洋文化研究所 班研究「中東の社会変容と思想運動」



ジェンダー史学会シンポジウム ポスト「戦後70年」とジェンダー史 地域のジェンダー実践を思考の手がかりに

【日時】2016年6月26日（日）13:00～17:00

【会場】共通講義棟2号館101号室

【プログラム】

総合司会：高橋裕子（津田塾大学）

趣旨説明：長志珠絵（神戸大学）

第1部

司会/モデレーター 平井和子（一橋大学非常勤講師）

報告1：高雄きくえ（ひろしま女性学研究所）

「被爆70年ジェンダー・フォーラム in 広島を終えて：『ヒロシマという視座の可能性』は見たのか？」

報告2：ヴェール ウルリケ（広島市立大学）

「国家と地域を横断する地域の女性運動：広島の『デルタ・女の会』」

報告3：高橋博子（明治学院大学国際平和研究所研究員）

「ヒロシマはどこに向かうのか：抑止論にあらがう」

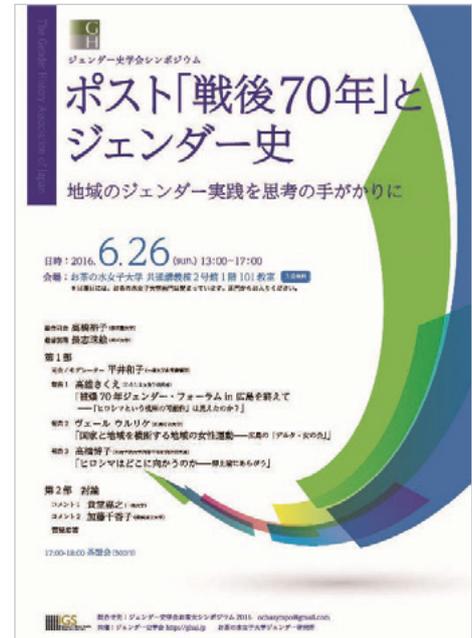
第2部 討論・質疑応答

コメント1：貴堂嘉之（一橋大学）

コメント2：加藤千香子（横浜国立大学）

【共催】ジェンダー史学会、ジェンダー研究所

【運営コーディネーター】小玉亮子（お茶の水女子大学教授／IGS 研究員）



4.

特別招聘教授 プロジェクト

2016 年度特別招聘教授
プロジェクト概要

スーザン・D・ハロウェイ特別招聘教授

エリカ・バッフェツリ特別招聘教授

ラウラ・ネンツィ特別招聘教授

▶ 2016 年度 特別招聘教授プロジェクト概要

国際的な研究者とのダイレクトな交流

「特別招聘教授プロジェクト」はジェンダー研究所の重要な事業のひとつであり、その主な目的は、グローバルな視野から本学のジェンダーに関する教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることである。具体的には、海外の著名な研究者を招聘し、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウムの企画・登壇を含む国際的な研究ネットワークの構築、大学院生を対象としたセミナー等での講義による国際レベルのジェンダー研究教育プログラムの実施に貢献していただいた。2016 年度は、スーザン・D・ハロウェイ氏（カリフォルニア大学バークレー校教授）、エリカ・バッフェツリ氏（マンチェスター大学准教授）、ラウラ・ネンツィ氏（テネシー大学教授）の3名を招聘した。

ハロウェイ氏は発達心理学と教育学が専門であり、ジェンダー、家族、幼児教育、心理などの多角的視点から日本およびイタリアで研究活動を行い、研究成果を単著や論文により発信している世界的に著名な研究者である。特に、*Contested Childhood: Diversity and Change in Japanese Preschools*（2004年）は『ヨウチエン：日本の幼児教育、その多様性と変化』と和訳され、日本の幼児教育と家族研究者にとっては必読の書籍である。

本学採用期間中（2016年5月22日～6月29日）には、自身の研究プロジェクトである「The Changing Contexts of Family Life and Early Childhood Education and Care (ECEC) in Japan」を進めるために複数の研究会を持ち、共同研究者との論文執筆を行った。加えて、本学附属幼稚園、いずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学子ども園を訪問し、関係者との意見交換を行った。さらに、ハロウェイ氏には2016年6月9日開催の国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較 (Family, Work, and Well-Being in International Perspective)」を企画していただいた。少子化や子育てなど、現代の日本社会が直面する課題が取り上げられ、「幸福」や「ウェルビーイング」などの概念にも踏み込んだ先進的なシンポジウムであった。また、2016年6月16日に本学の教員と大学院生を対象としたIGSセミナーで「Family and Schooling in Contemporary Japan: Foreign Perspectives and Research」（現代日本における家庭と学校教育:外国人研究者の視点と研究）と題する講義をしていただいた。

バッフェツリ氏の専門は東アジア研究で、特に近刊の *Media and New Religions in Japan*（Routledge）に代表される日本の新宗教とメディア・インターネットの関係に関する研究では、世界的に関心を集める成果をあげている。本学採用期間中の2016年9月21日～12月20日には、日本の新宗教に関する新たなプロジェクトを立ち上げ、二つの宗教団体へのフィールドワークを実施した。バッフェツリ氏には2016年10月19日（水）開催の、国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考 (Women, Religion and Violence in International Perspective)」の企画を担当していただいた。また、2016年12月14日（水）には「Finding Your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions（立ち位置を理解する:日本の新宗教フィールドワークからの考察）」と題する講義をIGSセ

ナーとして大学院生・教員対象に行っていた。また、これらのイベント実施に加えて、フィールドワーク調査、研究会出席、マンチェスター大学から日本に留学している学生のサポートも含めた様々な活動を、精力的にこなしていた。

ネンツイ氏の専門領域は近代日本史で、これまで江戸時代末期の女性たちに焦点を当て、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近刊の *The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko* (ハワイ大学出版) は、歴史学のみならず、ジェンダー研究者からも、日本の女性史についての理解を深めることにつながったとの高い評価を得ている。

本学における採用期間中(2016年10月3日～2017年7月31日)には、日本の近世、徳川社会に焦点を当てた新規のプロジェクト「After Dark: The Nighttime in Nineteenth Century Japan (日暮れ後：19世紀日本の夜)」に取り組んだ。ネンツイ氏には、2017年1月17日(火)開催の、国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎 (Gender, Religion, and Social Reform in the Meiji Period: The Case of Sumiya Koume and Nakagawa Yokotarō)」を企画していただいた。また、ネンツイ氏が企画・運営した英語によるIGSセミナーは2回開催された。さらに、2016(平成28)年度後期の、博士前期課程比較社会文化学専攻歴史文化学コース「歴史資料論特論」を担当していただき「Gender Issues in Tokugawa Period (徳川時代のジェンダー課題)」をテーマとした英語による講義を行っていただいた。

三氏とも、シンポジウムやセミナーでは、進行中のプロジェクトからの成果を発表してくれるなど、最先端の知見を本学の教育現場で披露してくれた。また、三氏に企画していただいた国際シンポジウムおよびIGSセミナーでは、参加者との間で活発な意見が交換された。世界的に著名な研究者との直接的な意見交換により学びを深化させる機会を本学の研究者に提供できたことは、特に将来を担う若手研究者にとって、今後の研究指針を手にする貴重な機会となったであろうと評する。本特別招聘教授プロジェクトを通じて、当初の期待以上の成果がもたらされ、本学におけるジェンダー研究に、グローバルかつ学際的な最先端の知見を提供し、同時に、教育研究活動の活性化をもたらすことができた。

スーザン・D・ハロウェイ特別招聘教授プロジェクト実施概要

【招聘事業目的と期待される成果】

グローバル女性リーダー育成研究機構に設置されたジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施と、国際的な研究ネットワークの構築を推進する。特別招聘教授はこの両方に寄与する者であり、本学におけるジェンダー研究に、グローバルで学際的な最先端の知見を提供し、教育研究活動の活性化をもたらすことが期待される。

世界的に著名なスーザン・D・ハロウェイ教授の専門領域は発達心理学と幼児教育で、これまで日本の母親に注目して、文化的な文脈のもとでの分析を行い、子育てと家庭生活に関する多くの研究実績を挙げている。また、ジェンダー視点からのシングルマザーに関する研究成果も広く知られている。ハロウェイ教授の単著のうち2冊は和訳され、日本でも多くの読者を得ている。本学では、ジェンダー視点からの家族・子ども研究が盛んであることから、ハロウェイ教授の招聘は、本学の研究者・院生にとって大変刺激的であり、多くのことを学ぶ機会を提供することが可能である。

【スーザン・D・ハロウェイ特別招聘教授プロフィール】



カリフォルニア大学バークレー校大学院教育学科教授。研究分野は家族と学校教育の文化的側面からの分析。1983年にスタンフォード大学で博士号を取得の後、メリーランド大学カレッジパーク校、ハーバード大学大学院、カリフォルニア大学バークレー校等での教育研究職を歴任している、経験豊富な研究者である。研究成果として単著2冊、共著1冊を刊行しているほか、査読付き学術誌等での論文発表は80本を超えるなど、顕著な業績を挙げている。フルブライト奨学金を二度にわたって獲得し、日本およびイタリアで国際的な研究活動を行っている。日本の研究者との共同研究による日米比較研究も数多く手掛け、国際的な研究連携を積極的に進めている。研究視点は、ジェンダー、家族、幼児教育、心理、障がいなど多角的である。1980年代から日本におけるフィールドワークを多数実施し、1990年代半ばに行った関西地方の幼稚園での調査を中心とする研究の成果書籍 *Contested Childhood: Diversity and Change in Japanese Preschools* (邦題『ヨウチエン：日本の幼児教育、その多様性と変化』2004年、北大路書房) は、日本の幼児教育関係者に広く読まれている。2000年からは日本の母親たちを対象にした調査を実施し、その成果は *Women and Family in Contemporary Japan* (邦題『少子化時代の「良妻賢母」：変容する現代日本の女性と家族』2014年、新曜社) として刊行されている。近年は、多文化社会での教育のありようや、同性カップルの子育てなど、今日的なテーマに積極的に取り組んでいる。

【採用期間】 2016年5月22日～6月29日

【職務内容およびその支援】

ハロウェイ教授に依頼した業務は、1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進、2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加、3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告、および 4) 上記活動についての成果報告の 4 項目であるが、これに加えて、ジェンダー研究所を拠点とする国際的研究ネットワークの構築にも参与しているほか、本学附属幼稚園およびいずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園を訪問し、関係者との意見交換を行った。

在職中の業務支援については、石井クンツ昌子ジェンダー研究所長が、シンポジウムおよびセミナーの企画運営と国際ネットワーク構築関連で協力したほか、ジェンダー研究所スタッフが事務業務の支援を担当した。

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクト「The Changing Contexts of Family Life and Early Childhood Education and Care (ECEC) in Japan」(日本の家族生活と幼児教育・保育の背景の変化)の実施

①労働と家庭の国際的状況、②現代日本の母親たち、③現代日本の幼児教育と保育の 3 つの研究テーマについて、在職中の各種業務を通じて考察を深めた。複数の研究会議を持ち、共同研究者との論文執筆を進捗させるといった成果を挙げたほか、大阪地域でのフィールドワークとアンケート調査を実施するなど、新たなプロジェクトを始動させた。[本報告書 174 頁参照]

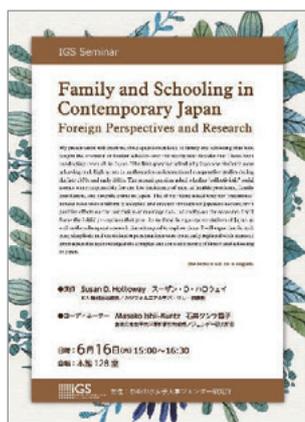
2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営およびディスカッサント登壇

2016 年 6 月 9 日(木)開催の、国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較 (Family, Work, and Well-Being in International Perspective)」の企画を担当した。ノルウェー・スタヴァンゲル大学の小野坂優子准教授と京都外国語大学の根本宮美子教授の 2 名を報告者として招聘し、自らは、石井クンツ昌子ジェンダー研究所長とともにディスカッサントとして登壇した。その成果は『IGS Project Series 5 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較』として 2016 年 7 月に刊行された。[本報告書 53～55 頁および IGS Project Series 5 参照]



3) 大学院生対象 IGS セミナー 講義

2016年6月16日(木)に「Family and Schooling in Contemporary Japan: Foreign Perspectives and Research」(現代日本における家庭と学校教育：外国人研究者の視点と研究)(コーディネーター：石井クンツ昌子)と題する大学院生対象のIGSセミナーを実施し、過去40年間の米国における日本研究の視点の変化の様子と、ハロウェイ教授がフィールドワークでの経験を通して獲得した、研究者としての客観的視点に関する講義を行った。[本報告書71～72頁参照]



【プロジェクト成果】

本プロジェクトの各種事業を通じて、本学においては、教員をはじめとする研究者、大学院生、そして附属幼稚園、保育園、こども園にとって、研究および教育活動の活性化につながる成果が得られた。

国際シンポジウムにおいては、少子化や子育てといった、現代の日本社会が直面する課題が取り上げられた。また、「幸福」や「ウェルビーイング」といった既存の研究ではあまり目を向けられることのなかった概念に焦点を当てた先進的な企画であった。ジェンダー平等先進国であるノルウェーの男女共同参画の研究や、日本の未婚男性の結婚観・幸福感という新しい視点での研究を進める、中堅世代の、国際的に活躍する日本人研究者の報告を聞き、相互交流の場が得られたことは、本学学生、大学院生、研究者にとって有意義な機会であった。合わせて、今後の、ジェンダー研究所を拠点とした国際的研究ネットワーク構築への展開が期待できる交流を持つことが出来た。

本学教員および大学院生が聴講したIGSセミナーは、国際比較研究に携わる研究者がフィールドワークにおいて直面する、研究者の視点のあり方についての講義であった。ハロウェイ教授自身の経験に基づく、高度な客観性をいかに研究調査の場で実現させるかの示唆に富んだ内容は、教育、心理、社会学を含む幅広い分野研究者にとって参考になるものであった。世界レベルの研究者の研究経験について詳しく聞く機会が提供されたことは、将来を担う若手研究者に対して、大きな刺激と励みになったことであろう。

また、附属幼稚園等の訪問については、関係者がハロウェイ教授と直接意見交換をする貴重な機会が得られたほか、本報告書の研究プロジェクトのページにある通り、附属幼稚園における研究および分析について、さらなる深化と活性化、国際化に向けた指摘を受けることも出来た。

以上の諸点が示すとおり、本特別招聘教授プロジェクトを通じて、グローバルかつ学際的な最先端の知見と教育研究活動の活性化という成果を得ることができた。また、ハロウェイ教授とは、任期終了後も、今後の連携の継続を目指した交流が進められている。

エリカ・バッフェツリ特別招聘教授プロジェクト実施概要

【招聘事業目的と期待される成果】

グローバル女性リーダー育成研究機構に設置されたジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施と、国際的な研究ネットワークの構築を推進する。特別招聘教授はこの両方に寄与する者であり、本学におけるジェンダー研究に、グローバルで学際的な最先端の知見を提供し、教育研究活動の活性化をもたらすことが期待される。

エリカ・バッフェツリ博士の専門領域は東アジア研究で、特に日本における新宗教とメディア・インターネットの関係等に関する研究では、近刊の『*Media and New Religions in Japan*』（Routledge 単著）に代表される、世界的に関心を集める成果を挙げている。また、若年成人層に焦点をあてた宗教信仰に関するジェンダー分析も行なっており、本学においても高水準のジェンダー研究プロジェクトを実施することが期待される。教育面では、独自の研究視点からの知見を提供することで、本学の研究者、院生、学部生に新たな刺激をもたらすことが期待できる。バッフェツリ氏はインドや北欧の研究者とのネットワークも築いていることから、グローバル女性リーダー育成研究機構事業の一つである本学を拠点とした国際的な研究ネットワーク構築への貢献が見込まれる。本学はバッフェツリ氏の所属するマンチェスター大学と長年に渡り協定を結んでおり、特別招聘教授としての招聘が、留学等学生海外派遣プログラムの充実をもたらし、グローバル女性リーダー育成の一層の促進につながる可能性が高い。

【エリカ・バッフェツリ特別招聘教授プロフィール】



マンチェスター大学日本学准教授。博士号取得後、日本学術振興会外国人特別研究員（法政大学）、オタゴ大学（ニュージーランド）准教授を歴任。専門分野は現代日本の宗教であり、1970年代以降に創設された新宗教に焦点を当てた研究を実施している。特に、1980～90年代のメディアと新宗教の相互作用、宗教指導者、宗教運動の生成と衰退、ラディカルな宗教運動における女性の役割に関する研究実績を持つ。近年の代表的著作は、『*Media and New Religions in Japan*』（2016）、（Ian Reader との共編著）『*Aftermath: the Impact and Ramifications of the Aum Affair. Special Issue of the Japanese Journal of Religious Studies (Japanese Journal of Religious Studies, Vol.39, No.1)*』（2012）、（Ian Reader、Birgit Staemmler との共編著）『*Japanese Religions on the Internet: innovation, Representation and Authority*』（2011）。これまで、国際交流基金、文部科学省を含む諸外国の政府・民間企業から研究教育助成金を獲得し、グローバルレベルでの研究活動を積極的に展開している。日本、ニュージーランド、インド、英国などの研究者との共同研究の経験も多く、研究視点は宗教学、東アジア研究、ジェンダー、家族など多角的である。

【採用期間】 2016年9月21日～12月20日

【職務内容およびその支援】

バッフェツリ特別招聘教授に依頼した業務は、1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進、2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加、3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告、4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援、および5) 上記活動についての成果報告の5項目である。在職中の業務支援については、ジェンダー研究所スタッフが、事務業務の支援および研究補助を担当した。

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクトの実施

日本の新宗教についての研究に関し、新たに手掛けるプロジェクトを含む、次の3つのプロジェクトを進捗させた。①近代日本の新宗教運動研究調査を進め、阿含宗と幸福の科学という二つの宗教団体へのフィールドワークを実施。衰退期を迎えた団体の戦略に目を向けるという新たな研究テーマ設定が出来た。②女性、宗教、暴力に関する新しい共同研究プロジェクトのためのフィールドワークを行ない、研究の方向性を検討した。③日本の宗教に関する共編著書の刊行作業を進めた。この他にも、セミナーや学会への参加を通し最先端の研究についての知見を得ることが出来た。[本報告書 174 頁参照]

2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総合司会登壇

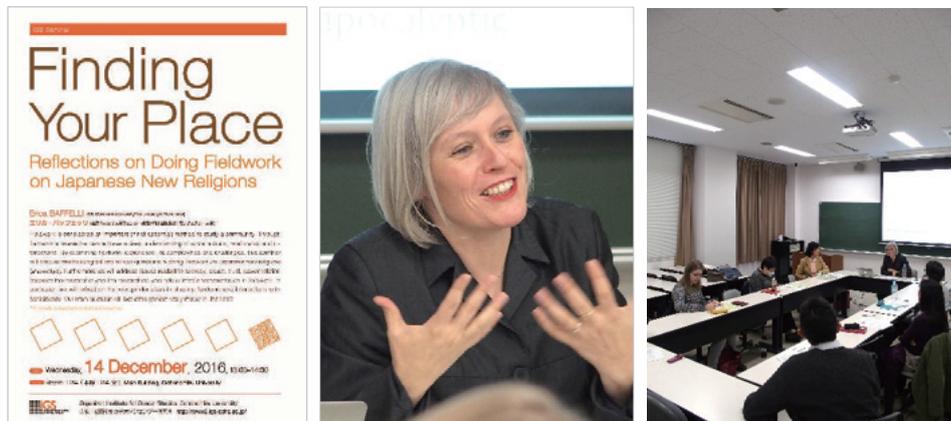
2016年10月19日(水)開催の、国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考 (Women, Religion and Violence in International Perspective)」の企画を担当した。上記研究プロジェクトの②をテーマとした内容であり、共同研究者であるアトリー・セン氏(コペンハーゲン大学准教授)を基調講演者に迎え、ディスカッサントとして松尾瑞穂(国立民族学博物館准教授)、小川真理子(日本学術振興会特別研究員(PD)／大妻女子大学)の両氏が登壇した。その成果は『IGS Project Series 7 女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考』として2016年12月に刊行された。[本報告 56～58 頁および IGS Project Series 7 参照]



3) 大学院生対象 IGS セミナー講義

2016年12月14日(水)に「Finding Your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions (立ち位置を理解する：日本の新宗教フィールドワークからの考察)」と題する大学院生対象の IGS セミナー

を実施した。文化人類学やエスノグラフィー研究者にとっての重要課題である、立ち位置やリフレクションの問題についての、自身の日本でのフィールドワークでの経験を例にした講義と、進行中の研究プロジェクトの紹介を含む内容であった。[本報告書 90～92 頁参照]



【プロジェクト成果】

エリカ・バッフェッリ特別招聘教授プロジェクトは、本学の教員をはじめとする研究者、大学院生にとって、それぞれの研究活動の活性化につながる刺激の多いものであったと言える。

国際シンポジウムは、バッフェッリ教授の新しい研究プロジェクトをテーマとするものであった。これは、女性たちの過激な宗教・政治団体への参加という、現在世界中で注目を集めている事象を、既存の研究理論の枠組みに拠らない、新しい視点から分析するという野心的なプロジェクトである。プロジェクト構想に見られる、社会科学の方法論についての批判的熟考の結果は、特に若手の研究者にとって、研究設計の参考にもなるものであろう。そして、そのプロジェクトの共同研究者による基調講演に対し、インドをフィールドにする医療人類学の専門家とドメスティック・バイオレンスの研究者という、2名の異分野の研究者からのコメントを受け、討論をする、というプログラム構成は、学際的な対話による研究の発展を当然必須のものとする、グローバルレベルの研究の先鋭的な姿勢を示しており、そこから学ぶことも多い。

本学教員、研究者および大学院生が聴講した IGS セミナーは、バッフェッリ氏自身の調査研究経験と、文化人類学のフィールドワークの方法論を中心にしたものである。研究内容に、研究者の自己が何らかの形で反映される可能性があることと認識することは、他の社会科学、人文科学分野においても重要であり、聴講した研究者たちに、各々の研究におけるリフレキシビリティについての再考を促す機会にもなっただろう。

また、バッフェッリ氏は、上記イベント実施に加えて、フィールドワーク調査、研究会出席、マンチェスター大学から日本に留学している学生のサポートも含めた様々な活動を、精力的にこなしていた。ジェンダー研究所主催のセミナーに出席し討論に参加したほか、研究所の研究者、スタッフたちとの交流も積極的に行い、短期間の滞在ではあったが、研究所全体の活性化にも大きく貢献した。

以上の諸点が示すとおり、本特別招聘教授プロジェクトを通じて、グローバルかつ学際的な最先端の知見と研究所事業活動の活性化という成果を得ることができた。今回の成果の発展として、国際シンポジウムで紹介された研究プロジェクトについての、進捗後の成果報告の機会を、再度本学で持つことが待望される。さらに、今後の国際研究ネットワーク構築関連の展開として、本プロジェクトをきっかけに、バッフェッリ氏の本務校であるマンチェスター大学との学術連携協定に基づく協力関係が、さらに発展することを期待している。

ラウラ・ネンツィ特別招聘教授プロジェクト実施概要

【招聘事業目的と期待される成果】

グローバル女性リーダー育成研究機構に設置されたジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施と、国際的な研究ネットワークの構築を推進する。特別招聘教授はこの両方に寄与する者であり、本学におけるジェンダー研究に、グローバルで学際的な最先端の知見を提供し、教育研究活動の活性化をもたらすことが期待される。

米国・テネシー大学のラウラ・ネンツィ博士の専門領域は近代日本史で、これまで江戸時代末期の女性たちに焦点を当てた研究を展開し、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近刊の *The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko* (単著 ハワイ大学出版) は、歴史学のみならず、ジェンダー研究者からも、日本の女性史についての理解を深めることにつながったとの高い評価を得ている。ネンツィ氏は欧米における研究ネットワークも確立しており、本学においてジェンダー研究所を拠点としたグローバルな共同研究ネットワークの構築に寄与することが可能である。また、ネンツィ氏の研究テーマは、独自の視点を持った大変興味深いものであり、本学の研究者・院生にとって、多くのことを学ぶ機会をもたらすことが期待できる。

【ラウラ・ネンツィ特別招聘教授プロフィール】



テネシー大学教授（日本史）。カリフォルニア大学サンタバーバラ校博士（歴史）。研究分野は徳川時代の社会文化史で、特にジェンダーに関心を持っている。近世日本の旅文化、巡礼、幕末の社会、明治維新で女性が果たした役割などのテーマに関する論文を、多数発表している。代表的著書は『*The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko: One Woman's Transit from Tokugawa to Meiji Japan*』（ハワイ大学出版、2015年）、『*Excursions in Identity: Travel and the Intersection of Place, Gender, and Status in Edo Japan*』（ハワイ大学出版、2008年）。これまで、東京大学、京都大学、国立歴史民俗博物館などで研究を行ない、ヨーロッパにおいても英国、スコットランド、イタリアなどで国際的な研究活動を展開している。米国内では、ハーバード大学、プリンストン大学、ペンシルベニア大学などのトップ大学において招待講演をしている。研究視点は歴史、女性学、ジェンダー研究などを取り入れた独創的なものである。

【採用期間】 2016年10月3日～2017年7月31日

【職務内容およびその支援】

ネンツィ特別招聘教授に依頼した業務は、1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進、2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加、3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告、4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援、および5) 上記活動についての成果報告の5項目である。在職中の業務支援については、ジェンダー研究所スタッフが、事務業務の支援を担当。

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクトの実施

日本の近世、徳川社会の研究として、新規のプロジェクト「After Dark: The Nighttime in Nineteenth Century Japan (日暮れ後：19世紀日本の夜)」に取り組んでいる。テーマは、江戸期日本の夜の闇。夜という時間帯が、文化的、政治的にどんな意味をもっていたかと、それをジェンダー視点から分析する試みである。また、幕末に向けての社会変化の中で、夜の持つ意味が社会的にどのように変わってきたかにも着目する。[本報告書 175 頁参照]

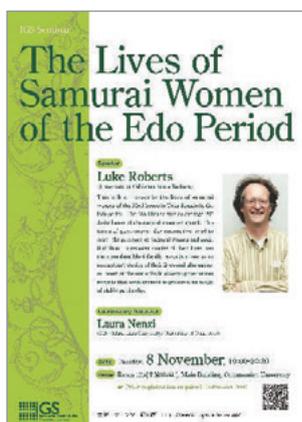
2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総合司会登壇

2017年1月17日(火)開催の、国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎 (Gender, Religion, and Social Reform in the Meiji Period: The Case of Sumiya Koume and Nakagawa Yokotarō)」の企画を担当した。ネンツィ教授と同じく、19世紀日本の歴史についてジェンダー視点からの研究に取り組んでいる、米スミス大学のマーニー・アンダーソン准教授を基調講演者に迎え、コメンテーターとしてエリック・シッケタンツ(日本学術振興会外国人特別研究員/東京大学)、石井紀子(上智大学教授)の両氏が登壇した。維新後の社会変化は、人々の考えやジェンダー役割をも変えていった。その中で、キリスト教布教も大きな役割を果たしており、元士族の官僚中川横太郎とその妻炭谷小梅の、ふたりの関係の変化と彼らの生き方に焦点をあて、人々の変化を見つめる内容であった。シンポジウムの成果はIGS Project Seriesの1冊として2017年夏刊行予定。[本報告 59~61 頁参照]



3) IGS セミナー

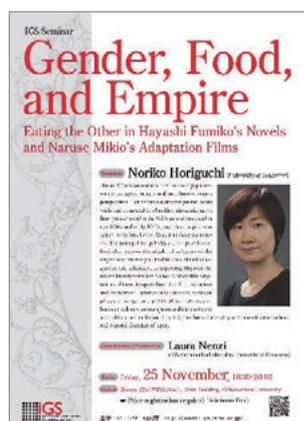
米国で日本関連の研究に携わる研究者2名を招聘し、英語によるセミナーを2回企画運営した。



①2016年11月8日(火)「The Lives of Samurai Women of the Edo Period (江戸時代の武家の女性たち)」

講師：ルーク・ロバーツ(カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授)

長年土佐藩の歴史研究に取り組んでいる研究者を講師に迎え、土佐山内家の家臣、森家の記録文書から、家父長制度という建前の背後に、どのようなジェンダー構造実態が隠されていたかを読解。[本報告書 80~82 頁参照]



②2016年11月25日(金)「Gender, Food, and Empire: Eating the Other in Hayashi Fumiko's Novels and Naruse Miko's Adaptation Films (ジェンダー・食・帝国:「他者を食べる」物語と記憶(林芙美子の小説と成瀬巳喜男の翻案映画を中心に))」

講師:堀口典子(テネシー大学准教授)

日本の近代文学を専門とする講師を迎え、1920~40年代の日本の政治経済状況や帝国日本などの集合的なアイデンティティ構築において、「食」がどのような役割をはたしていたのかを、林芙美子の小説と、それを原作にした成瀬巳喜男監督の映画を題材に考察。[本報告書85~87頁参照]

4) 大学院講義

2016(平成28)年度後期の、博士前期課程比較社会文化学専攻歴史文化学コース「歴史資料論特論」を担当。「Gender Issues in Tokugawa Period(徳川時代のジェンダー課題)」をテーマとした英語による講義。江戸時代の女性に関する文献を題材に、歴史研究およびジェンダー史研究の基礎と方法論を学び、研究者としてのスキルを身につけることを目標としている。文献講読と演習を中心とした、米国大学院式の講義。

【プロジェクト成果】

2016(平成28)年度のラウラ・ネンツイ特別招聘教授プロジェクトは、ジェンダー研究所事業に学際的な広がりをもたらすものであったと言える。近年、IGSでは、所属研究者の専門領域が社会科学を中心としているものになっていることから、開催イベントや研究プロジェクトのテーマも、社会科学系の内容が多くなっていった。そこへ、歴史研究を専門とするネンツイ教授が加わり、その研究プロジェクトのみならず、人文科学系の研究者を招聘してのイベント企画などを進めてくれたことで、ジェンダー研究が本来持つ学際的という特徴が、研究所の活動実績に、より顕著に表れるという結果をもたらした。

そしてまた、この「広がり」という点においては、別の側面での成果も見られた。ネンツイ教授が大学院授業を担当するにあたっては、専門が歴史研究であることも手伝って、ジェンダー関連の専攻ではなく、比較社会文化学専攻での科目が充てられた。これは、ジェンダー研究所の特別招聘教授プロジェクトの貢献が、学内他部局への広がりを持つと明示していると言えよう。また、ネンツイ教授の企画によるセミナーやシンポジウムへは、日本国内で日本史や日本文化研究に取り組む、外国人研究者が多く来場している。本学へ足を運ぶ、新たな研究者層を広げる成果を挙げているということは、ジェンダー研究所の国際的研究拠点としての存在感を高め、ひいては、国際的研究ネットワーク構築へも大きく貢献することになるだろう。

さらに、ネンツイ教授が国際シンポジウムやIGSセミナーに招聘した研究者は、いずれも、独創的な研究視点からの研究成果をもち、それを、惜しむことなく本学で公開発表してくれている。これは、本学所属研究者や大学院生の学びや研究面での刺激ともなる貢献である。

引き続きの採用となる次年度にも、大学院講義や興味深いテーマの国際シンポジウムとセミナーの実施が決定しており、本プロジェクト成果のさらなる充実が確信される。

5.

国際研究ネットワーク

2016 年度

国際研究ネットワーク構築概要

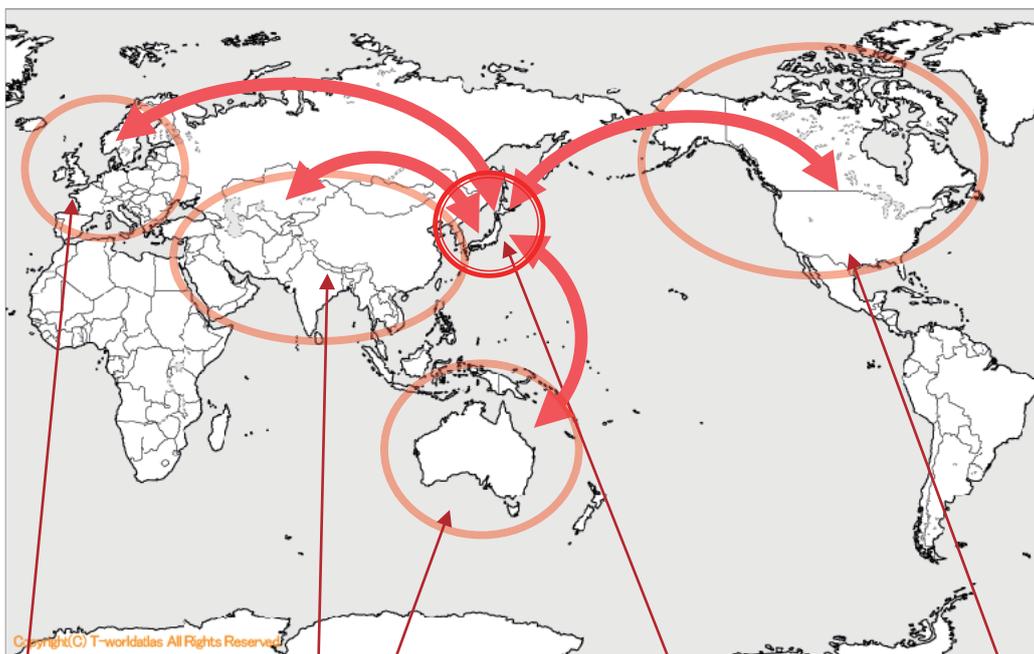
- 1) 国際的な共同研究・研究交流
- 2) 海外研究者フェローシップ受入

▶ 2016 年度国際研究ネットワーク構築概要

5 カ国、11 箇所の研究機関との国際研究・交流ネットワーク

ジェンダー研究所は日本のジェンダー研究のハブとして、国内・海外の研究機関及び研究者らと広くネットワークを構築し、共同研究にも積極的に取り組んでいる。2016 年も、アジア、ヨーロッパ、アメリカの 5 カ国、11 箇所の研究機関及び研究チームと研究交流を行った。とりわけ、11 月には第 1 回東アジア日本研究者協議会に IGS パネルを組んで参加し、唯一のジェンダー研究関連のパネルとなった。また、フェローシップを獲得して来日する、海外の若手研究者も受け入れた。共同研究の成果は、国際シンポジウムや出版物を通じて広く社会に還元していきたい。

ジェンダー研究所を拠点とする国際ジェンダー研究ネットワークイメージ



ヨーロッパ	アジア・オセアニア	日本国内	北米
European Consortium for Political Research アルザス・欧州日本学研究所 ストラスブール大学外国語・外国文化学部日本学学科 パリ第 2 パンテオン・アサス大学 《招聘研究者》 小野坂優子 (スタヴァンゲル大学・ノルウェー) アートリー・セン (コペンハーゲン大学・デンマーク) 《特別招聘教授》 エリカ・バップフェッリ (マンチェスター大学・英)	韓国ジェンダー政治研究所 ソウル大学日本研究所 ソウル大学国際問題研究所 東アジア日本研究者協議会 国立台湾大学 アジア工科大学院大学 (AIT) 環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻 《招聘研究者》 ジョヨッティ・ゴーシュ (ジャワハルラル・ネルー大学・インド) C.P.チャンドラシェーカー (ジャワハルラル・ネルー大学・インド) キャサリン・ミルズ (モナシュ大学・豪)	「フェミニスト経済学」研究会 政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (GDRep) 生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会 「冷戦とジェンダー」研究会 ジェンダー関連学協会コンソーシアム 《招聘研究者》 計 19 名 (125 頁参照)	日米女性政治学者シンポジウム 《招聘研究者》 エイミー・リンド (シンシナティ大学・米) ルーク・ロバーツ (カリフォルニア大学サンタバーバラ校・米) 堀口典子 (テネシー大学・米) マーニー・S・アンダーソン (スミス大学・米) メリッサ・デックマン (ワシントン大学・米) ジュリー・ドーラン (マカレスター大学・米) 《受入フェロー》 ユン ジソ (カンザス大学・米) 《特別招聘教授》 スーザン・ハロウェイ (カリフォルニア大学バークレー校) ラウラ・ネンツィ (テネシー大学・米)

1) 国際的な共同研究・研究交流

【アジア・オセアニア地域】

■IGS 専任教員・特任教員・特任リサーチフェローによる国際的な共同研究・研究交流

東アジア

東アジア日本研究者協議会

2016 年度に発足した東アジア地域の日本研究者の協議会。日本、韓国、中国、台湾の日本研究者が各国で行われている日本研究の成果や情報を共有し、東アジア地域の学術的な国際交流を推進するための学際的な学会。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

東アジア日本研究者協議会第 1 回国際学術会議（ソウル大学）に、パネルを組んで研究発表を実施。参加者は足立眞理子（IGS 教授）、申琪榮（IGS 准教授）、本山央子（本学大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）、大沢真理（東京大学教授）、金井郁（埼玉大学准教授）。

韓国

韓国ジェンダー政治研究所

韓国ジェンダー政治研究所は 1999 年に設立された NPO。政治分野におけるジェンダーギャップを解消するために世論喚起、研究、ロビー活動を行っている当該分野で代表的な民間研究所。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

研究委員、当該研究所の研究活動企画、研究会参加。2016 年度から韓国研究財団から助成金を受託し共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表的代表制の性差についての公式・非公式制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。ジェンダー研究所の「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクト（24 頁参照）の韓国調査を実施。

ソウル大学日本研究所

日本研究の活性化と日韓相互理解の増進を目標として 2004 年に設立。日本関連資料の収集、国際学術会議、学術活動事業、情報ネットワーク構築、次世代日本専門家の養成等の事業を遂行。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

学術雑誌『日本批評』海外編集委員。

共同研究プロジェクト『日本の民主主義』共同研究員。

ソウル大学国際問題研究所

ソウル大学政治外交学部に設立され、外交問題や国際政治の研究に取り組む研究所。研究活動の一部として Social Science Korea 「East Asian International Relations Theory」を遂行。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Social Science Korea 「East Asian International Relations Theory」共同研究員。
東アジアの国際関係理論構築研究、ジェンダー、日本地域担当。

台湾

国立台湾大学

【担当】申琪榮（IGS 准教授）、Huang Chang-ling（国立台湾大学准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクト（24 頁参照）の台湾調査。

タイ

アジア工科大学院大学（AIT）環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

1959 年創立で 60 以上の地域から 1700 人以上の学生が学んでいる理工系を中心とした全寮制の大学。校内公用語は英語で、当該専攻はジェンダー視点から開発の問題を研究している。

【担当】日下部京子（AIT 教授）、足立眞理子（IGS 教授）、申琪榮（IGS 准教授）、
板井広明（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

本学ジェンダー社会科学専攻院生の AIT 派遣、AIT 院生の日本でのフィールドワーク受入による交換研修プログラム、「AIT ワークショップ」を実施し（128～133 頁参照）、国際的な視点を持った若手研究者の育成および、アジア各国出身学生との研究交流を進めている。

■2016 年度招聘研究者

ジョヨッティ・ゴース（ジャワハルラール・ネルー大学・インド）

国際シンポジウム「金融化、雇用、ジェンダー不平等」（50～52 頁参照）

C.P.チャンドラシェーカー（ジャワハルラール・ネルー大学・インド）

国際シンポジウム「金融化、雇用、ジェンダー不平等」（50～52 頁参照）

キャサリン・ミルズ（モナシュ大学・豪）

IGS セミナー（生殖領域シリーズ）「出生前検査をめぐる倫理」（83～84 頁参照）

【ヨーロッパ】

■IGS 専任教員・特任教員・特任リサーチフェローによる国際的な共同研究・研究交流

全欧

European Consortium for Political Research

ヨーロッパを中心とする政治学研究機関（大学の学科や研究所など）の研究協議会。年次大会以外にもジェンダーと政治分野に特化した European Conference on Politics and Gender を隔年で開催。

【担当】 申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

機関メンバーシップ。本学関係者は ECPR 主催学会等の参加費割引、各種電子リソースへのオンラインアクセスなどの特典がある。

フランス

アルザス・欧州日本学研究所

ヨーロッパにおけるトップクラスの日本学研究所。日欧の多くの大学との研究連携を続けているほか、日本企業の欧州進出支援も行っている。

【担当】 足立眞理子（IGS 教授）、サンドラ・シャール（ストラスブール大学）

【共同研究・研究交流の概要】

国際シンポジウム「モダン再考：戦間期日本の都市空間・身体・ジェンダー」（2017年3月22日～3月25日、於：ストラスブール大学）共催（65頁参照）。同シンポジウムの内容および共同研究成果を、単行本にて刊行予定（フランス語版）。

ストラスブール大学外国語・外国文化学部日本学学科

フランス・ストラスブール大学外国語・外国文化学部日本学学科は、フランス国内のみならず、EU 全域において、日本学の中心的かつ先端的な教育・研究機関であり、多くの留学生受け入れ実績をもっている。なかでも、人文・思想、歴史、経済史、ジェンダー研究で国際的に著名であり、優れた研究業績を上げている。

【担当】 足立眞理子（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】 サンドラ・シャール氏（講師）訪問（書籍刊行準備）。

パリ第2パンテオン・アサス大学

1970年創立の法律政治経済経営分野学部からなる社会科学系大学。学際的な研究に力を入れている。

【担当】 板井広明（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】 パリ政治学院のグラントに基づく「ナッジ・プロジェクト」責任者の一人であるアン・ブルノン教授との「ナッジ」に関する共同研究の成果として、*The Tocqueville Review/La revue Tocqueville*, vol.37, no.1, 2016 June に論考を掲載した。

■2016 年度招聘研究者

小野坂優子（スタヴァンゲル大学・ノルウェー）

国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較」（53～55 頁参照）

アトリー・セン（コペンハーゲン大学・デンマーク）

国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考」（56～58 頁参照）

エリカ・バッフェリ（マンチェスター大学・英）

特別招聘教授（111～113 頁参照）

【北米】

■IGS 専任教員・特任教員・特任リサーチフェローによる国際的な共同研究・研究交流

米国

日米女性政治学者シンポジウム（Japan America Women Political Scientists Symposium）

2000 年からスタートしたアメリカと日本の女性政治学者による研究交流ネットワーク。相互にアメリカと日本でシンポジウムを開催し研究交流を行ってきた。日本では IGS がまとめ役を担っている。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）、田中洋美（明治大学准教授）、武田宏子（名古屋大学教授）、岩本美砂子（三重大学教授）、メリッサ・デックマン（ワシントンカレッジ教授）、ジュリー・ドーラン（マカレスター大学教授）、マリアン・パリー（デラウェア大学名誉教授）ほか

【共同研究・研究交流の概要】

女性の政治的表現性及びジェンダー関連政策について、日本及び米国で定期的な研究交流・シンポジウム開催。2016 年度は IGS 企画の国際シンポジウムを開催。

■2016 年度招聘研究者

エイミー・リンド（シンシナティ大学・米）

IGS セミナー「ポスト新自由主義の未来を想像する」（73～74 頁参照）

ルーク・ロバーツ（カリフォルニア大学サンタバーバラ校・米）

IGS セミナー「江戸時代の武家の女性たち」（80～82 頁参照）

堀口典子（テネシー大学・米）

IGS セミナー「ジェンダー・食・帝国」（85～87 頁参照）

マーニー・S・アンダーソン（スミス大学・米）

国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良」（59～61 頁参照）

メリッサ・デックマン（ワシントン大学・米）

国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？」（62～64 頁参照）ほか

ジュリー・ドーラン（マカレスター大学・米）

国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？」（62～64 頁参照）ほか

Yoon Jiso（カンザス大学）

日本学術振興会外国人特別研究員（126 頁参照）

スーザン・D・ハロウェイ（カリフォルニア大学バークレー校・米）

特別招聘教授（108～110 頁参照）

ラウラ・ネンツィ（テネシー大学・米）

特別招聘教授（114～116 頁参照）

【日本国内】

■ 関連研究会・連携研究・ネットワーク機関等

○「フェミニスト経済学」研究会

〈コーディネーター〉足立真理子（IGS 教授）、伊田久美子（大阪府立大学教授）

○政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Gender, Diversity and Representation（GDRep））

『政党行動と政治制度』セミナー・シリーズ」実施

〈コーディネーター〉申琪榮（IGS 准教授）

〈メンバー〉三浦まり（上智大学教授）、Jackie Steele（東京大学准教授）

○生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会

IGS セミナー 生殖領域シリーズを含む、セミナー・シリーズ実施

〈メンバー〉久慈直昭（東京医科大学教授）、清水清美（城西国際大学教授）、

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

○「冷戦とジェンダー」研究会

IGS セミナー、IGS 研究会実施

〈コーディネーター〉臺丸谷美幸（IGS 特任リサーチフェロー）

〈メンバー〉申琪榮（IGS 准教授）、宮内貴久（お茶の水女子大学教授）、武田興欣（青山学院大学教授）、幸田直子（近畿大学専任講師）

〈協力〉岡崎まゆみ（帯広畜産大学人間科学研究部門専任講師）、

兼子歩（明治大学政治経済学部専任講師）、山本めゆ（日本学術振興会特別研究員 PD）、

土野瑞穂（本学みがかずば研究員）

○国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク

ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加 ほか

■2016 年度招聘研究者

伊藤誠（東京大学）

国際シンポジウム「金融化、雇用、ジェンダー不平等」（50～52 頁参照）

久慈直昭（東京医科大学）

IGS セミナー（生殖領域シリーズ）「AID 出生者のドナー情報を得る権利」（69～70 頁参照）

根本宮美子（京都外国語大学）

国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較」（53～55 頁参照）

高橋梓（東京外国語大学）

IGS セミナー「訳者と語る『京城のモダンガール』」（77～78 頁参照）ほか

松尾瑞穂（国立民族学博物館）

小川真理子（日本学術振興会特別研究員 PD／大妻女子大学）

国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考」（56～58 頁参照）

武藤香織（東京大学）

IGS セミナー（生殖領域シリーズ）「出生前検査をめぐる倫理」（83～84 頁参照）

エリック・シッケタンツ（日本学術振興会外国人特別研究員）

石井紀子（上智大学）

国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良」（59～61 頁参照）

上村協子（東京家政学院大学）

栗田啓子（東京女子大学）

松野尾裕（愛媛大学）

生垣琴絵（沖縄国際大学）

池尾愛子（早稲田大学）

金野美奈子（東京女子大学）

伍賀偕子（元大阪総評オルグ、元関西女の労働問題研究会代表）

IGS セミナー「日本における女性と経済学」（93～94 頁参照）

田中洋美（明治大学）

武田宏子（名古屋大学）

岩本美砂子（三重大学）

国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？」（62～64 頁参照）ほか

2) 海外研究者フェローシップ受入

日本学術振興会外国人特別研究員

Yoon Jiso (カンザス大学準教授)

【受入担当】 申琪榮 (IGS 准教授)

【受入期間】 2015 (平成 27) 年 8 月 10 日～2017 (平成 29) 年 6 月 10 日

【研究テーマ】 日本の地方政治における女性の政治的代表性の研究 (本報告書 27 頁参照)

2016 年度の研究成果

主な研究テーマは、クオータ制度が行なわれている韓国と行われていない日本を比較し、女性の政治参加を拡大するために導入された制度が、女性の政治的的代表性や意識改革にどのような影響を与えるのかを分析することである。

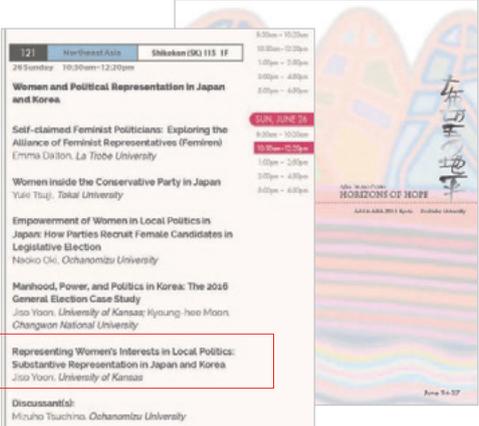
2016 年は、具体的に地方議会に注目し、中でもっとも女性議員の割合が高いと言われるソウル市議会と東京都議会に焦点を当てた。2000 年代以来の会議録 (本会議・委員会) を検討し、女性の利益に関する政策トピックは何か、誰が (議員性別・政党) このような政策トピックに言及するのかに関するデータを集めた。そのデータ分析を通し、男性議員より女性議員が、女性議員の中でも非保守政党所属の議員らが特に女性の利益を代弁していることが明らかとなった。また、議員らの所属政党によって、言及するテーマや内容が異なった。最後に、東京都議会ではクオータ制が導入されていないにもかかわらず、少数会派の女性議員らが女性やマイノリティの利益を代弁するために活躍していることがわかった。

このデータに基づいて研究論文を書き、2016 年の 6 月 24～27 日に京都 (日本) で開催された Association for Asian Studies in Asia でその発表を行った。再校正した論文は、学術誌『Asian Women』(Research Institute of Asian Women Sookmyung Women's University 刊) に掲載予定である。

このほか、下記 2 件の IGS 研究プロジェクトにも参加しており、研究所研究者らとの共同研究に取り組んでいる。

- ・「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究 (本報告書 24 頁参照)
- ・人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究 (本報告書 33 頁参照)

Association for Asian Studies Asia 2016 プログラム
<http://aas-in-asia-doshisha.com/>



Time	Topic	Speaker	Institution
9:30am - 10:30am	Women and Political Representation in Japan and Korea		
10:30am - 12:20pm	Self-claimed Feminist Politicians: Exploring the Alliance of Feminist Representatives (Femiren)	Emma Dalton	La Trobe University
1:00pm - 2:00pm	Women inside the Conservative Party in Japan	Yuki Tsuji	Tokai University
2:00pm - 2:30pm	Empowerment of Women in Local Politics in Japan: How Parties Recruit Female Candidates in Legislative Election	Nadiko Oki	Osakanomizu University
2:30pm - 4:30pm	Manhood, Power, and Politics in Korea: The 2016 General Election Case Study	Jiso Yoon	University of Kansas; Hyeoung-hee Moon, Chngyeon National University
4:30pm - 6:00pm	Representing Women's Interests in Local Politics: Substantive Representation in Japan and Korea	Jiso Yoon	University of Kansas
6:00pm - 8:00pm	Discussion Panel	Miruhoo Yoo	Osakanomizu University

6.

教育プロジェクト

- 1) 国際教育交流プログラム
「AIT ワークショップ」
- 2) 専任・特任教員担当講義

1) 国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」

開発とジェンダーの問題をグローバルに研究する教育プログラム

16年目を迎える国際教育交流プログラム

AIT ワークショップは、2001年に本学ジェンダー研究センター（2015年度からジェンダー研究所）所属教員と、アジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology、通称AIT）ジェンダーと開発専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められた、国際教育交流プログラムである。

大学院博士前期課程「開発とジェンダー論コース」において、開発とジェンダーという核となる主題に関して、ジェンダーの理論的枠組みを習得するとともに、フィールドワークを通して開発の現場での知見を得、それらを総合する学びの場を提供するために開始された。

第3回までの実績により、2004年12月には、本学とアジア工科大学院大学との間で、「ジェンダーと開発分野」に関する大学間学術交流協定が結ばれた（当協定は2009年に交流領域の拡充が図られ、2013年には、2004年の協定で1か月以内だった交換留学生制度が1年以内に改訂され細目も定められた）。

第4回以降は、協定に基づき、ジェンダー研究センター（研究所）とAIT・環境資源開発研究科により、タイAITで実施されるワークショップへの本学博士前期課程院生を主とする派遣と、AIT大学院生の日本国内での研修受入による、大学院生を主体とした研究交流事業をほぼ毎年実施している。

2012年度から、AITワークショッププログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013年度はサマープログラムを活用してAIT院生の日本国内研修を実施し、2014年度からは大学院前期課程科目「フィールドワーク方法論」を国内事前研修として取り入れ、以上の経緯を経て、本年度で15回目を迎えた。

グローバルなフィールドでの理論的検討と実践的学習

本教育プログラム（「国際社会ジェンダー論演習」）の目的は、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査の基礎を、実践的に学習することにある。

大学院講義の事前学習（関連機関での調査）、調査して得た知見の英語によるプレゼンテーション、報告書作成という一連の調査研究の研修を通して、修士論文作成のための技能を習得する。加えて、英語によるインタビュー、プレゼンテーション、論文執筆の訓練機会にもなる。

このような充実したプログラムを通して、参加者は開発の問題をジェンダー視点から考察することの意義を皮膚感覚と理論的観点からより深く把握することができるようになる。またAITに集まるアジア各国の院生の熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから刺激を受け、研究手法や語学のブラッシュアップへの動機づけを得る。その結果、研究者としての議論の組み立て方や調査方法、研究アプローチについて際立った効果が参加者には見られるのであり、本プログラムは比類のない教育効果をもっているとと言える。

■AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ
2001	Gender and Development ジェンダーと開発
2002	Gender, Work and Globalization ジェンダー、労働、グローバリゼーション
2003	Women, Globalization and Home-based Work 女性、グローバリゼーション、在宅労働
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand タイにおける女性移動労働者の権利 【協定締結】
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women タイにおけるジェンダーと開発：労働者の権利と女性に対する暴力
2006	〔実施せず〕
2007	Gender, Rights and Empowerment ジェンダー、権利、エンパワメント
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives ジェンダー視点によるタイ・日本相互研究
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis ジェンダーと政策：タイと日本の相互分析を通して
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan ジェンダーと社会改革：タイと日本の比較分析
2011	Gender and Disaster ジェンダーと災害〔特別プログラム：本学でのシンポジウム開催〕
2012	Sexuality セクシュアリティ
2013	Global Justice, Women's Health and Prostitution グローバル・ジャスティス：女性の健康と売春
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment 1) セクシュアリティ、2) ジェンダーと貧困、3) 教育とエンパワメント
2015	Labor, Sexuality and Empowerment 労働、セクシュアリティ、エンパワメント
2016	Labor and Association from Gender Perspective ジェンダー・パースペクティブから見た労働と組織

▶ 2016 年度 AIT ワークショップ実施概要

「ジェンダー・パースペクティブから見た労働と組織」をテーマに実施

【概要】

「Labor and Association from Gender Perspective」をテーマにした 2016 年度の AIT ワークショップは、国内事前研修（大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」4/13～7/20）、AIT 院生 2 名の受入（8/29～9/5）、タイ AIT での研修（9/10～9/17）、研修報告会（11/30）、報告書作成というプログラムで行なわれた。

日本とタイでのフィールドワーク実践によって、参加院生のフィールドワーク力は鍛えられ、その過程での調査や討議によって各自の研究テーマの深化に大きく貢献したものとなった。

【プログラム統括】板井広明（ジェンダー研究所特任講師）

【コーディネーター】バラニャク・ズザンナ（博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

【履修生】佐藤貴恵（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース）

矢萩まりこ（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース）

崎濱奏子（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 地理環境学コース）

包夢真（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース）

【AIT からの研修生】 Chitrakshi Vashisht（修士課程）

Khamnuan Kheuntha（修士課程）

◇全プログラム日程

日程	内容
2016 年 4/13～7/20	フィールドワーク方法論（全 14 回） 講師：大橋史恵（武蔵大学准教授）
8/29～9/5	AIT 院生 2 名来日研修
9/10～9/17	タイ AIT 研修
10/19	国際社会ジェンダー論演習講義 講師：橋口道代（JICA）
11/30	タイ研修報告会  国際社会ジェンダー論演習講義 講師：菅野琴（元 UNESCO）
2017 年 1 月	報告書作成

▶ 2016 年度 AIT ワークショップ研修報告

国内事前研修

2016 年度の AIT ワークショップは「ジェンダー・パースペクティブから見た労働と組織 (Labor and Association from Gender Perspective)」をテーマに、博士前期課程ジェンダー社会科学専攻の 4 名が参加した。大学院科目での国内事前研修は、大橋史恵講師 (武蔵大学准教授) による「フィールドワーク方法論」授業である (4/13 (水) ~7/20 (水) 全 14 回)。資料の探し方や扱い方、細かな研究倫理の問題等をはじめ、論文における引用の仕方や文献リストの作り方、フィールドワークのプランニングや実践における注意点といった基礎的事項が講じられた。藤田結子・北村文編『ワードマップ 現代エスノグラフィー: 新しいフィールドワークの理論と実践』(新曜社、2013 年) および平井京之介著『村から工場へ: 東南アジア女性の近代化経験』(NTT 出版、2011 年) を購読。フィールドワーク実習として、アジア女性資料センターを 2 度訪問している。

研究交流研修

8/29 (月) ~9/5 (月) には、Chitrakshi Vashisht (修士課程)、Khamnuan Kheuntha (修士課程) の 2 名が AIT から来日して研修を行なった。IGS を含めたお茶大内の施設などの訪問、熊谷圭知教授特別ゼミ (大学院) 参加、アジア女性資料センターと代々木タイフェスティバルでのフィールドワークなどを行なった。



9/10 (土) ~9/17 (土) は上記 4 名の院生がタイにある AIT での研修にのぞんだ。タイに滞在中は、JICA、IOM Thailand Office、Empower Foundation、LPN Foundation、Thai Transgender Alliance、OXFAM Thailand Office を訪問・調査し、AIT 選択授業や日下部ゼミ「フェミニストはどのようにして調査にアプローチするか」、お茶大-AIT ジョイント・セミナーに出席し、研究報告などをこなしした。

研修報告会

11/30 (水) 11 時 45 分~13 時には板井広明ジェンダー研究所特任講師の司会のもと、バラニャク・ズザンナ博士課程院生・コーディネーターが参加して研修報告会を開いた。参加院生 4 名が各自分担箇所を報告し、その後、質疑応答を行なった。いずれの院生も、取材先の個人情報の保護や取材のまとめ方など、前期に受講した「フィールドワーク方法論」の授業で得たことが役立ったと話している。また、タイの JICA 事務所や現地のシェルター、セックスワーカー向けのエンパワー事務所、持続可能な開発に基づく支援を行なう施設などの調査が、修士論文を書く上で必要な取材の機会となったことに加え、ワークショップのプログラムは、それぞれの研究対象の問題点などを明確化する一助となったとのことだった。同世代の AIT の学生とのジョイント・セミナーでは、さまざまなアプローチについて学び、新たな知見を得ることができ、かつ活発な議論が交わされていたことから刺激を受けた様子である。

研修報告会での発表をもとにして、現地での調査や授業風景などの画像、現地情報などを取り入れた報告書を 2017 年 1 月に完成させた。

◇フィールドワーク方法論（全 14 回）講師：大橋史恵（武蔵大学准教授）

回	内容
第 1 回	オリエンテーション
第 2 回	資料調査の方法（図書館での演習）
第 3 回	研究と論文執筆のルール
第 4 回	AIT ワークショップテーマ決定 文献講読（1）『現代エスノグラフィー』第 1 部
第 5 回	文献講読（2）『現代エスノグラフィー』1 部続き、『村から工場へ』序章・1 章
第 6 回	文献講読（3）『村から工場へ』1 章・2 章
第 7・8 回	フィールドワーク実習（@アジア女性資料センター）プレ調査
第 9 回	文献講読『村から工場へ』3 章・4 章
第 10 回	文献講読『村から工場へ』5 章・終章
第 11 回	フィールドノートの書き方・問いの発見
第 12・13 回	フィールドワーク実習（@アジア女性資料センター）本調査
第 14 回	授業のまとめ

◇AIT 生来日研修

実施日	内容
8/29	成田到着 グローバル協力センター、グローバルリーダーシップ研究所訪問歓迎会
8/30	大日本水産会、NPO 法人レインボーアクション訪問
8/31	熊谷圭知 お茶の水女子大学教授特別ゼミ
9/1	Human Rights Watch Japan 訪問
9/2	ショートレクチャー・AIT 生による研究報告会
9/3	自由行動
9/4	送迎会
9/5	帰国

◇タイ研修日程

実施日	内容
9/10	バンコク到着
9/11	アユタヤ観光、歓迎会
9/12	AIT 日下部先生ゼミ「フェミニストはどのようにして調査にアプローチするか」受講
9/13	AIT 選択授業受講、お茶大＝AIT ジョイント・セミナー
9/14	JICA、IOM Thailand Office、Empower Foundation 訪問調査
9/15	LPN Foundation 訪問調査
9/16	Thai Transgender Alliance、OXFAM Thailand Office 訪問調査
9/17	帰国

◆ AIT ワークショップ参加大学院生の声 (AIT ワークショップ報告書から抜粋)

AIT ワークショップでの経験は参加院生にとって多大な刺激となったことが、下の感想文面から伝わってくる。また、AIT 院生から寄せられたコメントからも、啓発的な研究交流であったことがわかる。

今回、様々な団体を訪問させていただき、タイ社会だけでなく世界の問題を多様な視点から考えることができました。・・・AIT での滞在では、授業や学内での生活が体験でき、とても刺激的でした。・・・授業では、学生が英語を使って積極的に意見を戦わせており、自分の学習態度を見直す必要を強く感じました。英語力や知識量、学習態度など、これから改善すべきことが山積みですが、この反省を忘れないように今後の学業に励みたいと思います。

(M1 佐藤貴恵)

お会いしたどの方も、意欲的に問題解決に取り組み、常に思考し続けるタフな方々ばかりでした。アジア工科大学院で出会った研究者たちは皆、常に発言を求められるよりも先に発言し、高い関心を持ってその場その場の課題に取り組んでいるように見受けられました。かれらの語学力・コミュニケーション能力はさることながら、やはりその姿勢から非常に学ばされる点が大きく、励みにもなりました。

(M1 崎濱奏子)

実習全体を通じてコミュニケーションの重要性というものを思い知ることになりました。・・・たどたどしい英語であってもとにかく発言することで、周囲の友人が助けてくれたり、相手の方が汲み取ろうとしてくれたりしたため、話すという意志を表示することが大事だと改めて感じました。また、今回の研修では、私たちが今後修士論文を作成する際に必要となる準備、調査、報告という一連の過程を実体験することができました。・・・実習で学んだ反省すべき点・やって良かった点を今後の研究に活かしていきたいです。

(M1 矢萩まりこ)

AIT の授業では、同世代の学生たちの質問や意見を出す反応のスピードに驚きました。ゼミで活発な発言に刺激を受けて、独立した精神で、常に思考している頭脳になるのは研究者というのがまさにそういうものではないかと痛感しました。

(M1 包 夢真)

The entire exchange workshop has been very informative and provided a great learning experience. Every visit/event organized under this workshop contributed to my knowledge.

ワークショップ全体を通して、貴重な学習経験を積むことが出来ました。調査やゼミへの参加、報告会などのプログラムから、新しい知見を得ることが出来ました。

(AIT M2 Chitrakshi Vashisht)

2) 専任・特任教員担当講義

《人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻》

足立眞理子（教授）

ジェンダー政治経済学（前期）

ジェンダー政治経済学演習（後期）

フェミニスト経済学（前期）

フェミニスト経済学演習（後期）

ジェンダー学際研究論文指導（通年）

ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年不定期）

ジェンダー学際研究報告（発展）（通年不定期）

申琪榮（准教授）

前期（サバティカル）

比較政治論（通年不定期）

ジェンダー学際研究論文指導（通年）

ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年不定期）

ジェンダー学際研究報告（発展）（通年不定期）

《人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻》

足立眞理子（教授）

ジェンダー基礎論（前期）

開発経済学（前期）

開発経済学演習（後期）

申琪榮（准教授）

フェミニズム理論の争点（後期）

フェミニズム理論の演習（後期）

ジェンダー社会科学論（通年）

板井広明（特任講師）

国際社会ジェンダー論（後期）

《グローバル理工学副専攻（博士前期課程・後期課程共通）》

仙波由加里（特任リサーチフェロー）

Essential Ethics for Global Leaders（担当：石田安実・グローバル人材育成推進センター特任准教授）

・ Who should decide? Dax's case (Autonomy vs. Beneficence)（第3回：6月28日）

・ Donor-conceived people's right to know donor identity (Justice and non-maleficence)（第4回：7月5日）

《学部》

足立眞理子（教授）

文教育学部 ジェンダー2 グローバル経済とジェンダー（後期）

文教育学部 グローバル化と労働（1学期）

申琪榮（准教授）

比較ジェンダー論（前期／後期）

《英語によるサマープログラム2016》

仙波由加里（特任リサーチフェロー）

Course 1: Gender in Japan and the Globalizing World（担当代表：小林誠・本学教授）

・ Reproductive Medicine and Gender（7月18日）

7.

学術成果の発信

- 1) 学術雑誌『ジェンダー研究』
- 2) プロジェクト報告書
IGS Project Series による
成果刊行

1) 学術雑誌『ジェンダー研究』

■『ジェンダー研究』概要

ジェンダー学の先端成果、知の構築

お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報		
ジェンダー研究 第20号 <i>Journal of Gender Studies</i> (通巻37号)		
ISSN 1345-0638		
■特集「ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働——社会的再生産はいかに行われるのか？」 序——新自由主義と社会的再生産のジェンダー分析	足立眞理子	1
Changing Norms of Social Reproduction in an Age of Austerity	Susan HIMMELWEIT	5
ネオリベリズムとジェンダー	上野千鶴子	21
新自由主義とフェミニズム——女性主体の視点から	伊田久美子	35
■特別寄稿 「八百比丘尼の証」	美 穂子	45
■投稿論文 日本企業で働く女性外国人社員のジェンダーとキャリア形成 ——元留学者で文系総合職社員の場合	鈴木 伸子	55
「男性不妊」という経験——産後抑鬱を受けた夫たちの語りから	竹家 一英	73
産後・産前における「結婚」について	佐々木清実	87
■書評 小杉礼子・宮本あち子編著 「下層化する女性たち——労働と家庭からの排除と闘争」	林 亜美	101
徐竹染著 姜穂子・高橋梓訳 「家境のモダンガール——消費・労働・女性から見た植民地近代」	尹 智旭	106
David J. Getsoy著 Abstract Bodies: Sixties Sculpture in the Expanded Field of Gender	宮内 裕英	109
Naomori Kodate and Kazuko Kodate著 Japanese Women in Science and Engineering: History and Policy Change	新山 英和	113
Ray Spangenberg and Diane Kirk Moser著 大坪久子、田中順子、土本幸、萬井香一訳 「ノール賞学者 パーバ・マクリントックの生涯——語り伝子の発見」	森 義仁	117
山口智美、熊川元一、テッサ・モリス・スズキ、小山エミ著 「海を渡る「型衣装」問題——右派の「歴史戦」を問う」	甲 梨英	121
■ジェンダー研究所情報(平成28年度)		125
■編集方針・投稿規程		140
■編集後記		148

2017年3月
お茶の水女子大学ジェンダー研究所

本研究所在が発行しているレフェリー付きの学術雑誌。編集長は第11号より今年度第20号まで足立眞理子 IGS 教授が務めた。前身は『女性文化資料館報』（1979～1987年）、『女性文化研究センター年報』（1988～1996年）。1998年3月に『年報ジェンダー研究』第1号を創刊以後、年刊。

本誌は寄稿論文、投稿論文、研究ノート、書評、ジェンダー研究所の事業報告、彙報などから構成される。投稿資格は本学教職員と現役学生、卒業生、研究所関係者に限定されるが、外部審査を経た投稿論文、書評は非常に高い質を誇っており、巻頭に掲載される世界第一級のジェンダー学研究者による寄稿論文も特筆に値する。

■『ジェンダー研究 20 号』（2017 年 3 月刊行）の概要

**特集：「ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働——社会的再生
産はいかに行われるのか？」**

特別寄稿：『八百比丘尼の話』

20 号の特集は 2015 年 12 月に本学で開催された IGS 国際シンポジウムの議論が基となっている。「序——新自由主義と社会的再生産のジェンダー分析」（足立真理子）、「Changing Norms of Social Reproduction in an Age of Austerity」(Susan Himmelweit)、「ネオリベラリズムとジェンダー」(上野千鶴子)、「新自由主義とフェミニズム——女性主体の視点から」(伊田久美子) の 4 本を収録。ジェンダー、フェミニズム視座からの新自由主義批判と考察である。

また、本誌では初の試みとして、特別寄稿に、作家姜信子氏による『八百比丘尼の話』を掲載した。姜氏は IGS セミナー「訳者と語る『京城のモダンガール——消費・労働・女性から見た植民地近代』」にて講演者を務めた。

投稿論文は、今年は厳正な審査を経て、3 本が掲載された。「日本企業で働く女性外国人社員のジェンダーとキャリア形成」(鈴木)、「『男性不妊』という経験」(竹家)、「秦代・漢初における〈婚姻〉について」(佐々木)と、日本語教育学と女子留学生の就職事情、男性不妊とジェンダーに関する社会学的分析、中国古代史におけるジェンダーという様々な専門領域の研究者による既存の研究枠組みへの挑戦であり、精鋭な議論が展開されている。書評は投稿 4 件(林氏、尹氏、宮内氏、横山氏)と、編集委員を務める本学教員による寄稿 2 件(森氏、申氏)を収録した。人文科学・社会科学・自然科学領域に至るまでの幅広いフェミニズム、ジェンダー学の先端動向を紹介することができた。

記念すべき 20 号にふさわしく、多彩な執筆陣によって、最先端のジェンダー論が提供されている。

『ジェンダー研究』第 20 号（2017 年 3 月刊行）目次

■特集「ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働——社会的再生産はいかに行われるのか？」

序——新自由主義と社会的再生産のジェンダー分析	足立真理子	1
Changing Norms of Social Reproduction in an Age of Austerity	Susan HIMMELWEIT	5
ネオリベラリズムとジェンダー	上野千鶴子	21
新自由主義とフェミニズム——女性主体の視点から	伊田久美子	35

■特別寄稿

『八百比丘尼の話』	姜 信子	45
-----------	------	----

■投稿論文

日本企業で働く女性外国人社員のジェンダーとキャリア形成——元留学生で文系総合職社員の場合	鈴木 伸子	55
「男性不妊」という経験——泌尿器科を受診した夫たちの語りから	竹家 一美	73
秦代・漢初における〈婚姻〉について	佐々木満実	87

■ 書評

小杉礼子・宮本みち子編著 『下層化する女性たち—労働と家庭からの排除と貧困』	林 亜美	101
徐智瑛著 姜信子・高橋梓訳 『京城のモダンガール—消費・労働・女性から見た植民地近代』	尹 智炤 (Yoon Jiso)	105
David J. Getsy 著 <i>Abstract Bodies: Sixties Sculpture in the Expanded Field of Gender</i>	宮内 裕美	109
Naonori Kodate and Kashiko Kodate 著 <i>Japanese Women in Science and Engineering: History and Policy Change</i>	横山 美和	113
Ray Spangenburg and Diane Kit Moser 著 大坪久子、田中順子、土本卓、福井希一訳 『ノーベル賞学者 バーバラ・マクリントックの生涯—動く遺伝子の発見』	森 義仁	117
山口智美、能川元一、テッサ・モーリス-スズキ、小山エミ著 『海を渡る「慰安婦」問題—右派の「歴史戦」を問う』	申 琪榮	121
■ ジェンダー研究所彙報(平成 28 年度)		125
■ 編集方針・投稿規程		146
■ 編集後記		148

《第 20 号編集委員会》

編集委員長	足立真理子 (ジェンダー研究所教授)
編集委員	石井クンツ昌子 (ジェンダー研究所所長、基幹研究院人間科学系教授)
	申琪榮 (ジェンダー研究所准教授)
	天野知香 (基幹研究院文化科学系教授)
	荒木美奈子 (基幹研究院人間科学系 准教授)
	水野勲 (基幹研究院人間科学系教授)
	森義仁 (基幹研究院自然科学系教授)
編集事務局	臺丸谷美幸 (ジェンダー研究所特任リサーチフェロー)

2) プロジェクト報告書 IGS Project Series による成果刊行

2016 年度は、本研究所成果発信シリーズ IGS Project Series を 9 冊刊行した。内訳は、IGS セミナー成果 2 冊、国際シンポジウム成果 3 冊、特別招聘教授プロジェクト成果 4 冊である。ウェブサイト上でのオンライン公開も順次進めている。引き続き、早期の事業成果公開を心がけることに加え、日英両言語での編集巻を増やし、国際的な発信を強化することに努めたい。

IGS Project Series 3 特別招聘教授プロジェクト特集 マリー・ピコーネ



【目次】

- マリー・ピコーネ特別招聘教授プロジェクト実施概要
- 研究プロジェクト「1980年代以降の日本における水子供養」
研究プロジェクト報告書
- 国際シンポジウム「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？」
国際シンポジウム概要
- シンポジウム研究発表「胎児の死と中絶をめぐるジェンダー化の諸相」
「IGS 通信」掲載国際シンポジウム開催報告
- IGS セミナー「“センシティブ”なテーマに関わる面接調査と質問紙調査」
IGS セミナー講義

IGS Project Series 4 特別招聘教授プロジェクト特集 アン・ウォルソール



【目次】

- アン・ウォルソール特別招聘教授プロジェクト実施概要
- 研究プロジェクト報告
信仰、政治、愛情：平田篤胤一家の社会史
- IGS セミナー
いい兄貴ーわるい弟：Gender Dynamics in an Early Modern Family
- 国際シンポジウム
科学と工学を目指す女性へ

IGS Project Series 5 国際シンポジウム 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較



【目次】

- 実施概要報告
- シンポジウムの記録
研究報告
小野坂優子
仕事と家庭と幸福感:日本とノルウェーの視点から
根本宮美子
日本における未婚男性の幸福と家族の変化
- ディスカッサントによるコメント
コメント 1: スーザン・D・ハロウェイ
コメント 2: 石井クンツ昌子
- 質疑応答
「IGS 通信」掲載開催報告
資料: 研究報告スライド
小野坂優子「仕事と家庭と幸福感:日本とノルウェーの視点から」
根本宮美子「日本における未婚男性の幸福と家族の変化」

IGS Project Series 6 特別招聘教授プロジェクト特集 スーザン・D・ハロウェイ



【目次】

- スーザン・D・ハロウェイ特別招聘教授プロジェクト実施概要
- 研究プロジェクト「日本の家族生活と幼児教育・保育の背景の変化」
研究プロジェクト報告書
- 国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較」
国際シンポジウム概要
ディスカッサントコメント
「IGS 通信」掲載国際シンポジウム開催報告
- IGS セミナー「現代日本における家庭と学校教育：外国人研究者の視点と研究」
IGS セミナー講義（スライド）
「IGS 通信」掲載セミナー開催報告

IGS Project Series 7 国際シンポジウム 女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考



【目次】

- 実施概要報告
- シンポジウムの記録
趣旨説明 エリカ・バッフェッリ
基調講演 アートリー・セン「女性とラディカルな運動」
ディスカッサントによるコメント
コメント1：松尾瑞穂「Prof. Atreyee Sen の議論を受けて」
コメント2：小川真理子「日本における DV の加害者と被害者」
- 質疑応答
「IGS 通信」掲載開催報告

IGS Project Series 8 特別招聘教授プロジェクト特集 エリカ・バッフェッリ



【目次】

- 日本語版
- エリカ・バッフェッリ特別招聘教授プロジェクト実施概要
- 活動報告書 エリカ・バッフェッリ
- 国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考」
国際シンポジウム概要報告
国際シンポジウム趣旨説明 エリカ・バッフェッリ
国際シンポジウム開催報告
- IGS セミナー「立ち位置を考える：日本の新宗教フィールドワークからの考察」
IGS セミナー講義スライド
IGS セミナー開催報告
- 英語版
- Erica Baffelli Specially Appointed Professor Project Summary
- Activity Report Erica Baffelli
- International Symposium 'Women, Religion and Violence in International Perspective'
Symposium Summary
Symposium Introduction Erica Baffelli
Symposium Report
- IGS Seminar 'Finding Your Place'
Seminar Slides
Seminar Report

IGS Project Series 9 IGS Seminar (Reproductive Area) 2016 The Ethics of Prenatal Testing



- 【目次】
- Seminar Details
- Seminar Time Table
- Forward
- Presentations
 - Catherine Mills "Gender, Disability and Bodily Norms in Prenatal Testing and Selective Termination of Pregnancy"
 - Kaori Muto "Ethics and Governance of Nin-invasive Prenatal Testing in Japan"
 - Yasushi Ishida "Comments"
- Comments from Audiences
- Slides for presentation
- Poster

IGS Project Series 10 国際シンポジウム 金融化、雇用、ジェンダー不平等



- 【目次】
- Seminar Details
- Forward
- Opening Remarks Hiroaki Itai
- Abstracts
 - Paper Chandrasekhar 'Finance and Instability in Asia'
 - Comments Makoto Itoh
- Closing Remarks Mariko Adachi
- Symposium Report on IGS website
- Power Point Slides
 - Jayati Ghosh 'Economic crises and women's work'
 - Chandrasekhar 'Finance and Instability in Asia'

IGS Project Series 11 IGS セミナー報告書

訳者と語る『京城のモダンガール—消費・労働・女性から見た植民地近代』



- 【目次】
- はじめに
- 午前の部 講演者特別寄稿 (高橋)
- 午後の部 書評会
 - 第1章 (板橋)
 - 第2章 (磯山)
 - 第3章 (臺丸谷)
 - 第4章 (尹)
 - 第5章 (土野)
- 全体書評① (吉良)
- 全体書評② (崔)
- 【付録】 当日の記録

8.

文献収集・資料整理・
公開

▶ ジェンダー研究所収蔵文献・資料概要

40年以上にわたって続けられている女性に関する文献・資料の収集

ジェンダー研究所は、文部省令の定める国立大学の学内共同教育研究施設として、1975年に本学に設置された「女性文化資料館」を始祖としている。

「女性文化資料館」は、日本の教育機関の中で初めて、女性の文化的・社会的活動、その特性、風俗・習慣及び女子教育など、女性に関する文献や資料を広く収集し、研究者の共同利用に供することを目的とする資料館であった。

この資料館が発展・改組を重ね、今日のジェンダー研究所へと至る40年の間、女性学研究、ジェンダー研究の文献・資料の収集・蓄積は、絶え間なく続けられてきた。その成果として、2016年度現在、ジェンダー研究所は、書籍約25,000冊、雑誌約340種という、女性に関する膨大な知の集積ともいえる蔵書を有するに至っている。これらの蔵書は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外からOPAC（Online Public Access Catalog）で検索することができ、手続きを経れば学外の者でも利用可能である。

■附属図書館専用書架での蔵書貸出・閲覧



《図書館利用案内》

○開館日

・月～金 8:45～21:00

（授業のない日は17:00まで）

・土 9:00～17:00

（夏・冬・春期休業期間中は閉館）

・日 12:00～17:00

（毎週ではありません。図書館カレンダーでご確認ください）

○閉館日

日曜日、国民の祝日、

夏・冬・春期休業期間中の土曜日、蔵書点検、大学夏季一斉休業日、年末年始、
徽音祭当日、創立記念日、入学試験日当日、卒業式等

■お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでの資料公開

<http://archives.cf.ocha.ac.jp/>

お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでは、本学を卒業し、女性の先駆的研究者として活躍した保井コノ、黒田チカ、湯浅年子、辻村みちよの研究業績をまとめた資料目録などが公開されている。

これらの資料は、女性文化資料館時代の 1981 年の文部省特定研究「女性高等教育とその成果に関する総合的研究」における 2 つのプロジェクト、「III 婦人研究者の活動状況に関する調査研究—自然科学分野を中心に—」「IV 女性文化に関する文献・資料の収集及び調査研究」の中で、それぞれのご遺族の協力を得て収集した遺品のうち、研究関連のものを整理し、長い時間を掛けて目録化したものである。(デジタルアーカイブズ化は 2007～2009 年に実施)



■2016 年度 寄贈図書・資料 (敬称略)

2016 年度は、以下の書籍・資料の寄贈を受けた。[寄贈者名『書名』(著者名)]

仙波由加里『諸外国の生殖補助医療における法規制の時代的変遷に関する研究：平成 27 年度厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業』(日比野由利編)

早稲田大学ジェンダー研究所『ジェンダー研究／教育の深化のために：早稲田からの発信』(小林富久子、村田晶子、弓削尚子編)

昭和女子大学女性文化研究所『女性とキャリアデザイン 昭和女子大学女性文化研究叢書 第 10』(昭和女子大学女性文化研究所編)

ジェンダー研究所『IGS Project Series 2. はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか』

国枝たか子『世界のダンス 2 百ヶ国を結ぶ舞踊文化』(国枝たか子編)

北海道大学大学文書館『北海道大学大学文書館年報』(北海道大学大学文書館編)

ジェンダー研究所『私たちは忘れない朝鮮人従軍慰安婦：在日同胞女性からみた従軍慰安婦』(従軍慰安婦問題を考える在日同胞女性の会 (仮称) 翻訳編集)、

ジェンダー研究所『韓国女性問題資料集 8 隠ぺいされた歴史に今こそ光を！「朝鮮人従軍慰安婦」』(在日韓国民民主女性会翻訳)、

フェリス女学院『フェリス女学院 150 年史資料集 第 4 集 加藤豊世・布施淡往復書簡：明治期のある青春の記録』(フェリス女学院 150 年史編纂委員会編)

ジェンダー研究所『山川菊栄が描いた歴史：山川菊栄生誕 125 周年記念シンポジウム記録集』(山川菊栄記念会編)

ジェンダー研究所『アジアにおける再生産領域のグローバル化とジェンダー再配置』(国際移動とジェンダー研究会編)

9.

ウェブサイトでの
情報発信

▶ジェンダー研究所ウェブサイトでの情報発信 事業活動全般についての最新情報掲載・配信

2016年度もウェブサイトによる情報発信の強化を進めた。サイト上では、研究所基本情報(設立目的、沿革、組織、アクセス、問合せ案内)や、事業内容および研究プロジェクトの一覧など、ジェンダー研究所活動全般にわたる情報を日英両言語で掲載している。また、ツイッターを連動させて最新情報の配信をしている。特に力を入れて発信しているのは、シンポジウムやセミナーの開催案内とその実施報告である。刊行物のオンライン公開も進めており、研究所事業成果を、より早く、より広く、インターネットを通じて国内外の社会へ還元できるよう努めている。

■日本語ウェブサイト <http://www2.igs.ocha.ac.jp/>

IGS Institute for Gender Studies Ochanomizu University

お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

English 日本語 国際女子大学

Home IGSについて 事業内容 イベント IGS報告 刊行物 アクセス リンク お問い合わせ

Neoliberalism, Policy, and Labor from a Gender Perspective: How do we perform social reproduction?

2016.07.10 7/29 IGSセミナー「読者と語る『家産のモダンガール』」

2016.07.04 『ジェンダー研究』第20号(2016年度)投稿論文募集

2016.06.24 6/30 IGSセミナー「ポスト新自由主義の未来を想像する：…」

2016.06.22 7/27 IGSセミナー「同性カップルの家族づくりとAID」

2016.06.08 6/8 IGSセミナー「AID出生者のトナー供給を促進する権利」

2016.06.06 6/16 【学内向け】IGS Seminar "Family and Schooling in Contemporary Japan"

2016.05.31 6/9 国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較」

■英語ウェブサイト <http://www2.igs.ocha.ac.jp/en/>

IGS Institute for Gender Studies OCHANOMIZU UNIVERSITY

Japanese 英語(2014)

Home About IGS Research Projects Events IGS Report Publications Access Links Contact

Neoliberalism, Policy, and Labor from a Gender Perspective: How do we perform social reproduction?

Institute for Gender Studies

News & Events

2016.06.24 30 JUN, IGS Seminar: "Imagining a Postneoliberal Future—"

2016.05.31 9 JUN, Symposium "Family, Work, and Well-Being in International—"

2016.04.04 11 APR, Symposium: "Financialization, Employment, and Gender Inequality"

2016.01.18 18 JAN, Symposium: "Women in Science and Engineering"

2015.12.24 IGS closed during the Christmas and New Year period

2015.12.01 Symposium: Neoliberalism, Policy, and Labor from a Gender Perspective

2015.11.18 Seminar: Catherine Mills "Choice and Consent in Prenatal Testing"

○シンポジウム・セミナー開催案内、実施報告（イベント、IGS通信）、ツイッター



○刊行物紹介・閲読 「ジェンダー研究」「IGS Project Series」



10. 社会贡献

▶社会貢献概要

男女共同参画社会の実現に向けた研究成果の社会還元

ジェンダー研究所では、一般公開でのシンポジウム・セミナー開催や成果刊行などで、研究教育事業成果の社会還元を進めているほか、所属研究者は、行政機関等が開催する一般向け男女共同参画関連講座の講師を務めるなど、男女共同参画分野での社会貢献に取り組んでいる。また、高等学校生徒のジェンダーをテーマとする校外学習活動に協力するなど、若年世代のジェンダー課題理解の推進に努めている。

■男女共同参画センター等での講演

石井クンツ昌子（所長）

- ・ファザーリングジャパン「男性の育休取得の意義：ポジティブ社会学の見地から」(2016年5月12日)
- ・葛飾区区民大学「ママのための女性学：子育て中でも自分らしく」(2016年5月20日)
- ・鎌倉市議会「地域から考える男女共同参画社会の現在と近未来の課題」(2016年6月1日)
- ・福井県みらいきりプログラム「ワーク・ライフ・バランス」(2016年7月22日)
- ・日仏会館「父親の育児・子育て参加：日本の場合」(2016年11月24日)
- ・葛飾区区民大学「ママのための女性学：子育て中でも自分らしく」(2017年1月19日)
- ・浩志会「男女共同参画社会の現在と近未来の課題：女性の社会進出と男性の家庭内役割に注目して」(2017年3月22日)



福井県「ワーク・ライフ・バランス」
(<http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/joseikatuyaku/ladygo/f-net9-2.html>)

申瑛榮（准教授）

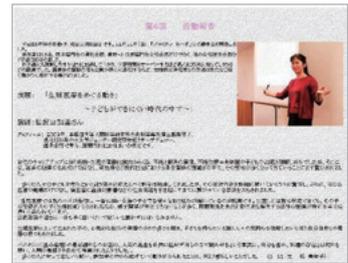
- ・女性参政権 70 周年記念シンポジウム「女性を議会へ：本気で増やす！」第 2 セッション「東アジアの躍進に学ぶ：韓国・台湾の女性議員はなぜ増えたのか」、企画・モデレータ、於：上智大学（2016年4月10日）
- ・北海道教育大学函館校第 2 回ジェンダーカフェ講演「ジェンダー・クォータ：21 世紀型女性参政権の実現のために」、於：北海道教育大学函館校（2016年6月28日）
- ・くるめフォーラム 2016 講演「女性議員を増やそう：ジェンダー・クォータ制を目指して」於：久留米市男女平等推進センター（2016年10月1日）
- ・アジア女性資料センター秋の連続セミナー「韓国初の女性大統領：誕生と迷走」、於：上智大学（2016年11月22日）
- ・選択的夫婦別姓を実現する会・富山記念講演会「2005 年韓国家族法改正を振り返る：保守の反対論をどう乗り越えたのか?」、於：富山市サンフォルテ 307 研修室（2017年3月12日）



北海道教育大学函館校第 2 回ジェンダーカフェポスター

仙波由加里（特任リサーチフェロー）

- ・第 34 回すまいる親の会・AID で子を持つ親および AID を検討するカップルのためのセミナー講演「海外の DI 事情：ドナーの匿名性はもう保障できない」（2016 年 5 月 23 日）
- ・厚木稲門会レディースの会講演「生殖医療をめぐる動き：子どもができていく時代の中で」（2016 年 11 月 11 日）



厚木稲門レディースの会
(<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~atoumon/lady/dai6kai/dai6kaikatsudouhoukoku.html>)

■海外講演

申琪榮（准教授）

- ・韓国ソウル大学日本研究所「共同企画研究シンポジウム：脱戦後思想と感性」発表「グローバル視点からみた「日本軍慰安婦」問題：日韓関係の両者枠組みを超えて」、於：ソウル大学日本研究所（2016 年 5 月 6 日）
- ・ソウル大学 SSK・日本研究所共催「日本の憲法改正論：何が問題でどこに進むのか」ドキュメンタリー映画『不思議なクニの憲法』上映会、企画・司会・討論者、於：韓国ソウル大学中央図書館（2017 年 2 月 16 日）
- ・韓国開発協力連帯ジェンダー分科委員会主催（お茶の水女子大学ジェンダー研究所共催）ドキュメンタリー映画『何を怖れる』上映会、企画・討論者、於：韓国性暴力相談所（2017 年 2 月 17 日）

■地方公共団体男女共同参画事業への参与

石井クンツ昌子（所長）

- ・福井県男女共同参画審議会会長

■校外学習活動への協力

- ・開智中学・高等学校の高校生ジェンダー研究所訪問学習（フィールドワーク「ジェンダー、性別とは何か」に関するインタビュー）対応。生物学的な性差と社会的な性差についての基礎知識を教授。担当：仙波由加里（特任リサーチフェロー）（2016 年 11 月 16 日）

■NPO 等事業協力

- ・『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう？』出版記念トークセッション」共催（2016 年 9 月 19 日）
（NHK テレビニュース、同ウェブサイト、および弁護士ドットコムにて報道）
（本報告書 66～68 頁参照）



弁護士ドットコム
(https://www.bengo4.com/internet/n_5129/)

資料

- ① 構成メンバー
- ② 研究プロジェクト一覧
- ③ 協力研究者一覧
- ④ 国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧
- ⑤ 国内外共同研究・研究交流一覧
- ⑥ 国立大学法人お茶の水女子大学
ジェンダー研究所規則
- ⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学
特別招聘教授に関する規則
- ⑧ 『ジェンダー研究』編集方針・
投稿規程
- ⑨ ジェンダー研究所ウェブサイト
プライバシー・ポリシー

【資料】①構成メンバー

【所長】

石井クンツ昌子(基幹研究院人間科学系・生活科学部教授)

《任期》

2015(H27)年10月1日～2017(H29)年3月31日

【専任教員】

足立真理子(ジェンダー研究所教授)

2015(H27)年4月1日～

申琪榮(ジェンダー研究所准教授)

2015(H27)年4月1日～

【研究員】

小玉亮子(基幹研究院人間科学系・生活科学部教授)

2015(H27)年7月1日～2017(H29)年3月31日

棚橋訓(基幹研究院人間科学系・文教育学部教授)

2015(H27)年7月1日～2017(H29)年3月31日

斎藤悦子(基幹研究院人間科学系・生活科学部准教授)

2015(H27)年7月1日～2017(H29)年3月31日

【特別招聘教授】

スーザン・ハロウェイ(カリフォルニア大学バークレー校・教授)

2016(H28)年5月22日～2016(H28)年6月29日

エリカ・バッフェツリ(マンチェスター大学・准教授)

2016(H28)年9月20日～2016(H28)年12月20日

ラウラ・ネンツィ(テネシー大学・教授)

2016(H28)年10月3日～2017(H29)年7月31日

【日本学術振興会外国人特別研究員】

Yoon Jiso[ユン ジソ](カンザス大学准教授)

2015(H27)年8月10日～2017(H29)年6月10日

【特任講師】

板井広明

2016(H28)年4月1日～2017(H29)年3月31日

【特任リサーチフェロー】

仙波由加里

2016(H28)年4月1日～2017(H29)年3月31日

臺丸谷美幸

2016(H28)年4月1日～2017(H29)年3月31日

吉原公美

2016(H28)年4月1日～2017(H29)年3月31日

【アカデミック・アシスタント】

梅田由紀子

2016(H28)年4月1日～2017(H29)年3月31日

滝美香

2016(H28)年4月1日～2017(H29)年3月31日

稲垣明子

2016(H28)年4月1日～2017(H29)年3月31日

和田容子

2016(H28)年4月1日～2017(H29)年3月31日



所長 石井クンツ 昌子

基幹研究院人間科学系・教授

生活科学部生活社会科学講座

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野： 家族社会学、ジェンダー社会学、社会心理学

所属学会 日本家族社会学会(会長)
日本学術会議 連携会員／統計データアーカイブ分科会(副会長)
日本社会学会(理事)／社会学教育委員会(副委員長)／国際発信強化特別委員会
日本家政学会家族関係部会(役員)／(編集委員)
福井県男女共同参画審議会(会長)
National Council on Family Relations

主な業績

《著書・論文・報告書》

- 2017 「『育メン』とは何か：父親の育児参加の意味を探る」、小崎恭弘、松本しのぶ、田辺昌吾(編)『父親の子育てを支援する』(別冊発達)ミネルヴァ書房
- 2017 「家族」、松本悠子(編)『アメリカ文化事典』丸善
- 2017 「地域の中の男女協働」*The Community*, 158:12-55.
- 2016 編著『男性の育児参加を促進する要因：育児休業取得者へのヒアリングから見えてくること』一般財団法人 第一生命財団

《講演・報告等》

- 2016 「男性の育休取得の意義：ポジティブ社会学の見地から」、ファザーリングジャパン、2016年5月12日
- 2016 葛飾区区民大学「ママのための女性学：子育て中でも自分らしく」、2016年5月20日
- 2016 鎌倉市議会「地域から考える男女共同参画社会の現在と近未来の課題」2016年6月1日
- 2016 福井県みらいいきりプログラム「ワーク・ライフ・バランス」、2016年7月22日
- 2016 基調講演「Hope and Happiness in Mothering and Fathering」、世界家政学会大会、テジュン(韓国)、2016年8月1日
- 2016 「統計からみた父親の育児休業」、日本家族社会学会大会、2016年9月10日
- 2016 Ji Young Kim, Masako Ishii-Kuntz and Suping Huang, “Changes in Population Structure and Single-Person Households”. In the International Conference “Hope and Despair in Three East Asian Cities: Generations and Classes in Shanghai, Seoul, and Tokyo”. Institute for Social Development and Policy Research, Seoul National University. 2016.10.1
- 2016 基調講演「Parenting Education in Home Economics: What can “positive” approaches do?」、韓国家政教育学会、2016年11月5日
- 2016 「父親の育児・子育て参加：日本の場合」、日仏会館、2016年11月24日
- 2017 葛飾区区民大学「ママのための女性学：子育て中でも自分らしく」、2017年1月19日
- 2017 浩志会「男女共同参画社会の現在と近未来の課題：女性の社会進出と男性の家庭内役割に注目して」2017年3月22日

《競争的資金》

- ・ 科学研究費基盤研究 A「IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」、2014～2018 年度、研究代表者



専任教員(教授) 足立 真理子

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 経済理論、国際経済学、フェミニスト経済学

所属学会等: 日本学術会議連携会員(経済学部会)

経済理論学会(幹事・奨励賞選考委員会委員長)

経済学史学会

日本フェミニスト経済学会(幹事)

国際フェミニスト経済学会

大阪府立大学人間科学研究科女性学研究センター学外研究員

主な業績

《雑誌・論叢》

- 2017 「序——新自由主義と社会的再生産のジェンダー分析」『ジェンダー研究』、第20号(ジェンダー研究所年報 通巻37号)、1-3頁
- 2016 「フェミニスト経済学の現在: 「金融化とジェンダー」をめぐる方法的考察」、『季刊 経済理論』 経済理論学会編 53巻(3), 7-22, 桜井書店
- 2016 「資産、地租以及女性——対地租資本主義的女権視角分析」、孟捷編 『政治経済学報(第7巻)』中国社会科学院社会科学文献出版社

《シンポジウム報告等》

- 2016 シンポジウム「イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて」、東京大学東洋文化研究所、第三部「共同研究への期待」コメント、2016年6月11日
- 2016 IGS セミナー「訳者と語る『京城のモダンガール』」、お茶の水女子大学ジェンダー研究所(IGS)、ディスカッサント、2016年7月29日
- 2016 「お茶の水女子大学におけるジェンダー研究の軌跡: 今ここで、問うこと・問われること」、国際ジェンダー学会 2016年大会シンポジウム「大学におけるジェンダー研究センターの来し方・行く末を考える」、一橋大学、2016年9月10日
- 2016 国際シンポジウム「移住・家事労働者の権利保障とILO189号条約: アジア、ヨーロッパ、アメリカ、そして日本」、セッション4「Case of Japan」モデレータ、一橋大学、2016年12月10~11日
- 2017 IGS セミナー「日本における女性と経済学」、お茶の水女子大学ジェンダー研究所(IGS)、ディスカッサント、2017年2月22日
- 2017 「銘仙と『入れ子状の近代』: 逸脱への欲望」、国際シンポジウム「モダン再考: 戦間期日本の都市・身体・ジェンダー」、ストラスブール大学、2017年3月25日



専任教員(准教授) 申 琪榮

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース
生活科学部生活社会科学講座

専門分野: 比較政治学(東アジア)、ジェンダーと政治、フェミニズム理論、最近の研究分野は、政治分野におけるジェンダー・クォータと代表性、比較女性運動、ジェンダー主流化政策など。

所属学会等 International Political Science Association
American Political Science Association
European Consortium for Political Research
International Feminist Economics Association
日本政治学会(分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」)
日本比較政治学会
日本フェミニスト経済学会
日本社会政策学会
ソウル大学日本研究所『日本批評』海外編集委員
韓国ジェンダー政治研究所研究委員
ソウル大学 SSK (Social Science Korea) 東アジア地域秩序研究会共同研究員

主な業績

《論文・共著・その他》

- 2016 “Gender Quota and Candidate Selection Processes in South Korean Political Parties,” *Pacific Affairs: An International Review of Asia and the Pacific*, Vol. 89, No. 2, June, pp. 345-369 (with Hyunji Lee, SSCI)
DOI: <http://dx.doi.org/10.5509/2016892345>
- 2016 「글로벌 시각에서 본 일본군 ‘위안부’ 문제: 한일관계의 양자적 틀을 넘어서(Rethinking the Japanese Military ‘Comfort Women’ Issue from a Global Perspective: Beyond Korea-Japan Bilateral Relations), 『일본비평: Korean Journal of Japanese Studies』15 호, pp. 250-279.
- 2016 「‘개인적인 것이 정치적인 것이다’: 선택적 부부별성(夫婦別姓)과 이름의 정치학 (‘The Personal is Political’: Fufubessei and the Politics of Women’s Names), 권인숙, 김효진, 지은숙 편, 『젠더와 일본사회 (Gender and Japanese Society)』, 한울출판사, pp. 64-99.
- 2016 「ヒラリー・クリントンの敗北をどう理解すべきか」『女たちの21世紀』88号、23-25頁
- 2016 「【シンポジウム】国際社会のなかの「慰安婦」問題: 指定質問」『女性・戦争・人権』14号 31-32頁
- 2017 書評『海を渡る「慰安婦」問題—右派の「歴史戦」を問う』、『ジェンダー研究』第20号、お茶の水女子大学ジェンダー研究所、155-157頁

《学会報告》

- 2016 “Kantian Peace Model on the Test: The Revision of Japan’s Peace Constitution,” Association for Asian Studies in Asia, June 24-27, Kyoto, Japan (with Eun-jeong Cho)

- 2016 “Gender, Representation, and Quality of Democracy,” International Political Science Association, July 23-28, Poznan, Poland
- 2016 “Challenges and New Strategies of Women’s Local Party in Japan: What Does It Represent and How Does It Sustain Its Electoral Success?” American Political Science Association, September 1-4, Philadelphia, USA

《公開講演・シンポジウム報告》

- 2016 女性参政権 70 周年記念シンポジウム「女性を議会へ 本気で増やす！」第 2 セッション「東アジアの躍進に学ぶ：韓国・台湾の女性議員はなぜ増えたのか」企画・モデレータ、上智大学（2016 年 4 月 10 日）
- 2016 韓国ソウル大学日本研究所「共同企画研究シンポジウム：脱戦後思想と感性」発表「グローバル視点からみた「日本軍慰安婦」問題：日韓関係の両者枠組みを超えて」、ソウル大学日本研究所（2016 年 5 月 6 日）
- 2016 2016 年第 1 回 GDRep 政党行動と政治制度セミナー「持続可能な女性の政治的代表性は得られるのか？：2016 年の韓国総選挙とクオータ制の 15 年」、上智大学（2016 年 6 月 22 日）
- 2016 北海道教育大学函館校 第2回ジェンダーカフェ講演「ジェンダー・クオータ：21 世紀型女性参政権の実現のために」、北海道教育大学函館校（2016 年 6 月 28 日）
- 2016 くるめフォーラム 2016 講演「女性議員を増やそう：ジェンダー・クオータ制を目指して」、久留米市男女平等推進センター（2016 年 10 月 1 日）
- 2016 アジア女性資料センター秋の連続セミナー「韓国初の女性大統領：誕生と迷走」、上智大学（2016 年 11 月 22 日）
- 2016 選択的夫婦別姓を実現する会・富山 記念講演会「2005 年韓国家族法改正を振り返る：保守の反対論をどう乗り越えたのか？」、富山市サンフォルテ 307 研修室（2017 年 3 月 12 日）

《競争的資金（国内・海外）》

- ・ 科学研究費基盤研究 C「女性大統領と女性の政治的代表性：韓国の朴槿恵を中心に」、2014～2017 年度、研究代表者
- ・ 科学研究費基盤研究 C「女性の政治参画：制度的・社会的要因のサーベイ分析」研究代表者：三浦まり（上智大学）、2015～2017 年度、研究分担者
- ・ 科学研究費特別研究員奨励費「日本の地方政治における女性の政治的代表制の研究」、2015.10.9～2017.3.31、受入研究者（外国人特別研究員：Yoon Jiso）
- ・ 韓国研究財団 一般共同研究「議会内政治的代表性の性差に関する公式・非公式的制度要因研究：韓国、日本、台湾比較分析」、2016.11～2018.10 年度、研究分担者
- ・ Social Science Korea. “East Asian International Relations Theory” 研究代表者：Jae Sung Chun (Seoul National Univeristy)、2015～2018 年度、研究分担者



特任講師 板井 広明

専門分野: 社会思想史、経済学史、食の倫理とジェンダー

所属学会: 経済学史学会(編集委員)
日本イギリス哲学会(幹事)
社会思想史学会
政治思想学会
日本フェミニスト経済学会
日本有機農業学会
日本経済理論学会

【担当業務】

- ・ 研究プロジェクト「食の倫理と功利主義:食をめぐる規範・実践・ジェンダー」(20 頁参照)
- ・ 研究プロジェクト「利己心の系譜学」(21 頁参照)
- ・ 研究プロジェクト「リベラル・フェミニズムの再検討」(36 頁参照)
- ・ 国際教育プログラム「AIT ワークショップ」(128～133 頁参照)
- ・ 大学院講義科目「国際社会ジェンダー論」演習(128～133 頁参照)
- ・ 国際シンポジウム「金融化、雇用、ジェンダー不平等」コーディネーター・司会・運営(50～52 頁参照)
- ・ 国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?」運営統括(62～64 頁参照)
- ・ IGS セミナー「日本における女性と経済学」企画・コーディネーター・司会・運営(93～94 頁参照)
- ・ IPS 10『国際シンポジウム「金融化、雇用、ジェンダー不平等」』編著(141 頁参照)
- ・ IGS ランチョンセミナー企画運営(102 頁参照)
- ・ IGS 運営会議陪席メンバー
- ・ IGS-IGS 国際シンポジウム 2018 準備委員会メンバー(1、3 頁参照)
- ・ ウェブサイト・SNS・メールリスト等による情報発信・広報(148～149 頁参照)
- ・ シンポジウム・セミナー・研究会ポスター作成(46～49 頁参照)
- ・ 情報機器・ネットワーク管理

主な業績

《書籍》

2017 板井広明「功利主義と政府」、菊池・有賀・田上編『政府の政治理論:思想と実践』晃洋書房、119-134、
2017 年 3 月

《論文・共著》

2016 Hiroaki Itai, Akira Inoue and Satoshi Kodama, "Rethinking Nudge: Libertarian Paternalism and Classical Utilitarianism", *The Tocqueville Review/La revue Tocqueville*, University of Toronto Press, vol.37, no.1, 2016 June, 81-98.

《学会報告等》

2016 「古典的功利主義における多数と少数」、現代経済思想研究会(下関市立大学)、2016 年 12 月

2016 経済理論史研究会「初期ミルにおける女性論と文明社会論:「結婚論」を中心に」、討論者、2016 年 10 月 22 日

《競争的資金》

- ・ 科学研究費基盤研究 C「食の倫理と功利主義:食をめぐる規範・実践・ジェンダー」、2012～2016 年度、研究代表者
- ・ 科学研究費基盤研究 B「利己心の系譜学」研究代表者:太子堂正称(東洋大学)、2015～2017 年度、研究分担者



特任リサーチフェロー 仙波 由加里

専門分野: 倫理学、バイオエシックス、ジェンダー、
生殖技術に関連する倫理的問題

所属学会: 日本医学哲学・倫理学会(国際誌編集委員)

日本生命倫理学会

日本臨床倫理学会

日本生殖看護学会

European Society of Human Reproduction and Embryology (ESHRE)

【担当業務】

- ・研究プロジェクト「第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における多様な家族のあり方の受容との関係性」(30 頁参照)
- ・研究プロジェクト「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」(31 頁参照)
- ・研究プロジェクト「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」(32 頁参照)
- ・研究プロジェクト「人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究」(33 頁参照)
- ・IGS 関連研究会「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」(124 頁参照)
- ・IGS セミナー(生殖領域シリーズ)企画・コーディネーター・司会(69、75、83 頁参照)
- ・IPS 9 『The Ethics of Prenatal Testing』編著(141 頁参照)
- ・海外からの問合せ・訪問者対応

主な業績

《著書・論文》

2016 翻訳『わたしたちのかぞくのものごと』(eブック <http://www.efamart.de/en/books-for-children/>)、FamART (ドイツ)(原著: Petra Thorn and Lisa Herrmann-Green, with Illustration by Tiziana Rinald, *The Story of our Family*)

《学会報告・講演》

- 2016 講演「海外の DI 事情 ドナーの匿名性はもう保障できない」、第 34 回すまいる親の会・AID で子を持つ親および AID を検討するカップルのためのセミナー、2016 年 5 月 23 日
- 2016 「第三者の介入する生殖医療をとりまく倫理的・社会的問題」、東邦大学生命倫理シンポジウム講演、2016 年 7 月 2 日
- 2016 「第三者の介入する生殖医療をとりまく倫理的・社会的問題」、臨床死生学・倫理学研究会(東京大学・上廣死生学講座)講演、2016 年 7 月 13 日
- 2016 講演「生殖医療をめぐる動き:子どもができていく時代の中で」、厚木稲門会レディースの会、2016 年 11 月 11 日
- 2016 「精子ドナーの匿名性をめぐる問題:諸外国の状況を踏まえて」、第 28 回日本生命倫理学会年次大会報告(査読あり)(報告:仙波・久慈・清水)、2016 年 12 月 4 日
- 2017 「AID 児への Telling を前向きに検討・実施している親の課題及びニーズ」(報告:清水・久慈・仙波)、日本生殖心理カウンセリング学会、2017 年 2 月 18 日
- 2017 「生殖心理カウンセリングの倫理を考える」、生殖心理カウンセラー継続研修会コメンテータ、日本生殖心理カウンセリング学会、2017 年 2 月 18 日

《競争的資金》

- ・科学研究費基盤研究 C「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」、2016 年～2018 年、研究代表者:清水清美(城西国際大学)、研究分担者



特任リサーチフェロー 臺丸谷 美幸

専門分野: ジェンダー学、アメリカ史(アジア系アメリカ人史)、アメリカ研究

所属学会: 日本アメリカ学会 (JAAS)

日本移民学会

ジェンダー史学会

アジア系アメリカ人研究会 (AALA)

情報文化研究会 (AIC) (運営委員・学術誌編集担当)

Association for Asian American Studies (AAAS)

【担当業務】

- ・ 年報『ジェンダー研究』編集事務局 (136 頁参照)
- ・ 研究プロジェクト「朝鮮戦争期の日系アメリカ人兵士と市民権を巡る諸問題」(37 頁参照)
- ・ 研究プロジェクト「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争期の従軍経験:ジェンダーとエスニシティの視点から」(38 頁参照)
- ・ 研究プロジェクト「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視点から」(39 頁参照)
- ・ IGS 関連研究会「冷戦とジェンダー」研究会、代表・企画・運営・報告(79、95、124 頁参照)
- ・ IGS セミナー「ポスト新自由主義の未来を想像する」コーディネーター、運営(73 頁参照)
- ・ IGS セミナー「訳者と語る『京城のモダンガール』」および「書評会」企画・運営・報告(77 頁参照)
- ・ IPS 11「IGS セミナー報告書訳者と語る『京城のモダンガール:消費・労働・女性からみた植民地近代』」編著(141 頁参照)

主な業績

《学会発表・講演等》

- 2016 招待講演“Rethinking of Japanese American Resettlement and Military Service in 1950s: The Citizenship of a Californian Nisei Soldier in the Korean War in *From Internment, to Korea, to Solitude: Memoir of Robert M. Wada*” Asia-Pacific Studies Seminar at Osaka University, 2016 年 9 月 23 日
- 2016 招待講演「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍経験:ポストコロニアル的視座からの検討」、ポストコロニアル法理論研究会、第 4 回研究会、明治大学、2016 年 11 月 21 日
- 2016 「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経験と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視座から」、ジェンダー史学会第 13 回年次大会報告(査読あり)、武蔵大学、2016 年 12 月 18 日

《競争的資金》

- ・ 竹村和子フェミニズム基金助成、研究課題「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争の従軍経験:ジェンダーとエスニシティの視点から」2015 年度(2015.7~2016.6)、研究代表者
- ・ 科学研究費若手 B「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視点から」、2016~2018 年度、研究代表者



研究員 棚橋 訓

基幹研究院人間科学系・教授

文教育学部人間社会科学科教育科学コース

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 文化人類学、オセアニア地域研究、ジェンダー文化論、
セクシュアリティ研究

主な担当業務:

ジェンダー研究所運営委員会メンバー



研究員 小玉 亮子

基幹研究院人間科学系・教授

生活科学部発達臨床心理学講座

博士前期課程人間発達科学専攻

博士後期課程人間発達科学専攻

専門分野: 子ども社会学、教育学

主な担当業務:

ジェンダー研究所運営委員会メンバー

ジェンダー史学会シンポジウム「ポスト「戦後 70 年」とジェンダー史」:地域のジェン
ダー実践を思考の手がかりに」運営コーディネーター



研究員 斎藤 悦子

基幹研究院人間科学系・准教授

生活科学部生活社会科学講座

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 生活経済学、生活経営学、企業文化論

主な担当業務:

ジェンダー研究所運営委員会メンバー

研究プロジェクト「アジアにおける『新中間層』とジェンダー」メンバー

研究プロジェクト「社会的企業とジェンダー」メンバー

【事務系スタッフ】



特任リサーチフェロー 吉原 公美

主な担当業務:

ジェンダー研究所事務局統括
ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所特別招聘教授招聘事務
ジェンダー研究所特別招聘教授業務活動支援
ジェンダー研究所全体予算管理
各種報告書・報告データ作成
国際シンポジウム等運営 ほか



アカデミック・アシスタント 梅田 由紀子

主な担当業務:

文献収集・資料整理・附属図書館収蔵資料管理
AIT ワークショップ事務補佐
研究所事業事務
シンポジウム等運営事務・マニュアル作成
会計処理
書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 滝 美香

主な担当業務:

研究所事業事務
シンポジウム等運営事務
会計処理
書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 稲垣 明子

主な担当業務:

研究所事業事務
シンポジウム等運営事務
会計処理
書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 和田 容子

主な担当業務:

研究所事業事務
シンポジウム等運営事務
事業報告書等刊行物編集
事業成果等原稿校閲 ほか

【資料】②研究プロジェクト一覧（『ジェンダー研究』第20号彙報より転載）

（Ⅰ）経済とジェンダー

IGS 研究プロジェクト「アジアにおける『新中間層』とジェンダー」研究

【研究担当】足立眞理子 (IGS 教授)

【メンバー】斎藤悦子 (IGS 研究員／本学准教授)、堀芳枝 (恵泉女学園大学准教授)、
グレンダ・ロバーツ (早稲田大学教授)、スーザン・ヒメルヴァイト (英・オープン大学名誉教授)

【研究内容】

アジアにおける『新中間層』研究のための理論的作業と、継続している実証研究のまとめを行った。とりわけ、2008 年グローバル金融危機以降のアジア経済社会において、金融化とジェンダーの問題が喫緊の課題として浮かび上がっている。しかしながら、従来、金融化とジェンダーの関連は、理論的構成を含めほとんど研究されていない。そこで、フェミニスト経済学の「金融化とジェンダー」の最新知見を整理・統合することを試みた。

金融化の定義は、今日、ポストケインジアン派のミンスキー理論により、金融不安定性の問題に焦点が当てられている。これらの理論と従来のフェミニスト経済学が理論化してきた、メゾレベル分析の関連性が指摘されている。これらについて、詳細に検討するとともに、日本の現状についても資料収集とインタビュー調査を実施した。（本報告書 18 頁参照）

IGS 研究プロジェクト「社会的企業とジェンダー」研究

【研究担当】足立眞理子 (IGS 教授)

【メンバー】斎藤悦子 (IGS 研究員／本学准教授)、スーザン・ヒメルヴァイト (英・オープン大学名誉教授)

【研究内容】

社会的企業の定義に関して、イギリスの文献や事例研究を行った。

社会的企業と近年注目されてきているシェアリング・エコノミーの関連について研究会を開催し、議論を行った。貨幣経済、市場交換、債権・債務関係等の従来の概念が市場経済を中心として定義されていることを確認し、非市場的諸要素が市場交換に代替する可能性や、企業活動が必ずしも利潤確保を目的としない場合の組織維持について分析した。（本報告書 19 頁参照）

科学研究費基盤研究 C 「食の倫理と功利主義：食をめぐる規範・実践・ジェンダー」

研究課題番号 24530214：平成 24(2012)～平成 28(2016)年度

【研究担当】板井広明 (研究代表者・IGS 特任講師)

【研究内容】

本研究の概要は、功利主義的な食の倫理の研究の視点から昨今の食の倫理論を整理し、あるべき食の倫理の提示を行なうことにある。研究は 2 本立てで、第1は 18 世紀英国における人間と動物の区別・位置づけという思想的考察を行なう。第2は英米日の新たな食のネットワーク作りや運動の実態と特徴を比較しつつ、食と農、食と環境、ジェンダーの問題から規範的な食の倫理を検討し、現代のグローバルな経済社会における望ましい食の倫理を提案するものである。

今年度は改めてロンドン大学 (University College London) 所蔵のベンサム草稿にあたるとともに、受刑者の社会復帰プログラムとして食を位置付けるロンドン近郊の Brixton 刑務所での実践や、愛知県の福津農場など自然農法を実践している現場を参与観察し、食の倫理の問題圏の広さを確認した。

今後は規範的な食の倫理と農の現場での実践とをどう接合するかに関心を合わせつつ、食の倫理の社会経済的な基盤について研究を広げる予定である。(本報告書 20 頁参照)

科学研究費基盤研究B「利己心の系譜学」

研究課題番号 15H03331:平成 27(2015)～平成 29 (2017)年度

【研究担当】板井広明(研究分担者・IGS 特任講師)、太子堂正称(研究代表者・東洋大学准教授)

【研究内容】

経済学が前提とする利己心という人間行動の基本動機を、歴史的・現代的文脈の中で根本的かつ総合的に分析し、その可能性と限界を見定め、現在の経済理論にそれをどのように反映させるか、あるいは競争の是非といった議論をいかに深めるかが、本研究の課題である。

今年度は、5 月 21 日に東北大学で開催された経済学史学会で本研究プロジェクトの企画セッションを行ない、編者のひとり W. Hands 氏と英文論集出版に関する打ち合わせを行なった。また 11 月には、東洋大学(11/12)と関西大学(11/19)で研究集会をもち、編者のひとり Uskali Mäki 氏と出版打ち合わせなどを行なった。

2017 年 2 月には出版契約も済んだので、英文論集完成に向けて次年度は自らのペーパーをブラッシュアップする時期となる。(本報告書 21 頁参照)

(Ⅱ)政治とジェンダー

IGS 研究プロジェクト「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【メンバー】政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (GDRRep)、Yoon Jiso (日本学術振興会外国人特別研究員/カンザス大学准教授)、大木直子 (本学グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

【研究内容】

■ 概要

東アジアは世界的に注目される経済発展を成し遂げた地域であるが、政治的民主主義の発展経路は統一ではない。とりわけ、女性の政治参画は、民主主義の歴史が長い日本において最も低い。他方で台湾は民主化以前から女性議員の割合が高く、民主化以降は3割をはるかに超えるようになった。韓国も、2000年代に入って十数年間女性議員が国会・地方議会において著しく増加した。これら東アジア国家において女性の政治的代表的性を高める・妨げる要因は何か、また、ジェンダー・多様性を生かした政治制度はどのように形成されるのか。本研究は、これらの課題に取り組み、日本、韓国、台湾における男女議員への調査を実施、比較分析し、相違点を明らかにすることを目的とする。

■ 研究内容・今年度の成果

1. 国際シンポ後援:「女性参政権 70 周年記念シンポジウム 女性を議会へ 本気で増やす!」(上智大学、2016 年 4 月 10 日)。
2. GDRRep 研究会:「持続可能な女性代表性は得られるのか?—2016 年の韓国総選挙とクオータ制度の 15 年」申琪榮報告(上智大学、2016 年 6 月 22 日)。
3. IGS セミナー:「台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開」福永玄弥報告(2016 年 12 月 12 日、アジア女性資料センターと共催)。
4. 日本の国会議員(男女)を対象としたサーベイ質問表を集計、衆参議員 16 名にインタビュー実施。

5. 韓国の研究者らと打ち合わせ、質問表の韓国版作成、2017年2月に訪問アンケート実施。このため、韓国研究財団の「一般共同研究」(2016.11~2017.10)に応募し、採択された。

■ 次年度への展望

2017年度は、日本の国会議員を対象として前年度に行ったサーベイ調査及びインタビュー資料を分析する。韓国においては、韓国研究チームの協力のもと、アンケートの集計及びインタビューを実施する予定。その結果を持って論文の執筆を始める。一部日本、韓国のデータに基づき、ヨーロッパ、韓国の学会報告を予定している。さらに、台湾研究チームと打ち合わせし、台湾調査の準備を進める。(本報告書24頁参照)

科学研究費基盤研究C「女性大統領と女性の政治的代表性:韓国の朴槿恵を中心に」

研究課題番号 26360042:平成26(2014)-平成29(2017)年度

【研究担当】申琪榮(研究代表者・IGS 准教授)

【研究内容】

■ 概要

韓国では2012年の選挙で保守政党の女性大統領(朴槿恵)が誕生した。保守政権は伝統的なジェンダー規範を支持し、政治における女性の実質的な代表性(women's substantive representation)を損ないかねないと指摘されてきたが、朴槿恵は「女性」を選挙のキーワードにして戦い、当選した。本研究は、朴槿恵大統領の在任期間を研究期間とし、朴政権の女性関連政策、政治制度、及び国政選挙(2016年)における政党の選挙戦略の変化を考察することで、保守政権の女性大統領が女性の実質的な政治的代表性にどのような影響を及ぼしているのかを考察する。

■ 研究内容と今年度の成果

1. 学会発表:IPSA(International Political Science Association)(2016.7. Poznan Poland)研究発表。
2. 一般公開講演:「パク・クネ:初の女性大統領の誕生と迷走」(2016.11.上智大学)
3. 2015年10月から2016年9月までソウルにて在外研究。韓国にてフィールドワーク実施。専門家及び女性団体関係者と面談。
4. 朴槿恵政権のジェンダー政策(特に慰安婦問題関連)について『日本批評』15号へ論文投稿。

■ 次年度以降の展望

2017年度は、最終年度になるため、主に成果発信に取り組む。具体的には、英語雑誌に投稿する論文を執筆するとともに、女性大統領(総じて政治的リーダー)のあり方と政治的代表性をテーマに国際シンポジウムを企画する。(本報告書25頁参照)

科学研究費基盤研究C「女性の政治参画:制度的・社会的要因のサーベイ分析」

研究課題番号 15K03287:平成27(2015)~平成29(2017)年度

【研究担当】申琪榮(研究分担者・IGS 准教授)、三浦まり(上智大学教授・研究代表者)

【研究内容】

■ 概要

政治代表における男女不均衡(女性の過少代表/男性の過大代表)はなぜ引き起こされ、どのように再生産されてきたのかを明らかにすることを目的とする。女性の政治参画を規定する制度的社会的要因を解明し、どのような制度改革と規範形成が過少代表の解消につながるかを明らかにするため、日本・韓国・台湾・ニュージーラ

ンドを比較分析する。

■ 研究内容と今年度の成果

1. 国際シンポジウム開催:「女性参政権 70 周年記念シンポジウム 女性を議会へ 本気で増やす！」(上智大学 2016 年4月 10 日)、申琪榮2部司会。
2. 研究会開催:「政党行動と政治制度」セミナーシリーズを今年も続けて 1 回行った [第9回持続可能な女性代表性は得られるのか? :2016 年の韓国総選挙とクオータ制度の 15 年]、申琪榮報告(上智大学、2016 年6月)
3. 日本の国会議員サーベイ質問表の集計、インタビュー実施
4. 4月の国際シンポジウムの内容を起こし出版に向けて整理。

■ 次年度以降の展望

2017 年度は、回収した日本の国会議員に対するアンケートを分析、インタビューを起こして論文執筆に取り組む。日本の研究結果は、2017 年度 ECPG (European Conference on Politics and Gender) で報告予定。また、次年度も引き続き、政党行動と政治制度について専門家をお呼びしてセミナーを続けるほか、「東アジアにおける政治とジェンダー」IGS 研究プロジェクトチームとの共催セミナーも開催する。韓国のアンケートも実施予定。(本報告書 26 頁参照)

学術振興会特別研究員奨励費「日本の地方政治における女性の政治的代表性の研究」

研究課題番号 15F15741:平成 27 (2015)年 10 月～平成 29 (2017)年 3 月

【研究担当】申琪榮(研究代表者・IGS 准教授)、Yoon Jiso (研究分担者・日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学準教授)

【研究内容】

■ 概要

本研究は女性議員がもっとも多い東京都議会を事例として、政党は女性議員を増やすためにどのような戦略を取り上げているのか、そして、その結果として選出された議員は女性の利益をどのように代表しているのかを分析している。

■ 今年度の実施状況と成果

今年度の主な研究活動は次の通りである。2000 年代以来、東京都議会の会議録(本会議・委員会)を検討し、女性の利益に関する政策トピックは何であり、誰(議員性別・政党)がこのような政策トピックに言及するののかに関してデータを集めた。そして、その結果を学会で発表した。まず、2016 年の 6 月 24-27 日には日本・京都で開催された Association for Asian Studies Asia で、その後、2016 年 7 月 23-28 日にはポーランド・ポズナンで開催された International Political Science Association Meeting で日韓女性の政治代表性に関する比較研究論文を発表した。その後、学会のパネリストからもらったコメントや指摘を反映して論文を書き直し、国際ジャーナルに投稿した。

■ 次年度への抱負、展望

今後は、東京都議会での女性利益の代表性に関する分析を深めようと考えている。具体的には、東京都議会現職の議員たちへのインタビューを行い、政党や議員たちが理解している女性利益というものは何かを探求する。そして、2017 年の 6 月 6-8 日にはスイス・ローザンヌで開催される European Conference on Politics and Gender で、その後、2017 年 6 月 24-27 日には韓国・ソウルで開催される Association for Asian Studies Asia で研究論文を発表する予定である。(本報告書 27 頁参照)

(Ⅲ) 生殖とジェンダー

IGS 研究プロジェクト「第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における多様な家族のあり方の受容との関係性」

【研究担当】仙波由加里 (IGS 特任 RF)

【研究内容】

上記プロジェクトは、東京医科大学の久慈直昭教授と、城西国際大学の清水清美教授と3人ですすめている「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」と合同で実施した。2016 年度は「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」で全5回の公開セミナーを開催したが、6月8日「AID 出生者のドナー情報を得る権利」(報告者:久慈直昭、仙波由加里、参加者22名)、7月27日「同性カップルの家族づくりと AID」(報告者:東小雪、青山真侑、参加者80名)の2回を IGS セミナー(生殖領域)としてお茶の水女子大学内で実施した。残り3回の公開セミナーは、8月30日、10月12日、12月14日に東京医科大学で開催した。この他、久慈、清水とともに、国内の AID ドナーや AID で子どもを持ったヘテロカップルの親および LGBT の親たちを対象にインタビュー調査も実施し、第28回日本生命倫理学会年次大会および第14回日本生殖心理学会でその調査結果を報告した。また学会誌『生命倫理』と『日本生殖看護学会誌』にも投稿中である。本研究および研究会は次年度も継続して行っていく。

さらに、11月10日はモナシュ大学のキャサリン・ミルズ氏と東京大学の武藤香織氏をスピーカーとして招き、お茶の水女子大学の石田安実をコメンテーターとして、「The Ethics of Prenatal Testing」というテーマで英語セミナーを開催した。参加者は12名で、本セミナーの内容は、報告書としてまとめ、3月に発行。(本報告書30頁参照)

科学研究費基盤研究C「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」

研究課題番号 16K12111:平成28(2016)-平成30(2018)年度

【研究担当】仙波由加里(研究分担者・IGS 特任 RF)、清水清美(研究代表者・城西国際大学教授)

【研究内容】

城西国際大学の清水清美教授が研究代表者である平成28年度(2016年)から30年度(2018年)の文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」(課題番号:16K12111)の研究分担者として、AID 関係者へのインタビューや文献調査を中心に研究をすすめてきた。本年度は、国内では AID で子どもを持った親や、レズビアンで AID を利用して子どもを持った親、精子提供をした医師やゲイの男性にインタビュー調査を行った。2017年2月下旬から3月上旬にかけては、本研究の一環として、カンタベリー大学のケン・ダニエルズ氏の協力を得て、ニュージーランドのクライストチャーチ、ネルソン、オークランドで、AID 当事者や関係者たちにインタビュー調査を実施し、さらに現地にて AID 当事者への告知のための資料等を収集する。そして次年度は、本調査にて得られた情報をもとに、AID で子どもを持った親や、AID を利用しようとするカップル、また AID にかかわっている専門家に向けた AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教育的目的を持つ教材作成に取り組む。さらに2018年の欧州生殖学会(ESHRE)の年次大会で報告することを目標に、調査結果をまとめ、報告の準備をしていく予定である。(本報告書31頁参照)

日本医療研究開発機構成育疾患克服等総合研究事業「生殖補助医療の技術の標準化と出生児の安全性に関する研究」

「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」

平成 28(2016)年度(研究代表者・苛原稔徳島大学教授)

【研究担当】仙波由加里(研究協力者・IGS 特任 RF)、上記課題研究分担者・久慈直昭(東京医科大学教授)

【研究内容】

日本医療研究開発機構成育疾患克服等総合研究事業「生殖補助医療の技術の標準化と出生児の安全性に関する研究」(研究代表者: 苛原稔)の研究分担として、東京医科大学の久慈直昭教授が「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」を行っているが、その研究に研究協力員として参加している。本年度は、「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」の中で、慶應大学病院の看護師、坂中弘江と、根津マタニティークリニックのカウンセラー、渡辺みはる、国立成育医療センターの小泉智恵を招いて講演をお願いした。坂中は実際に AID を希望するカップルにどのような情報をどのように提供しているのかについて話した。渡辺みはるの勤務する諏訪マタニティークリニックでは、不妊カップルの夫の父親の精子を使っての体外受精を行っているが、渡辺はこの技術を実施するまえにどのようなカウンセリングや準備が行われるのかについて話した。小泉は日本生殖補助医療標準化機関(JISART)に所属するクリニックで実施した卵子提供で子どもを持った親に、真実告知の意識調査を実施し、その結果報告を行った。そのほか、小泉氏とドイツの Petra Thorn 氏が共同でおこなっている調査で、不妊クリニックのカウンセラーへのインタビューにも参加させてもらった。(本報告書 32 頁参照)

(IV) 歴史・思想とジェンダー

IGS 研究プロジェクト「リベラル・フェミニズムの再検討」

【研究担当】板井広明(IGS 特任講師)

【研究内容】

本研究プロジェクトの目的は、ウルストンクラフトや J.S.ミルなど第1波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズムの思想・運動を再検討することにある。リベラリズムの公私二元論を前提にしたリベラル・フェミニズムは乗り越えの対象でしかないという捉え方が一般的だが、リベラリズムにおいて、「公」に対する「私」の領域は単に個人的自由の空間であると放任されるのではなく、不正義が存在すれば介入が正当化される空間でもあった。本研究では特に John Stuart Mill, *The Subjection of Women*, 1869 のテキスト読解を通じて、そのことを明らかにするとともに、『女性の隷従』新訳を完成させ、リベラル・フェミニズム再検討の機運を盛り上げることを狙う。

今年度も翻訳作業は小沢佳史氏(神奈川大学非常勤講師)に協力してもらい、第1章について、英文の構造をチェックし、一文一文を丁寧に点検して、読みやすい翻訳文を目指し、ほぼ毎週オンラインで翻訳検討会を開いた。また秋からは J.S.ミルの女性論を専門にしている山尾忠弘氏(慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程)にも参加してもらい、テキストの知性史的背景などについても考慮しつつ、翻訳を進めた。

次年度はよりスピードアップして、翻訳検討を進め、また関連研究会の開催も検討している。(本報告書 36 頁参照)

IGS 研究プロジェクト「朝鮮戦争期の日系アメリカ人兵士と市民権を巡る諸問題:ジェンダーとエスニシティの視点から」

【研究担当】臺丸谷美幸(IGS 特任 RF)

【研究内容】

■ 概要

本研究は朝鮮戦争(1950-1953)に参戦した日系アメリカ人をジェンダーとエスニシティの視点から考察するものである。特に今年度はアメリカカリフォルニア州でのフィールド調査を実施し、朝鮮戦争へ従軍した人々の志願動機や帰還後の生活の変化について考察した。フィールド調査では日系人朝鮮戦争退役軍人会会員に対するインタビュー調査を実施した他、同州内での資料収集を行った。今後、調査成果は投稿論文として発表するとともに、単著本刊行にむけた執筆を進めていく。

■ 今年度の成果・報告(招聘含む)

1. “Rethinking of Japanese American Resettlement and Military Service in 1950s: The Citizenship of a Californian Nisei Soldier in the Korean War in From Internment, to Korea, to Solitude: Memoir of Robert M. Wada.” Asia-Pacific Studies Seminar at Osaka University, 大阪大学、平成 28 年 9 月 23 日(招聘)
2. 「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍経験:ポストコロニアル的視座からの検討」ポストコロニアル法理論研究会第4回研究会、明治大学、平成 28 年 11 月 21 日(招聘)
3. 「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経験と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視座から」、ジェンダー史学会第 13 回年次大会、武蔵大学、平成 28 年 12 月 18 日(査読あり)
4. 次年度 2017 年 4 月 15 日には、Annual conference of Association for Asian American Studies(AAAS): “Unknown Heroes: Japanese American Nisei Military Service during the Korean War and Their Citizenship”(平成 28 年 11 月 22 日採択)にて前年度成果を報告予定である。(本報告書 37 頁参照)

竹村和子フェミニズム基金「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争期の従軍経験:ジェンダーとエスニシティの視点から」

平成 27(2015)年 7 月-平成 28(2016)年 6 月

【研究担当】臺丸谷美幸(個人研究・IGS 特任 RF)

【研究内容】

本研究の目的は朝鮮戦争へ志願した日系二世の女性(二世女性)に着目し、1950 年代における二世女性の社会進出と従軍経験との関係について検討することである。本研究の詳細な成果は、竹村和子フェミニズム基金の HP にて公開中である。(http://www.takemura-fund.org/data/2015/2015_report_4.pdf.)

■ 今年度の実施状況

1. 1950 年代の日系人コミュニティでの日系二世女性の従軍者に対する社会的イメージの解明のため 1950 年代当時のエスニック・メディアの記事分析を行った。
2. 重要先行研究である Cynthia Enloe 著、*Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*, (Berkeley[CA]: University of California Press, 2000) に収録されている “Chapter 6 Nursing the Military: The Imperfect Management of Respectability”の邦訳を進めた。
3. 2016 年 5 月 1 日から 14 日まで米国カリフォルニア州にてフィールド調査を実施した。日系二世の退役軍人を対象としたインタビュー、及び UCLA 付属図書館、全米日系博物館での資料調査を実施した。
4. 上記の成果は、ジェンダー史学会第 13 回年次大会にて、「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経

験と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視座から」(平成 28 年 12 月 18 日、於:武蔵大学)として報告した。
(本報告書 38 頁参照)

科学研究費若手研究B「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視点から」

研究課題番号 16K16670:平成 28(2016)～平成 30 (2018)年度

【研究担当】臺丸谷美幸(研究代表者・IGS 特任 RF)

【研究内容】

本研究は、朝鮮戦争(1950-1953 年)へ従軍した日系アメリカ人に関する研究である。朝鮮戦争期の従軍は、従軍者であった日系二世の生活や社会環境にいかなる影響をもたらしたのかについてジェンダーとエスニシティの視点から明らかにすることを目的とする。

初年度にあたる今年度は、朝鮮戦争期の二世兵士における社会的イメージの解明を目指した。初めに日本国内で入手可能な『Pacific Citizen』や『羅府新報』など新聞記事を用いた資料分析、映画や小説を元にした二世兵士像の分析に着手した。さらに 2016 年 8 月 12 日から 9 月 3 日の日程で、カリフォルニア州でフィールド調査を実施し、ロサンゼルス近郊に在住する退役軍人に対するインタビュー、UCLA 附属図書館および日系人関連団体で資料収集を行った。調査期間中の特筆すべき成果として、ロサンゼルスの日系人街(リトルトーキョー)で開催される、日系人のお祭りである Nisei Week (2016 年 8 月 13-14 日)にて、日系人グループのパレードに参加する朝鮮戦争退役軍人会のメンバーと2日間全日程、行動を共にした参与観察ができた。今年度の成果は次年度に論文として学会誌に投稿を計画しており、最終的には単著としてまとめ、2019 年度内の刊行を目指す。
(本報告書 39 頁参照)

外国人特別招聘教授による研究プロジェクト

The Changing Contexts of Family Life and Early Childhood Education and Care in Japan

【研究担当】スーザン・ハロウェイ(Susan D. HOLLOWAY・米・カリフォルニア大学バークレー校教授)

【研究内容】

As a visiting scholar at Ochanomizu University, I was able to pursue work on three research themes. The first theme concerns the economic and institutional conditions that affect Japanese parents' efforts to balance work with family activities. During my residence period, I worked on an empirical paper showing that Japanese men's potential earnings relative to that of their wives are a significant predictor of the couple's choices regarding work and family chores. I also organized a symposium that took place at Ochanomizu University on June 9. The symposium featured presentations by several well-known scholars on work, family, and individual well-being in Japan and Norway.

A second focus was to organize a follow-up to the study I published in my 2010 book, *Women and Family in Contemporary Japan*. This research examines the daily experiences of women who are parenting young children, looking particularly at their close relationships with spouse and professionals as a potential source of support. By comparing the original survey and interview data to a new dataset, I can identify how parenting discourses and perceptions have changed over the past 15 years.

The third project was to learn about recent changes concerning policy and practice in the early childhood care and education in Japan. I conducted informal interviews and conversations with leading members of the ECEC community in Tokyo and Osaka. I also visited four *youchien* (two national-university affiliated and two under private auspice), and three child-care centers (*kodomo-en* or *hoikuen*), as well as one parent-support center.

Women, Religion and Violence in International Perspective: Roles of Female Members in Aum Shinrikyō

【研究担当】エリカ・バッフェッリ(Erica BAFFELLI・英・マンチェスター大学准教授)

【研究内容】

The three months I spent at the Institute for Gender Studies were extremely stimulating and fruitful, both from the point of view of developing current as well as new research projects.

On October, 19, 2016, I organized an international symposium titled, "Women, Religion and Violence in International Perspective." The aim of the symposium was to discuss the involvement of women in radical political and religious movements, to consider different methodologies and approaches to the study of gender and conflict, and to foster a discussion on violence, terrorism and religion through the analysis of motivations, representations and re-elaboration of violent acts.

On December 14, 2016, a seminar titled, "Finding Your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions" was held at Ochanomizu University. The aim of the seminar was to discuss fieldwork from methodological and theoretical points of view, using my 15 years' experience of working with Japanese "new religions" (*shinshūkyō*) in Japan.

During my stay at Ochanomizu University, I started developing two new research projects:

(1) A new book project (with Professor Ian Reader, University of Manchester) that examines "new religions" or New Religious Movements (NRMs) in Japan in the modern era, with a prime focus on movements that became

widely known in the 1980s and early 1990s. And (2) a new research project on women, religion and violence. The project is part of a larger research network I am developing with Dr. Atreyee Sen (University of Copenhagen) investigating the participation of women in radical political and religious movements. In particular, my current project focuses on women (ex-) members of Aum Shinrikyō. Furthermore, I have worked on a new volume I will co-edit with Professor Fabio Rambelli (University of California, Santa Barbara) on critical terms for the study of religion in Japan (Bloomsbury) . The volume will include more than 20 collaborators from universities from different countries, including Japan, the UK, the US, Norway, Canada, the Netherlands, Italy, and Germany.

After Dark: The Nighttime in Nineteenth Century Japan

【研究担当】ラウラ・ネンツイ (Laura NENZI・米・テネシー大学教授)

【研究内容】

My research project, titled After Dark, looks at the perception of the night in early modern Japan, with a focus on the nineteenth century. It then situates the case of late-Tokugawa Japan within a global context.

I contend that, despite the modern characterization of the Tokugawa period as an age defined by darkness and by a quaint closeness to the forces of nature, nineteenth-century depictions and accounts of nocturnal landscapes show that in the Tokugawa era the nighttime was treated as a moment apart, one to be dealt with cautiously.

One part of the project looks at the gendered implications of the night. In the realm of popular culture, gender informed the fears enticed by the night (for example in the case of female ghosts). For the authorities, controlling the nighttime and its spaces and activities was a way of buttressing the status system and of maintaining social order, which included the management of issues related to gender.

In Tokugawa Japan, controlling the nighttime necessitated the replication (and possibly even the reinforcement) of norms pertaining to gender and patriarchy. When tensions erupted (as with the eejanaika phenomenon of 1867), the night became the time when the hetero-normative rules enforced during the day came into question, ambiguity took center stage, and unorthodox behaviors became possible.

【資料】③協力研究者一覧

氏名・所属	協力事業*	参照
【アジア・オセアニア】		
ジョヨッティ・ゴーシュ ジャワハルラール・ネルー大学・印	(シ) 金融化、雇用、ジェンダー不平等	50 頁
C・P・チャンドラシェーカー ジャワハルラール・ネルー大学・印	(シ) 金融化、雇用、ジェンダー不平等	50 頁
キャサリン・ミルズ モナシュ大学・オーストラリア	(セ) The Ethics of Prenatal Testing	83 頁
【ヨーロッパ】		
シルヴィア・ウォルビー ランカスター大学・英	(セ) The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
エリカ・バッフェツリ マンチェスター大学・英	特別招聘教授	111 頁
	(シ) 女性、宗教、暴力: 国際的視点からの再考	56 頁
	(セ) Finding Your Place	90 頁
スーザン・ヘルムヴァイト オープン大学・英	(研) アジアにおける「新中間層」とジェンダー	18 頁
	(研) 社会的企業とジェンダー	19 頁
アートリー・セン コペンハーゲン大学・デンマーク	(シ) 女性、宗教、暴力: 国際的視点からの再考	56 頁
カリン・ゴットシャル ブレーメン大学・独	(セ) The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
サンドラ・シャール ストラスブール大学／アルザス・欧州 日本学研究所・仏	(シ) モダン再考: 戦間期日本の都市・身体・ジェンダー	65 頁
	(連) ストラスブール大学／アルザス・欧州日本学研究所	122 頁
小野坂優子 スタヴァンゲル大学・ノルウェー	(シ) 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較	53 頁
【北米】		
マーニー・S・アンダーソン スミス大学・米	(シ) 明治期のジェンダー、宗教、社会改良	59 頁
ハイディ・ゴットフリート ウェイン州立大学・米	(セ) The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
メリッサ・デックマン ワシントン・カレッジ・米	(会) 日米女性政治学者シンポジウム (JAWS)	123 頁
	(シ) なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?	62 頁
ジュリー・ドーラン マカレスター・カレッジ・米	(会) 日米女性政治学者シンポジウム (JAWS)	123 頁
	(シ) なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?	62 頁

氏名・所属	協力事業	参照
ラウラ・ネンツィ テネシー大学・米	特別招聘教授	114 頁
	(教) 博士前期課程比較社会文化学専攻歴史文化学コース歴史資料論特論「Gender Issues in Tokugawa Period」	116 頁
	(セ) The Lives of Samurai Women of the Edo Period	80 頁
	(セ) Gender, Food, and Empire	85 頁
	(シ) 明治期のジェンダー、宗教、社会改良	59 頁
スーザン・D・ハロウェイ カリフォルニア大学バークレー校・米	特別招聘教授	108 頁
	(シ) 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較	53 頁
	(セ) Family and Schooling in Contemporary Japan	71 頁
マリアン・パリー デラウェア大学・米	(会) 日米女性政治学者シンポジウム (JAWS)	123 頁
	(セ) JAWS 研究交流会	96 頁
	(シ) なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？	62 頁
リンダ・M・ペレス ミルズ大学・米	(セ) Perinatal Mental Illness, Attachment, and Affect Communication	98 頁
堀口典子 テネシー大学・米	(セ) Gender, Food, and Empire	85 頁
エイミー・リンド シンシナティ大学・米	(セ) Imagining a Postneoliberal Future	73 頁
ルーク・ロバーツ カリフォルニア大学サンタバーバラ校・米	(セ) The Lives of Samurai Women of the Edo Period	80 頁
ユン ジソ 学振外国人特別研究員 カンザス大学・米	(研) 「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	24 頁
	(研) 日本の地方政治における女性の政治的代表的性の研究	27 頁
	(研) 人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究	33 頁
	(セ) JAWS 研究交流会	96 頁
【国内】		
池尾愛子 早稲田大学	(セ) 日本における女性と経済学	93 頁
生垣琴絵 沖縄国際大学	(セ) 日本における女性と経済学	93 頁
石井紀子 上智大学	(シ) 明治期のジェンダー、宗教、社会改良	59 頁
伊田久美子 大阪府立大学	(会) 「フェミニスト経済学」研究会	124 頁
板橋晶子 中央大学	(セ) 記者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
伊藤誠 東京大学	(シ) 金融化、雇用、ジェンダー不平等	50 頁
岩本美砂子 三重大学	(会) 日米女性政治学者シンポジウム (JAWS)	123 頁
	(セ) JAWS 研究交流会	96 頁

氏名・所属	協力事業	参照
上村協子 東京家政学院大学	(セ)日本における女性と経済学	93 頁
エリック・シッケタンツ 日本学術振興会／東京大学	(シ)明治期のジェンダー、宗教、社会改良	59 頁
大橋史恵 武蔵大学	(教)AIT ワークショップ	128 頁
岡崎まゆみ 帯広畜産大学	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
	(セ)第1回「冷戦とジェンダー」研究会	79 頁
小川真理子 日本学術振興会／大妻女子大学	(シ)女性、宗教、暴力:国際的視点からの再考	56 頁
兼子歩 明治大学	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
	(セ)第1回「冷戦とジェンダー」研究会	79 頁
金野美奈子 東京女子大学	(セ)日本における女性と経済学	93 頁
吉良貴之 宇都宮共和大学	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
久慈直昭 東京医科大学	(会)生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会	124 頁
	(セ)AID 出生者のドナー情報を得る権利	69 頁
栗田啓子 東京女子大学	(セ)日本における女性と経済学	93 頁
幸田直子 近畿大学	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
	(セ)第1回「冷戦とジェンダー」研究会	79 頁
清水清美 城西国際大学	(会)生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会	124 頁
スティー爾若希 東京大学	(会)政治代表におけるジェンダーと多様性研究会(GDRep)	124 頁
高橋梓 東京外国語大学博士後期課程	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
武田興欣 青山学院大学	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
	(セ)「慰安婦」問題を巡るグローバル・ジャスティス	95 頁
武田宏子 名古屋大学	(会)日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)	123 頁
	(セ)JAWS 研究交流会	96 頁
	(シ)なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?	62 頁
田中洋美 明治大学	(会)日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)	123 頁
	(セ)JAWS 研究交流会	96 頁
	(シ)なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?	62 頁

氏名・所属	協力事業	参照
崔世卿 早稲田大学	(セ) 訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
根本宮美子 京都外国語大学	(シ) 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較	53 頁
福永玄弥 東京大学博士後期課程／日本学術振興会	(セ) 台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開	88 頁
堀芳江 恵泉女学園大学	(研) アジアにおける「新中間層」とジェンダー	18 頁
松尾瑞穂 国立民族学博物館	(シ) 女性、宗教、暴力: 国際的視点からの再考	56 頁
松野尾裕 愛媛大学	(セ) 日本における女性と経済学	93 頁
三浦まり 上智大学	(研) 女性の政治参画	26 頁
	(会) 政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (GDRep)	124 頁
武藤香織 東京大学	(セ) The Ethics of Prenatal Testing	83 頁
グレンダ・ロバーツ 早稲田大学	(研) アジアにおける「新中間層」とジェンダー	18 頁
山本めゆ 日本学術振興会／津田塾大学	(会) 「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
	(セ) 「慰安婦」問題を巡るグローバル・ジャスティス	95 頁
【学内】		
石田安実 グローバル人材育成推進センター 特任准教授	(セ) Perinatal Mental Illness, Attachment, and Affect Communication	98 頁
	(セ) The Ethics of Prenatal Testing	83 頁
磯山久美子 非常勤講師	(セ) 訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
大木直子 グローバルリーダーシップ研究所 特任講師	(研) 「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	24 頁
	(セ) The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
	(セ) JAWS 研究交流会	96 頁
カレン・シャイア グローバルリーダーシップ研究所 特別招聘教授	(セ) The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
土野瑞穂 みがかずば研究員	(会) 「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
	(セ) 訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
	(セ) 『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス	95 頁
宮内貴久 基幹研究院人文科学系教授	(会) 「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁

* (シ) シンポジウム、(セ) セミナー・研究会、(教) 教育プロジェクト、
(研) 研究プロジェクト、(会) 関連研究会、(連) 国際ネットワーク

【資料】④国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 国際シンポジウム		
4/11	<p>国際シンポジウム 金融化、雇用、ジェンダー不平等 Financialization, Employment, Gender Inequality</p> <p>【司会】板井広明 (IGS 特任講師) 【報告】ジョヨッティ・ゴーシュ (ジャワハルラル・ネルー大学教授・インド) 「金融危機と女性の経済的状況」 C.P.チャンドラシェーカー (ジャワハルラル・ネルー大学教授・インド) 「アジアにおける金融と不安定性」 【ディスカッサント】伊藤誠 (東京大学名誉教授) 【閉会の辞】足立真理子 (IGS 教授) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日英 (同時通訳) 【参加者数】41 名 【成果刊行】IGS Project Series 10『金融化、雇用、ジェンダー不平等』</p>	50 頁
6/9	<p>国際シンポジウム [特別招聘教授プロジェクト] 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較 Family, Work, and Well-Being in International Perspective</p> <p>【司会】スーザン・D・ハロウェイ (カリフォルニア大学バークレー校教授・米 / IGS 特別招聘教授) 石井クツ昌子 (お茶の水女子大学教授 / IGS 所長) 【報告】小野坂優子 (スタヴァンゲル大学准教授・ノルウェー) 「仕事と家庭と幸福感: ノルウェーと日本の視点から」 根本宮美子 (京都外国語大学教授) 「日本における未婚男性の幸福と家族の変化」 【ディスカッサント】スーザン・D・ハロウェイ、石井クツ昌子 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日英 (同時通訳) 【参加者数】78 名 【成果刊行】IGS Project Series 5『家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較』</p>	53 頁
10/19	<p>国際シンポジウム [特別招聘教授プロジェクト] 女性、宗教、暴力: 国際的視点からの再考 Women, Religion and Violence in International Perspective</p> <p>【コーディネーター/司会】エリカ・バップフェッリ (マンチェスター大学准教授・英 / IGS 特別招聘教授) 【基調講演】アトリー・セン (コペンハーゲン大学准教授・デンマーク) 「女性とラディカルな運動: ジェンダーと紛争についての新しい視点を得る」 【ディスカッサント】松尾瑞穂 (国立民族学博物館准教授) 「Prof. Atreyee Sen の議論を受けて」 小川真理子 (日本学術振興会特別研究員(PD) / 大妻女子大学) 「日本における DV の加害者と被害者」 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日英 (同時通訳) 【参加者数】47 名 【成果刊行】IGS Project Series 7『女性、宗教、暴力: 国際的視点からの再考』</p>	56 頁

開催日	イベント詳細	参照
1/17	<p>国際シンポジウム〔特別招聘教授プロジェクト〕 明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎 Gender, Religion, and Social Reform in the Meiji Period: The Case of Sumiya Koume and Nakagawa Yokotarō</p> <p>【コーディネーター／司会】ラウラ・ネンツィ(テネシー大学教授・米／IGS 特別招聘教授) 【基調講演】マーニー・S・アンダーソン(スミス大学准教授・米) 『『ヤソがワシの色女を奪りゃあがった』: 中川横太郎と炭谷小梅、19 世紀日本における生の変容』 【コメンテーター】エリック・シッケタンツ(日本学術振興会外国人特別研究員／東京大学) 石井紀子(上智大学教授) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日英(同時通訳) 【参加者数】26 名</p>	59 頁
3/18	<p>国際シンポジウム なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙 How far have we come in equal political representation? Lessons from the 2016 presidential election in the US</p> <p>【総合司会／ファシリテーター】申琪榮(IGS 准教授) 【特別講演】メリッサ・デックマン(ワシントンカレッジ教授・米) 「トランプ時代におけるジェンダー・ギャップ:2016 年大統領選で女性有権者の投票行動から何を学ぶか」 ジュリー・ドーラン(マカレスターカレッジ教授・米) 「女性大統領候補:2016 年大統領選におけるジェンダーの役割」 【ディスカッサント】メリッサ・デックマン ジュリー・ドーラン 武田宏子(名古屋大学教授) 申琪榮(IGS 准教授) マリアン・バリー(デラウェア大学名誉教授・米) * 悪天候により来日キャンセル 【ラウンドテーブル司会】田中洋美(明治大学教授) 【主催】ジェンダー研究所、JAWS(日米女性政治学者シンポジウム) 【後援】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター 【言語】日英(同時通訳) 【参加者数】136 名</p>	62 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 共催 海外・国内シンポジウム		
3/23～ 3/25	<p>国際シンポジウム モダン再考: 戦間期日本の都市・身体・ジェンダー</p> <p>Reconsidérer le 'modan': La ville, le corps et le genre dans le Japon de l'entre-deux-guerres</p> <p>【会場】ストラスブール大学・仏 【報告】イレーナ・ヘイター(リーズ大学・英) 「再びモダン・ガールについて: スペクタクルと主体性」 サンドラ・シャール(ストラスブール大学/CEEJA・仏) 「モラルな風刺の様相: 漫画家によるモダン・ガール」 伊藤るり(一橋大学) 「沖縄のモダン・ガール現象: 新興エリート層の娘たちとその新しい卓越感覚」 伊藤公雄(京都産業大学) 「モダニティとしての「集団」と「技術」: 中井正一『委員会の論理』を手掛かりに」 イブ・カド(トゥールーズ大学・仏) 「Budō vs. Sport: The Issue of the Body in the So-Called Modan Period」 セップ・リンハート(ウィーン大学・オーストリア) 「日本は本当にそれ程モダンな国だったのか: 「細君天下絵葉書」を通じて見た大正日本の夫婦関係への一考察」 フレデリック・エブラール(ストラスブール大学/CEEJA・仏) 「岡本一平: 新聞社付属画家の目から見た時代」 スティーブン・ドッド(ロンドン大学東洋アフリカ研究学院・英) 「宇野浩二の「夢見る部屋」におけるモダニズムの翻訳」 ジェラルド・ブルー(セルジー＝ポントワーズ大学・仏) 「旅行をしているモボとモガ: 西洋へ行ってみる時の日本モダン」 クリスチャン・ガラン(トゥールーズ大学・仏) 「Modern or 'modan'? Schools and Schoolchildren in 1920s and 1930s Japan」 黒田昭信(ストラスブール大学・仏) 「もう一つの近代の超克: 「国語」の「主体」とその運命」 足立真理子(IGS 教授) 「銘仙と「入れ子状の近代」: 逸脱への欲望」 和田博文(東洋大学) 「十五年戦争下の女学生と、女性教養誌 むらさき」</p> <p>【主催】ストラスブール大学日本学科、アルザス欧州日本学研究所 【共催】ジェンダー研究所ほか</p>	65 頁
	<p>シンポジウム</p> <p>『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう?』出版記念トークセッション</p> <p>【出版報告】綱島茜(LGBT 法連合会事務局長代理) 【報告者・パネリスト】若林一夫(世田谷区人権・男女共同参画担当課長) 瀬尾かおり(文京区総務部ダイバーシティ推進担当課長) 齊藤静子(多摩市くらしと文化部平和・人権課長、TAMA 女性センター長) 【ビデオメッセージ】長谷部健(渋谷区長) 【特別報告】熊坂義裕(一般社団法人社会的包摂サポートセンター代表理事) 【活動提起】原ミナ汰(NPO 法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク代表理事) 【司会】森谷佑未(LGBT 法連合会) 【パネルディスカッション司会】神谷悠一(LGBT 法連合会事務局長) 【開会挨拶】猪崎弥生(お茶の水女子大学副学長) 池田宏(特別配偶者法全国ネットワーク事務局共同代表) 【閉会挨拶】永野靖(LGBT 法連合会) 【主催】性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会(LGBT 法連合会)、ジェンダー研究所 【参加者数】137 名</p>	66 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
6/8	<p>生殖領域シリーズ 1 AID 出生者のドナー情報を得る権利 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕</p> <p>【コーディネーター/司会】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)</p> <p>【報告】久慈直昭 (東京医科大学教授) 「医師から見た各国の AID 事情～ドイツ・イギリス・ベルギー等の状況」 仙波由加里 「AID 出生者のドナー情報を知る権利—英国・オランダ・ドイツ・米国の状況」</p> <p>【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】22 名</p>	69 頁
6/16	<p>〔特別招聘教授プロジェクト〕</p> <p>Family and Schooling in Contemporary Japan: Foreign Perspectives and Research (現代日本における家庭と学校教育: 外国人研究者の視点と研究)</p> <p>【コーディネーター】石井クツ昌子 (お茶の水女子大学教授/IGS 所長)</p> <p>【講師】スーザン・D・ハロウェイ (カリフォルニア大学バークレー校教授・米/IGS 特別招聘教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】30 名</p>	71 頁
6/30	<p>Imagining a Postneoliberal Future: The Queer (Im)possibilities of Ecuador's Citizen Revolution (ポスト新自由主義の未来を想像する: エクアドル市民革命のクィアな(不)可能性)</p> <p>【司会】本山央子 (大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻)</p> <p>【講演】エイミー・リンド (シンシナティ大学教授・米)</p> <p>【担当】足立眞理子 (IGS 教授)、臺丸谷美幸 (IGS 特任 RF)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】30 名</p>	73 頁
7/27	<p>生殖領域シリーズ 2 同性カップルの家族づくりと AID 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕</p> <p>【司会】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)</p> <p>【報告】東小雪 (LGBT アクティビスト) 「日本におけるレズビアンマザー」 青山真侑 (にじいろかぞく 副代表) 「日本で子育てするセクシュアル・マイノリティ親」</p> <p>【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】85 名</p>	75 頁
7/29	<p>訳者と語る『京城のモダンガール』: 消費・労働・女性から見た植民地近代——コロニアリズム/ポストコロニアリズム/ネオコロニアリズムの射程と『女』の位置</p> <p>【コーディネーター/司会】臺丸谷美幸 (IGS 特任リサーチフェロー)</p> <p>【講演】高橋梓 (東京外国語大学大学院博士後期課程) 「京城の『モダンガール』とは誰なのか: 訳者として日本語版『京城のモダンガール』にかかわって」 姜信子 (作家) 「私はいかにして植民地のモダンガールに出会ったか」</p> <p>【ディスカッサント】足立眞理子 (IGS 教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】41 名 【成果刊行】IGS Project Series 11『訳者と語る『京城のモダンガール——消費・労働・女性から見た植民地近代』』</p>	77 頁

開催日	イベント詳細	参照
7/29	『京城のモダンガール:消費・労働・女性から見た植民地近代』 書評会 【コーディネーター/司会】臺丸谷美幸(IGS 特任リサーチフェロー) 【報告】板橋晶子(中央大学兼任講師)、磯山久美子(お茶の水女子大学兼任講師)、臺丸谷美幸、尹智昭(日本学術振興会外国人特別研究員/カンザス大学準教授・米)、土野瑞穂(お茶の水女子大学みがかずば研究員)、岡崎まゆみ(帯広畜産大学専任講師)、吉良貴之(宇都宮共和大学専任講師)、崔世卿(早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員) 【応答】高橋梓(東京外国語大学大学院博士後期課程) 【主催】ジェンダー研究所 【共催】ポストコロニアル法理論研究会(代表:岡崎まゆみ) 【参加者数】19名(一般非公開)	78 頁
10/24	「冷戦とジェンダー」研究会:第1回研究会/キックオフミーティング 【司会】岡崎まゆみ(帯広畜産大学専任講師) 【話題提供】幸田直子(近畿大学専任講師) 「A Social History of the Cold War」 臺丸谷美幸(IGS 特任リサーチフェロー) 「調査報告:日系アメリカ人朝鮮戦争従軍兵士によるトランスナショナルな記憶の構築」 (H27 年度竹村和子フェミニズム基金助成 活動報告) 【ディスカッサント】兼子歩(明治大学専任講師) 【主催】ジェンダー研究所 【助成】JSPS 科研費 JP16K16670(若手研究(B))「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視点から」	79 頁
11/8	〔特別招聘教授プロジェクト〕 The Lives of Samurai Women of the Edo Period (江戸時代の武家の女性たち) 【コーディネーター/司会】ラウラ・ネンツィ(テネシー大学教授・米/IGS 特別招聘教授) 【講師】ルーク・ロバーツ(カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授・米) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】25 名	80 頁
11/10	生殖領域シリーズ 3 The Ethics of Prenatal Testing (出生前検査をめぐる倫理) 〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕 【司会】仙波由加里(IGS 特任リサーチフェロー) 【報告】キャサリン・ミルズ(モナシュ大学准教授・オーストラリア) 「Gender, Disability and Bodily Norms」 武藤香織(東京大学教授) 「Ethics and Governance of Non-invasive Prenatal Testing in Japan」 【コメント】石田安実(グローバル人材育成推進センター特任准教授) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】12 名 【成果刊行】IGS Project Series 9『The Ethics of Prenatal Testing』	83 頁

開催日	イベント詳細	参照
11/25	<p>〔特別招聘教授プロジェクト〕</p> <p>Gender, Food, and Empire: Eating the Other in Hayashi Fumiko's Novels and Naruse Mikio's Adaptation Films (ジェンダー・食・帝国:「他者を食べる」物語と記憶(林芙美子の小説と成瀬巳喜男の翻案映画を中心に))</p> <p>【コーディネーター/司会】ラウラ・ネンツィ(テネシー大学教授・米/IGS 特別招聘教授) 【講師】堀口典子(テネシー大学准教授・米) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】15 名</p>	85 頁
12/12	<p>GDRep 研究会 台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開 [2016 年度 第 1 回「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会]</p> <p>【司会】申琪榮(IGS 准教授) 【講師】福永玄弥(日本学術振興会特別研究員) 【主催】特定非営利活動法人アジア女性資料センター 【共催】ジェンダー研究所「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会 【参加者数】30 名</p>	88 頁
12/14	<p>〔特別招聘教授プロジェクト〕</p> <p>Finding your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions (立ち位置を理解する:日本の新宗教フィールドワークからの考察)</p> <p>【講師】エリカ・バッフェッリ(マンチェスター大学准教授・英/IGS 特別招聘教授) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】10 名</p>	90 頁
2/22	<p>日本における女性と経済学</p> <p>【司会】板井広明(IGS 特任講師) 【報告】上村協子(東京家政学院大学教授) 栗田啓子(東京女子大学教授) 松野尾裕(愛媛大学教授) 生垣琴絵(沖縄国際大学講師) 【ディスカッサント】池尾愛子(早稲田大学教授)*紙面討論者 足立真理子(IGS 教授) 金野美奈子(東京女子大学教授) 【論点提供者】伍賀偕子(元大阪総評オルグ、元関西女の労働問題研究会代表) 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】28 名</p>	93 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS 研究会		
1/30	<p>『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス:アメリカ合衆国の動向に注目して 〔第2回「冷戦とジェンダー」研究会〕</p> <p>【司会】山本めゆ(日本学術振興会特別研究員 PD) 【報告】土野瑞穂(お茶の水女子大学みがかずば研究員) 「アジア女性基金解散後の日本政府による『慰安婦』問題への対応:アジア女性基金フォローアップ事業を中心に」 武田興欣(青山学院大学教授) 「『慰安婦』決議をどう読むか:アメリカ連邦議会研究者の立場から」 申琪榮(IGS 准教授) 「新刊紹介 山口智美他『海を渡る「慰安婦」問題:右派の歴史戦を問う』」 臺丸谷美幸(IGS 特任リサーチフェロー) 「慰安婦少女像建設運動を巡るローカルコミュニティの反応:アジア系アメリカ人を中心に」</p> <p>【主催】ジェンダー研究所 【担当】臺丸谷美幸</p>	95 頁
3/16	<p>JAWS 研究交流会 生と医療のジェンダー政治学</p> <p>【司会】田中洋美(明治大学准教授) 【報告】武田宏子(名古屋大学教授) 「政治課題としての日常生活」 仙波由加里(IGS 特任リサーチフェロー) 「Government Subsidized Project for The Cost of Infertility Treatments As a Population Policy in Japan」 マリアン・パリー(デラウェア大名誉教授・米) * 悪天候により来日キャンセル=紙面討論者 「Some Possible Scenarios for the Future of Women's Health Care in a Trump Administration」</p> <p>ジェンダーと政治的代表性</p> <p>【司会】申琪榮(IGS 准教授) 【報告】大木直子(お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師) 「How 'Politics School' Promote Women's Participation in Politics in Japan」 ユン・ジソ(日本学術振興会外国人特別研究員/カンザス大学准教授・米) 「Who Speaks for Women and Why: Evidence of Substantive Representation in the Tokyo Metropolitan Assembly」</p> <p>【コメンテーター】岩本美砂子(三重大学教授) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【担当】申琪榮</p>	96 頁

開催日	イベント詳細	参照
学内他機関との共催セミナー・研究会		
10/31	IGS セミナー Perinatal Mental Illness, Attachment, and Affect Communication (周産期精神疾患、母子間愛着、および情緒的コミュニケーション) 【司会/コーディネーター】石田安実(グローバル人材育成推進センター特任准教授) 【講師】リンダ・M・ペレス(ミルズ大学 Abbey Valley 教授・米/臨床心理士) 【主催】グローバル人材育成推進センター、ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】30 名	98 頁
11/14	研究交流会 The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis: A Discussion with Gender Scholars Sylvia Walby and Heidi Gottfried (シルヴィア・ウォルビー教授とハイディ・ゴットフリート教授との研究交流会―「知識経済」と『Crisis』後のフェミニズム) 【司会】カレン・シャイア(デュースブルグ=エッセン大学教授・独/グローバルリーダーシップ研究所特別招聘教授) 大木直子(グローバルリーダーシップ研究所特任講師) 【登壇者】シルヴィア・ウォルビー(ランカスター大学教授・英) ハイディ・ゴットフリート(ウェイン州立大学教授・米) カリン・ゴットシャル(ブレーメン大学教授・独) 【共催】グローバルリーダーシップ研究所、ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】24 名	101 頁
協力機関企画シンポジウム		
6/11	シンポジウム イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて 【会場】東京大学東洋文化研究所 【主催】科研費「基盤研究 A イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」代表:長沢栄治 【共催】ジェンダー研究所、東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」	103 頁
6/26	ジェンダー史学会シンポジウム ポスト「戦後 70 年」とジェンダー史:地域のジェンダー実践を思考の手がかりに 【会場】お茶の水女子大学共通講義棟 2 号館 【共催】ジェンダー史学会、ジェンダー研究所	104 頁

【資料】⑤国内外共同研究・研究交流一覧

■ 国際的な共同研究・研究交流等

地域・国・機関	担当
【アジア・オセアニア】	
東アジア	
東アジア日本研究者協議会	申
韓国	
韓国ジェンダー政治研究所	申
ソウル大学日本研究所	申
ソウル大学国際問題研究所	申
台湾	
国立台湾大学	申
タイ	
アジア工科大学院大学(AIT)環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻	足立・申・板井
【ヨーロッパ】	
全欧	
European Consortium for Political Research	申
フランス	
アルザス・欧州日本学研究所	足立
ストラスブール大学外国語・外国文化学部日本学学科	足立
パリ第2パンテオン・アサス大学	板井
【北米】	
米国	
日米女性政治学者シンポジウム(Japan America Women Political Scientists Symposium)	申

■ 国内関連研究会・連携研究党

研究会・団体名	担当
「フェミニスト経済学」研究会	足立
政治代表におけるジェンダーと多様性研究会(Gender, Diversity and Representation(GDRep))	申
生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会	仙波
「冷戦とジェンダー」研究会	臺丸谷
ジェンダー関連学協会コンソーシアム	IGS

【資料】⑥国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則

(平成 27 年 3 月 25 日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構規則第4条第2項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下「研究所」という。)に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 研究所は、グローバル女性リーダー育成研究機構に附属する研究所として、ジェンダーに関する総合的、国際的な研究及び調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資することを目的とする。

(研究及び業務)

第3条 研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる研究及び業務を行う。

- (1) ジェンダーに関する国際的研究及び調査
- (2) ジェンダー研究に関する教育研修
- (3) ジェンダー研究に関する文献・資料の収集および整理
- (4) ジェンダー研究に関する情報の提供
- (5) その他前条の目的を達成するために必要な業務

(組織)

第4条 研究所に、次に掲げる職員を置く。

- (1) 研究所長
- (2) 教員
- (3) 特別招聘教授
- (4) 研究員
- (5) その他学長が必要と認めた職員

2 研究所に、次に掲げる職員を置くことができる。

- (1) 特任教員
- (2) 客員研究員
- (3) 研究協力員

(研究所長)

第5条 研究所長は、基幹研究院人文科学系、人間科学系及び自然科学系の系会議構成員である教授のうちから学長が任命する。

2 研究所長は、研究所の業務を掌理する。

3 研究所長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(研究員)

第6条 研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に従事する。

2 研究員は、基幹研究院に所属する教員のうちから、学長が任命する。

3 研究員の任期は2年とし、その終期が研究員となる日の属する年度の翌年度の末日を超えることとなる場合は、翌年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第7条 客員研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に参画する。

2 客員研究員は、本学専任の教員以外の者を、学長が委嘱する。

3 客員研究員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(研究協力員)

第8条 研究協力員は、第3条に掲げる研究及び業務に協力する。

2 研究協力員は、本学専任の教員以外の者を、研究所長が委嘱する。

3 研究協力員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(運営会議)

第9条 研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、ジェンダー研究所運営会議(以下「運営会議」という。)を置く。

2 運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。

(1) 研究所長

(2) 第4条第1項第2号に掲げる教員

(3) 第4条第1項第3号に掲げる特別招聘教授

(4) 第4条第1項第4号に掲げる研究員

(5) その他グローバル女性リーダー育成研究機構長が必要と認めた者

3 運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。

4 運営会議の構成員は、第2条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。

5 研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

6 本条に定めるほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 研究所の事務は、企画戦略課が行う。

(雑則)

第11条 この規則に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成27年4月1日から施行する。

2 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究センター規則は、廃止する。

【資料】⑦国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則

(平成 27 年 3 月 25 日制定)

(趣旨)

第 1 条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則(以下「職員就業規則」という。)第 4 条第 5 項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学(以下「本学」という。)のグローバル女性リーダー育成研究機構に置く研究所において雇用する特別招聘教授に関し必要な事項を定める。

(定義)

第 2 条 この規則において「特別招聘教授」とは、国際的に著名な研究者又は顕著な業績を有する研究者で、グローバルな視野から本学の教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることを目的として、本学が常勤の教員として採用する者をいう。

(選考)

第 3 条 特別招聘教授の選考は、教員人事会議の議を経て、学長が行う。ただし選考に係る審査は、基幹研究院長に付託するものとする。

2 前項の規定にかかわらず、学長の戦略的人事による選考は、役員会の議を経て、学長が行うものとする。

3 前 2 項の選考にあたっては、国立大学法人お茶の水女子大学教員選考基準第 1 条の規定を準用する。

(定年・雇用期間)

第 4 条 特別招聘教授の定年は 65 歳とし、当該定年に達した日以降における最初の 3 月 31 日(以下「定年退職日」という。)に退職するものとする。ただし、学長が特に必要があると認める職員については、この限りでない。

2 前項の規定にかかわらず、学長が必要と認める場合には、5 年以内の期間を定めて雇用することができる。

(給与及び退職手当)

第 5 条 特別招聘教授の給与は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則第 4 条第 4 項の規定に基づき年俸制を適用して雇用する教員の就業に関する規則(以下「年俸制適用教員の就業に関する規則」という。)

第 2 条第 1 号の規定に基づき採用された教員に関する同規則第 6 条から第 13 条の規定を適用する。

2 特別招聘教授の退職手当は支給しない。

(赴任及び帰国旅費)

第 6 条 特別招聘教授には、赴任及び帰国のための旅費を支給する。ただし、帰国のための旅費は退職後 3 か月以内に本邦を出発する場合に限り支給し、一時帰国のための旅費は学長が必要と認める場合に支給するものとする。

(就業等)

第 7 条 特別招聘教授の就業に関し、この規則に定めのない事項については、職員就業規則の定めるところによる。

2 特別招聘教授の給与に関し、この規則に定めのない事項については、国立大学法人お茶の水女子大学職員給与規程の定めるところによる。

(雑則)

第 8 条 この規則に定めるもののほか、特別招聘教授に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

2 この規則の施行後最初に採用される特別招聘教授は、この規則に基づき選考されたものとみなす。

附 則(平成 27 年 10 月 23 日)

この規則は、平成 27 年 10 月 23 日から施行する。

附 則(平成 28 年 2 月 19 日)

この規則は、平成 28 年 2 月 19 日から施行する。

【資料】⑧『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程

《編集方針》

1. 本年報に論文、研究ノート、書評、ジェンダー研究所の事業に関する報告(研究プロジェクト報告等)、彙報の各欄を設ける。
2. 本年報の掲載論文は、投稿論文と依頼論文から成る。
3. 投稿論文は、投稿規程第4条により、査読の上、編集委員会が掲載の採否を決定する。
 - 3-1 投稿論文1本に対して査読は2名以上で行うこととする。
 - 3-2 査読者は、原則として、編集委員会のメンバー、また必要に応じて学内外の専門分野の研究者から選定する。投稿論文執筆者が本学大学院生である場合にはその指導教官を査読者に加える。
 - 3-3 投稿論文には番号を付し、執筆者名は伏せた状態で査読を行う。
 - 3-4 査読結果は共通の査読評価用紙を用い、定められた基準により評価する。
 - 3-5 掲載決定日を本文末に記す。
4. 依頼論文、ならびにジェンダー研究所の事業に関する報告は、編集委員会で閲読し、必要に応じて専門分野の研究者の助言を求めた上、編集委員会が掲載の採否を決定する。
5. ジェンダー研究所の事業に関する報告のうち、編集委員会が論文として掲載することが適当であると判断した場合には、投稿論文に準じて査読を行った上、論文として掲載することがある。
6. その他各号の枚数、部数、企画等、年報の編集に関する諸事項は、編集委員会が検討の上、決定する。
7. 『ジェンダー研究』に掲載された内容は全てジェンダー研究所のホームページおよびお茶の水女子大学教育・研究コレクション TeaPot に登録、公開される。
8. 投稿論文や研究ノート等には、英文要約を添付する。200語以内とする。
9. 投稿論文や研究ノート等には、その内容を的確に表すキーワードをつける。5語以内とする。
10. 翻訳投稿をする場合、原則として論文「解題」を行う。

《投稿規程》

1. 『ジェンダー研究』の内容は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。
2. 投稿者は、原則として、本学教職員・大学院生・研究生・研修生・卒業生、本研究所の研究員、研究協力員、および本研究所長が認める本研究所の活動に関係の深い研究者(研究プロジェクト参加者、研究会報告者など)とする。
3. 投稿する原稿は未発表の初出原稿とする。
4. 投稿原稿は完成原稿とし、レフェリーによる審査の上、編集委員会が採否を決定する。
5. 投稿申し込みをした後で投稿を辞退する場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。
6. 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表その他が多い場合には、執筆者による自己負担となることがある。
7. 掲載原稿は、抜き刷りを贈呈する。なお、それ以上の部数については、あらかじめ申し出があれば執筆者の自己負担によって増刷できる。
8. 原稿執筆における使用言語は原則として日本語または英語とする。日本語／英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。
9. 投稿原稿は原則として、
 - 9-1. 日本語の原著論文は注・図表を含めて20000字以内、

- 英語の原著論文は注・図表を含めて 8000 語以内、
- 9-2. 日本語の研究ノートは注・図表を含めて 15000 字以内、
英語の研究ノートは注・図表を含めて 6500 語以内、
- 9-3. 日本語の研究活動報告は注・図表を含めて 6000 字以内、
英語の研究活動報告は注・図表を含めて 4500 語以内、
- 9-4. 日本語の書評は 4000 字以内、英語の書評は 1600 語以内とする。
10. 日本語については当用漢字とし、現代仮名づかいを用いる。なお、引用文等に関して旧漢字、旧仮名づかい等の問題が生じる場合には、前もって申し出ること。
11. 論文等の提出時には、名前、論文タイトル(副題も含む)の英語表記も表紙に記しておく。ただし、タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。
12. 図・表・写真および特殊な文字・記号の使用については編集委員会に相談すること。
13. 原則として原稿はワードプロセッサで入力し、原稿を印刷したもの 2 部を提出すること。原稿のデータファイル CD-R 等の媒体に記録して、それを添付して提出のこと。
14. 図・表を使用する場合は、同一ディスクに別ファイルを作成する。
15. 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める『ジェンダー研究』執筆要項に従う。
16. 翻訳の投稿に関しては、投稿者が原著者から翻訳許可の手続きを行い、許可取得後に投稿する。そのさいの費用に関しては投稿者が負担する。なお、翻訳投稿をする場合、原則として論文「解題」を行う。
17. 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、ジェンダー研究所の許可を必要とする。
18. 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。そのさいの費用に関しては投稿者が負担する。
19. 投稿論文や研究ノート等の最終原稿(※)には、
- 19-1. 英文要約を添付する。200 words 以内とする。なお、英文原稿の場合は、要約を日本語としてもよいが、事前に確認のこと。
- 19-2. 内容を的確に表わすキーワードをつける。5ワードまでとする。
- (※)掲載決定後に修正した原稿を指す。

(2016 年 7 月 4 日改定)

【資料】⑨ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー

1. 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下、本研究所)ウェブサイトでは本研究所のイベント開催に際して、イベント参加申込者の個人情報(氏名等により特定の個人を識別できるもの)を、本ウェブページ上にて収集することがあります。
2. 収集した個人情報はイベント開催における会場手配や安全確保、配布資料作成の参考として利用するものであり、本研究所のイベント開催通知以外では利用することはありません。
3. 収集した個人情報の管理は、ウェブ担当者が漏洩、紛失、改竄等に対する安全対策を行うことで保護し、その責任は本研究所所長が最終的に負います。
4. 本研究所では、プライバシー・ポリシーを改定することがあります。改定する場合は、当ウェブサイトでお知らせします。

附 則

このプライバシー・ポリシーは、2015年7月1日から施行します。

国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
ジェンダー研究所（IGS）
2016（平成 28）年度事業報告書

編集担当：申琪榮・和田容子

発行：お茶の水女子大学ジェンダー研究所
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel: 03-5978-5846

igsoffice@cc.ocha.ac.jp

<http://www2.igs.ocha.ac.jp>

2017 年 7 月作成

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

Institute for Gender Studies, Ochanomizu University
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610 Japan

TEL: 03-5978-5846 FAX: 03-5978-5845

igsoffice@cc.ocha.ac.jp

<http://www2.igs.ocha.ac.jp>

